

右御料地ノ面積段別及境界ハ御料局ニ保存スル所ノ圖面ヲ以テ標準トス	上川御料地	錦織御料地	段戸御料地	七宗御料地	木曾御料地		相川御料地	三方御料地	山梨縣
	北海道廳	岐阜縣	愛知縣	岐阜縣	岐阜縣	長野縣	山梨縣	静岡縣	山梨縣
	石狩國	美濃國	三河國	美濃國	飛騨國	信濃國	甲斐國	遠江國	甲斐國
	上川郡	可兒郡	北設樂郡	武儀郡	益田郡	惠那郡	西山梨郡 西山梨郡 西山梨郡	長上郡 長上郡 長上郡 豐田郡	南都留郡

右宮城皇宮御所離宮並寶庫ハ其土地建造物ヲ包含シ其動産ノ世傳御料ニ編入スヘキモノハ別ニ之ヲ定ム

○第三款 府縣鄉村社神官奉務規則

▲明治廿四年七月內務省訓令第十二號

北海道廳 府縣

府縣鄉村社神官奉務規則左ノ通改正ス

府縣鄉村社神官奉務規則

- 第一條 神官ハ神明ニ對シ尊崇悃誠ヲ主トシ典例ニ從ヒ各其本務ヲ盡ス
- 第二條 神官ハ祭祀ノ典則舊來ノ儀式ヲ遵守シテ決テ紛亂スヘカラス其社ノ例祭民俗因襲ノ神賑等ハ適宜行フコトヲ得
- 第三條 神官ハ人民ノ請求ニ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ケナシト雖トモ尙モ貪汚ノ所爲アルヘカラス
- 第四條 神官ハ社殿及其境内ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注キ舊觀ヲ失墜セス汚穢破損ニ至ラシムヘカラス
- 第五條 神官ハ神社所藏ノ寶物什器及古文書類ヲ監護シテ散逸セシムヘ

○第一類○行政法 ○府縣鄉村社神官奉務規則 ○官國幣社保存金配付年限

カラス如何ナル場合ト雖トモ賣却讓與又ハ質入書入スヘカラス
 第六條 神官ハ神社所有ノ財産ヲ管理シ金穀ヲ出納スヘシ
 第七條 神官ハ其管理ニ係ル不動産積立金穀ヲ濫リニ賣却讓與又ハ質入
 書入スヘカラス若シ不得止必要アルトキハ氏子又ハ信徒ノ協議ヲ經地
 方廳ノ許可ヲ受クヘシ
 第八條 神社ニ委託山林アルトキハ其栽植伐採其他山林ノ保護ニ注意シ
 損害ヲ來スカ如キコトナカラシムルヲ要ス

○第四款 官國幣社保存金配付年限

▲明治廿三年十一月內務省訓令第四十一號 北海道廳 府縣 沖繩縣
 官國幣社保存金配付ノ年限ハ更ニ明治二十年度ヨリ三十年間トス

○第五款 神社寺院總代選舉ノ件

▲明治廿四年五月內務省訓令第八號
 明治十四年當省乙第三十三號達中共有ノ二字ヲ社寺有ト改メ末條ニ左ノ
 一項ヲ增補ス
 總代人ハ滿三年毎ニ改撰市町村役場若ハ戶長役場へ届出シムヘシ尤モ

期限内ト雖トモ犯罪其他不良ノ所爲アルトキハ臨時改撰セシムヘシ
 但臨時改撰ノ外ハ前總代人再三當撰スルモ妨ケナシ

(參照)

內務省乙第三十三號達(明治十四年七月二十一日)
 各管内社寺總代人之儀氏子檀家中 氏子檀家ナキ 相應ノ財産ヲ有シ衆望ノ歸スルモノ三名以
 上相撰ミ戶長役場へ届出サセ今後該社寺ノ願屆等ハ渾テ連署ヲ以可爲差出且社寺收入財産
 ハ田畑山林ノ所得ハ勿論賽物祈禱雜 儀同向料等一切ノ受納物ナ云フ 其共有ニ屬スヘキモノト其神官住職ニ付スルモノトノ
 豫約毎社寺適宜相定平素混亂セサル様取調方可爲致此旨相達候事
 但神宮官國幣社非此限

○第六款 社寺上地官林委託規則

▲明治廿四年四月農商務省令第五號
 明治二十三年勅令第六十九號官有森林原野及產物特別處分規則第三條ニ
 據リ社寺上地官林委託規則左ノ通之ヲ定ム

社寺上地官林委託規則

第一條 社寺ニ於テ上地官林ノ委託ヲ請ケント欲スルトキハ願書ニ其ノ
 創立ノ年代由緒資格出願地ノ字名區域段別樹種別木數(竹ハ三寸回り
 以上ノ數量)維持方法氏子檀徒信徒ノ概數等ヲ詳記シ年限ヲ定メ圖面

○第一類○行政法 ○神社寺院總代選舉ノ件
 ○社寺上地官林委託規則

ヲ添へ神官住職及ヒ氏子檀徒總代氏子檀徒ヲキモ三名以上連署シ寺院

ハ管長ノ與書ヲ經テ所轄大林區署長ニ差出スヘシ

第二條 社寺上地官林ノ委託ハ此ノ規則中特ニ定メタル場合ノ外十五年ヲ以テ限度トス委託年限ヲ經過シ尙ホ引續キ其ノ委託ヲ請ケント欲スルトキハ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條 社寺ハ委託前他人ニ於テ採取ノ許可ヲ得其ノ期限内ニ係ルモノヲ除クノ外委託官林内ノ副産物即チ樹實菌蕈落枝落葉下草晚筍ノ類ヲ無代價ニテ收得スルコトヲ得

第四條 社寺ハ所轄大林區署長ノ許可ヲ得テ委託官林内ニ建造物ヲ設ケ又ハ竹木栽植シ若クハ林地ヲ使用スルコトヲ得

前項ニ據リ竹木ノ栽植ヲ爲シタルトキハ其ノ栽植地ノ委託ハ新植ノ年度ヨリ起算シ該限度ヲ超過スルヲ許サス

第五條 社寺ハ風致其ノ他水源涵養土砂并止等總テ公共ノ利益ニ關スルモノヲ除キ所轄大林區署長ノ許可ヲ得テ其ノ栽植ニ係ル竹ヲ伐採スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ社寺ハ其ノ伐採シタル竹木相當價格ノ二分ノ一ヲ所轄大林區署ニ納付スヘシ

第六條 社寺ハ其ノ建築又ハ修繕用ニ供セントスルトキハ委託官林内ニ來ノ竹木ニシテ風致其ノ他水源涵養土砂并止等總テ公共ノ利益ニ關スルモノヲ除キ相當代價ヲ以テ特賣ヲ所轄大林區署長ニ請求スルコトヲ得

前項ニ據リ賣渡ヲ受ケタル竹木ヲ目的外ニ使用シ又ハ轉賣シ若クハ讓與シタルトキハ其ノ賣渡代價ノ二倍ヲ徵收スヘシ

第七條 社寺ハ其ノ委託官林保護ノ責ニ任シ且ツ四至ニ境界標ヲ建設スヘシ

前項ノ境界標ハ委託許可ノ日ヨリ十日以内ニ之ヲ建設シ委託官林ノ段別境界ノ方位許可ノ年月日及ヒ某社寺ノ請ケタル委託官林タルコトヲ明瞭ニ表記スヘシ

第八條 社寺ハ第四條ニ據リ委託官林内ニ竹木栽植ノ許可ヲ受ケタル日ヨリ十日以内ニ其ノ栽植地ノ四至ニ標杭ヲ建設シ栽植地ノ段別境界ノ方位許可ノ年月日及ヒ某社寺ノ請ケタル委託官林内ノ栽植地タルコトヲ明瞭ニ表記スヘシ

第九條 社寺ニ於テ委託官林内ノ竹木ヲ斫伐シ副産物ヲ採取スルトキハ凡テ所轄大林區署長ノ指示スル方法ニ據ルヘシ

○第一類○行政法○社寺上地官林委託規則

第十條 社寺ニ於テ委託官林ノ手入ヲナサントスルトキハ所轄大林區署長ノ許可ヲ受クヘシ

第十一條 第四條第五條第六條第十條ニ依リ差出スヘキ願書ニハ神官住職及ヒ氏子檀徒若クハ信徒總代ノ連署ヲ要ス

第十二條 斫伐ノ許可ヲ受ケタル竹木ハ所轄大林區署長ノ引渡ヲ受クルニアラサレハ之ヲ伐採スルコトヲ得ス

但引渡ヲ受ケタル竹木ト雖モ其ノ根株ハ特ニ許可シタルモノ、外掘採スルコトヲ得ス

第十三條 社寺ハ其ノ委託官林ヲ他ニ轉貸スルコトヲ得ス

第十四條 左ノ場合ニ於テハ社寺ハ事由ヲ認メ速ニ所轄大林區署長ニ届出ヘシ

但第二第三第四及ヒ第五ノ場合ニ於テハ所轄大林區署長ノ検査ヲ受クヘシ

一 看守人ヲ置キ又ハ廢シタルトキ

二 委託官林ニ係ル犯罪其ノ他異狀ノ事故アリタルトキ

三 道路電線耕地宅地家屋等ニ對スル障害木アリタルトキ

四 林地ノ使用若クハ栽植ヲ終ハリタルトキ但竹木ノ栽植ヲナシタル

トキハ其ノ栽植實費取調書ヲ添付スヘシ

五 竹木ヲ斫伐シ及ヒ運搬ヲ終ハリタルトキ

第十五條 左ノ場合ニ於テハ所轄大林區署長ハ委託期限中ト雖モ其ノ委託ヲ解クコトヲ得

一 官用又ハ公用ノ爲メ必要アルトキ但此場合ニ於テハ委託中社寺ノ費用ヲ以テ栽植シタル竹木ニ就テハ其ノ栽植實費ヲ賠償ス

二 此ノ規則ニ定メタル制限及ヒ條件ニ違背シタルトキ但社寺ノ栽植ニ係ル竹木ハ之ヲ官沒ス

第十六條 竹木及ヒ副産物ノ斫伐採取其ノ他林地使用ノ爲メ若クハ故意怠慢ニ依リ委託官林ニ傷害ヲ生シ又ハ生セントスルトキハ所轄大林區署長ハ其ノ斫伐採取使用ヲ停止若クハ禁止シ尙ホ其ノ委託ヲ解クコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ損害アルトキハ社寺ニ於テ其ノ賠償ノ責ニ任スヘシ第十七條 社寺ニ於テ此規則ヲ履行スルニ因リテ生スル費用ハ社寺ノ負擔トス

(參照)

勅令第六十九號官有森林原野及産物特別處分規則(明治二十三年四月五日官報)抄録

第三條 農商務大臣ハ相當ノ年限ヲ定メ社寺土地官林ノ全部又ハ幾分ヲ該社寺ニ委託シ
其林地ノ使用ヲ許可シ又ハ其林地ノ產物ヲ下附スルコトヲ得

▲明治廿四年五月宮内省告示第九號

御料地ノ内社寺ノ土地ニ係ルモノハ該社寺ノ出願ニ依リ本年四月農商務
省令第五號社寺土地官林委託規則ヲ適用シ之ヲ委託スルコトアルヘキニ
付委託ヲ請ケントスル社寺ハ左ノ區別ニ從ヒ出願スヘシ

- 一 御料局支廳又ハ事務所ノ所管ニ屬スル御料地ニ對シテハ該支廳長
又ハ事務所長
- 一 地方廳ニ委託シタル御料地ニ對シテハ該地方長官
- 一 以上列記外ノ御料地ニ對シテハ總テ御料局長

○第七款 地方廳委任條件

▲明治廿三年十二月遞信省訓令第八號 北海道廳 府縣

本年十月勅令第二百十九號船籍規則第七條ノ手数料收納ハ北海道廳長官
府縣知事ニ委任ス其取扱手續ハ本年當省訓令第三號及左記ノ三項ニ準據
スヘシ

一 手数料收納取扱ニ係ル會計規則第九十條第九十一條第一項第九十二

條及第百條ノ本廳大臣ノ職務ハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ執行ス
ヘシ

一 船籍書證及假證書ヲ交付セル船舶ハ其船名並船主氏名記入ノ仕譯書
ヲ毎月收入報告書ト同時ニ當省ヘ差出スヘシ但日本形西洋形ヲ分チ
西洋形ハ汽船帆船ヲ別ツヘシ

一 收入科目ハ免許及手数料ノ款手数料ノ項船籍證書手数料ノ目ヲ以テ
整理スヘシ

▲明治廿四年三月農商務省訓令第十號

自今左記ノ條件稟請ヲ要セス處分後報告スヘシ

- 一 官有山林原野ノ枯木倒木危險木障害木處分ノ件
- 二 官有山林原野中測量ニ支障ノ立竹木伐採ノ件
- 三 官有山林原野ニ於テ季節アル產物賣却ノ件
- 四 官有山林原野ヲ官林ヘ編入ノ件
- 五 官有山林原野地種目組替ニ付地上立竹木賣却ノ件
- 六 官有山林原野ヘ公益ノ爲メ竹木獻植ノ件
- 七 非常ノ際治水ノ爲メ官有山林原野ノ立竹木處分ノ件
- 八 官有山林原野ニ於テ鑛業上必要ナル地所貸渡ノ件

○第一類○行政法○地方廳委任條件

- 九 官有山林原野一區域段別五町步以下ニシテ一箇年借受料金五十圓以下ノ土地貸渡ノ件
但數區域ニシテ五町步ヲ超過スルトキハ此限ニアラス
- 十 從來ノ慣行ニ由リ官有山林原野國土保安ニ關係ナキ箇所ニ於テ代金五十圓以下ノ土石賣却ノ件
- 十一 官有山林原野ニ於テ墓地火葬場汚穢物埋却場及斃牛馬捨場新設又ハ取廣メノ爲メ段別一町步以下賣却ノ件
- 十二 官有山林原野一段歩以内ニシテ賣渡代金十圓以下ノ箇所民有地又ハ河川道路等ニ介在セルモノ接續地主へ賣却ノ件
以上十二項ハ北海道廳沖繩縣ヲ除ク
- 十三 試掘並ニ借區廢業願聞届ノ件
- 十四 鑛山借區稅怠納者鑛業禁止ノ件
- 十五 試掘期限經過ノ者指令書並ニ借區期限經過ノ者坑區券引揚ノ件
但以上十三項乃至十五項ノ場合ニ於テハ報告ノ際該證券若クハ指令書ヲ添附スヘシ
- 十六 試掘借區廢業期限經過若クハ禁止後鑛業跡取締ノ件
- 十七 砂鐵ノ爐稼願許可ノ件

十八 砂金砂錫砂鐵採取人及爐稼人相續加除名並讓受渡願許可ノ件
▲明治廿四年七月內務省令第八號 府 縣 (沖繩縣ヲ除ク)
明治十九年(三月)當省令第一號中第五項ヨリ第十四項ニ至ルマテ並第二十項及第二十一項ヲ削除ス

(參照)

內務省令第一號明治十九年三月十二日抄錄

自今左ニ掲ル條件ハ稟請ヲ要セス處分シテ後報告スヘシ但報告期限ハ別ニ之ヲ定ム

第五項乃至第十四項

- 一 地租改正以前ヨリ人民ノ埋葬シ來リタル官有墓地ヲ民有墓地ニ組替ル事
- 一 耕地地ニ非サル民有地ヲ斃牛馬捨場ニ撰定シ及之ヲ廢スル事
- 一 廢合神社跡地ヲ明治八年乙第百十三號達ニ準シ處分スル事
- 一 民設ノ用惡水路堤塘溜池井溝ヲ官有地ニ組換並ニ明治九年乙第八十一號達同十六年乙第四十五號達ニ依リ代地ヲ下ケ渡ス事
- 一 官有市街地ヲ明治十三年太政官第六號達ニ依リ公立小學校公立中學校公立專門學校敷地ニ附與スル事
- 一 人民ノ願ニ依リ土地建物ノ寄附ヲ許可シ其土地ヲ官有ニ組替ル事
- 一 官有ノ湖沼池等埋立ノ事
- 一 但工事ノ一町步以上ニ涉ルモノハ此限ニアラス
- 一 素地相當代價ノ既定セル開墾地ヲ拂下ル事

○第一類○行政法○地方廳委任條件

但河川ノ寄洲川沿ニ係ル地所ハ此限ニアラス

一土石砂利ヲ掘取及拂下ル事

但修路治水ニ害アルヘキモノハ此限ニアラス

一地方税ノ經濟ニ於テ土地建物ヲ買上及拂下ル事

第二十項

一養魚其他殖産ノ爲メ官有池沼ヲ貸渡ス事

第二十二項

一社寺境内一時貸下ノ事

▲明治廿四年七月内務省訓令第十四號

北海道廳 府縣

第一條 官有土地水面ニ關スル處分ノ内左ニ掲クルモノハ之ヲ委任ス但

處分ノ後内務報告例ニ依リ報告スヘシ

一官有堤塘道路並木敷港灣河川溝渠溜池用悪水路等ノ新設修繕ニ際シ

官有土地水面ヲ其敷地ニ充用スル事

二北海道ニ於テ警察署郡區役所戶長役場及官立學校病院等ノ敷地ニ官

有土地ヲ充用スル事

三直接公用ニ供シタル官有土地水面ヲ相當ノ料金ヲ徴シ季節ヲ限リ一

時ノ使用ヲ許シ並從前既ニ許可シタルモノ、繼續使用ヲ許ス事

四明治二十三年(七月)勅令第三百三十五號官有地特別處分規則第二條ニ

依リ官有土地水面ノ使用ヲ許ス事

五直接公用ニ供セサル五町歩以下ノ官有土地水面ヲ相當ノ料金ヲ徴シ

貸付スル事

六府縣ニ於テ五町歩以下ノ官有土地ヲ明治二十三年(十一月)勅令第二

百七十六號官有地取扱規則第七條ニ依リ貸付スル事

七直接公用ニ供セサル官有土地水面市街ニ在テハ百五十坪以下村落ニ

在テハ三段歩以下ノ箇所ヲ賣拂フ事

八府縣ニ於テ豫約代價ヲ以テ開墾既成ノ土地ヲ賣拂フ事

九明治二十三年(七月)勅令第三百三十五號官有地特別處分規則第三條並

同年(十一月)勅令第二百七十五號官有財產管理規則第十二條及第十

三條ニ依リ一段歩以下ノ官有土地水面ヲ讓與スル事

十明治二十三年(十月)當省訓令第三十六號ニ依リ直接公用ニ供シタル

官有水面一町歩以下ヲ埋立ツル事並同上ノ訓令ニ依リ埋立成功ノ後

其土地ヲ處分スル事

十一官有土地水面ニ屬スル土石砂利並水陸ノ生産物ヲ賣拂フ事

十二官有土地ニ屬スル枯損障害又ハ測量ニ支障アル竹木ヲ伐採シ及處

分スル事並盜伐誤伐ニ係ル竹木處分ノ事

○第一類○行政法○地方廳委任條件

十三天災事變ニ際シ公益ノ爲メ必要已ムコトヲ得サル場合ニ於テ官有土地ニ屬スル竹木ヲ伐採シ及處分スル事
十四各廳ノ所用ニ供スルモノヲ除ク外民有土地ノ寄付ヲ受納シ並民有土地ノ上地ヲ許可スル事
十五前各項ノ處分其他官廳ノ處分又ハ形質ノ變更所用ノ廢改等ニ基キ官民有土地水面ノ種目ヲ變換スル事但皇宮地及各廳ノ所用地ニ關スルトキハ此限ニアテス

第二條 前條ノ官有土地水面ニシテ當省直轄又ハ流域兩管轄以上ニ跨ル河川及國道港灣河口ニ關係アルモノハ先ツ土木監督署ニ協議シテ本大臣ニ稟議スヘシ
官國幣社延喜式內國史現在神社境內ニ關係アルモノモ亦本大臣ニ稟議スヘシ

第二條 明治八年(五月)當省達乙第六十五號第一項及第二項並同十二年(六月)當省達乙第二十九號同十七年(二月)當省達乙第十號ハ之ヲ廢止ス(參照)

內務省達乙第六十五號明治八年五月二十三日抄錄
從前官有地ニ生産スル動植物拂下ノ儀ハ當省(何ノ)上處分致來候處中ニハ年々季節ヲ追

ヒ一時生産ノモノ有之右等其都度伺テ候候テハ自然收得ノ季節ヲ失ヒ候儀モ有之候間自今左ノ種類處分ノ儀ハ府縣廳へ委任候條直ニ入札拂取計代料納方手續ノ儀ハ本年當省乙第二十一號達ニ照準可取計此旨相達候事

種類

第一項

一官有ノ池沼ニ生スル魚鱉或水草蓮根ノ類

第二項

一官有地ニ生スル檀實又ハ茶桑葉ノ類

明治十二年(六月二十五日)內務省達乙第二十九號ハ府縣官職制中土地處分ノ內府縣へ委任條件ナリ

明治十七年(二月十三日)內務省達乙第十號ハ府縣官職制中土地處分ノ內府縣へ委任條件中追加ナリ

勅令第三百三十五號官有地特別處分規則(明治二十三年七月二十二日官報抄錄)

第二條 直接公用ニ供スル官有地ヲ特ニ府縣郡市町村又ハ公共組合ノ直接公用ニ供スルトキハ借地料ヲ徵收セサルモノトス

第三條 府縣郡市町村又ハ公共組合ニシテ直接公用ニ供スル官有地ノ修理保存費ヲ負擔スルモノハ其直接公用ヲ廢スルトキ官有財産管理上必要ノモノヲ除ク外之ヲ其費用負擔者ニ無代下付ス府縣郡市町村又ハ公共組合ニ於テ其土地ヲ賣拂ハントスルトキハ隣接地主ハ先買ノ權ヲ有スルモノトス

勅令第二百七十五號官有財産管理規則(明治二十三年十一月二十五日官報抄錄)

○第一類○行政法○地方廳委任條件

第十二條 府縣郡市町村公共ノ道路、公園、市場、河川竝木敷、堤塘、溝渠等ノ用ニ供スル爲官有ノ土地森林ヲ必要トスルトキハ主管大臣ニ於テ之ヲ其ノ府縣郡市町村ニ讓與スルコトヲ得

第十三條 府縣郡市町村ニ於テ新ニ道路、公園、市場、河川竝木敷、堤塘、溝渠等ヲ開設シ爲ニ不用ニ歸シタル官有ノ舊同種類ノ土地ハ内務大臣ニ於テ其ノ府縣郡市町村ニ讓與スルコトヲ得但シ官林内若ハ官廳使用地内ニ包含セルモノ又ハ他ノ官有財産保護上離權シ難キモノハ此ノ限ニアラス

勅令第二百七十六號官有地取扱規則(明治二十三年十一月二十五日官報)抄録

第七條 官有地ヲ開墾センコトヲ請フモノアルトキハ無料ニテ之ヲ貸付スヘシ但開墾成功ノ後事業者ニ於テ該地ヲ拂下ケントスルトキハ豫メ契約ニ依テ其代價ヲ定メ置クヘシ
明治二十三年(十月二十日)内務省勅令第三十六號ハ官ニ屬スル公有水面埋立ノ出願免許方ナリ

○第八款 官有財産管理規則

▲明治廿三年十一月勅令第二百七十五號

朕官有財産管理規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二百七十五號

官有財産管理規則

第一條 此ノ規則ニ於テ官有財産ト稱スルハ國ノ所有ニ屬スル土地、森林、原野、營造物、家屋、船舶及其ノ附屬物トス

第二條 官有財産ハ主管ノ各省大臣之ヲ管理ス

第三條 官有財産ノ賣拂、讓與、交換及貸付ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外總テ此ノ規則ニ依ルヘシ

第四條 官有財産賣拂代金ハ其ノ財産引渡ノ際一時ニ納付セシムヘシ

第五條 官有財産ヲ貸付スルトキハ其ノ貸付料ヲ徴收スヘシ但シ公益ノ爲官有財産ヲ貸付シ又ハ森林經濟ノ爲森林ヲ貸付スルトキハ別ニ主管大臣ノ定ムル所ノ規則ニ依ル

第六條 官有財産ノ貸付料ハ毎年前納セシムヘシ若シ前納スル能ハサルトキハ相當ノ保證ヲ出サシムヘシ
貸付財産ノ修理其ノ他ノ費用ヲ負擔スル方法ハ貸付契約ヲ爲ストキ之ヲ定ムヘシ

第七條 官有財産ノ貸付ハ左ノ期限ヲ超ユルコトヲ得ス

第一 樹木培養ニ供スル土地ハ八十年以内

第二 農工其ノ他ノ營業及住居ニ供スル土地ハ三十年以内

第三 土地森林ノ使用權ハ十五年以内

○第一類○行政法○官有財産管理規則

第四 右ニ掲ケサル物件ハ三年以内

第八條 官有財産ノ貸付期限中政府ニ於テ之ヲ國ノ使用ニ供スルノ必要
アルトキハ貸付ノ契約ヲ解キ之ヲ返還セシムヘシ
前項ノ場合ニ於テ借受人ハ其ノ直接ニ受ケタル損失ニ付賠償ヲ求ムル
コトヲ得

第九條 官有財産ノ借受人ニシテ主管大臣ノ許可ヲ得スシテ其ノ財産ノ
原形ヲ變シ若ハ故意怠慢ニ由リ之ヲ荒廢ニ歸シ又ハ毀損亡失シタルト
キハ主管大臣ハ其ノ損失ヲ賠償セシムヘシ

第十條 官有財産ノ借受人ハ主管大臣ノ許可ヲ得ルニアラサレハ其ノ財
産ヲ他人ニ轉貸スルコトヲ得ス

第十一條 官有財産ヲ以テ他人ノ所有物ト交換スルコトヲ得ルハ同一種
類ノ財産ニシテ少クモ評定價格相均キモノニ限ル
森林、原野、田畑ハ同一種類ノ財産ト見做スコトヲ得

營造物、家屋、船舶及其ノ附屬物ハ他人ノ所有物ト交換スルコトヲ得ス
第十二條 府縣都市町村公共ノ道路、公園、市場、河川、竝木敷、堤塘、溝渠
等ノ用ニ供スル爲官有ノ土地森林ヲ必要トスルトキハ主管大臣ニ於テ
之ヲ其ノ府縣都市町村ニ讓與スルコトヲ得

第十三條 府縣都市町村ニ於テ新ニ道路、公園、市場、河川、竝木敷、堤塘、
溝渠等ヲ開設シ爲ニ不用ニ歸シタル官有ノ舊同種類ノ土地ハ内務大臣
ニ於テ其ノ府縣都市町村ニ讓與スルコトヲ得但シ官林内若ハ官廳使用
地内ニ包含セルモノ又ハ他ノ官有財産保護上離權シ難キモノハ此ノ限
ニアラス

第十四條 官有財産ヲ賣拂貸付若ハ交換スル場合ニ於テ其ノ財産ヲ管理
シ若ハ其ノ取扱ヲ爲ス官吏ハ之ヲ買受ケ又ハ自己ノ所有物ト交換スル
コトヲ得ス

第十五條 此ノ規則施行ノ前ニ官有財産ノ賣拂若ハ貸付ノ契約ヲ爲シタ
ルモノハ其ノ契約ノ滿期マテ總テ舊契約ニ依ルヘシ
貸付ノ期限ヲキモノハ此ノ規則施行ノ日ヨリ三箇年以内ニ於テ此ノ規
則ニ依リ更ニ契約ヲ爲スヘシ

第十六條 各省大臣ハ每十年其ノ年三月三十一日ニ現在スル所管官有財
産ノ目錄ヲ調製シ其ノ年開會ノ帝國議會ニ報告ノ手續ヲ爲スヘシ
第十七條 各省大臣ハ每會計年度間ニ於ケル所管官有財産ノ増減異動報
告書ヲ調製シ翌年度開會ノ帝國議會ニ報告ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 第十六條ノ目錄及第十七條ノ報告書ハ其ノ事由ニ依テ區別シ

○第一類○行政法○官有財産管理規則

左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 買入ニ係ルモノハ其ノ代價
- 第二 賣拂ニ係ルモノハ各廳ニ於テ定メタル最低賣價、實際ノ賣拂代價及目錄價格アルモノハ其ノ價格
- 第三 讓與交換又ハ亡失毀損等ニ係ルモノハ其ノ目錄價格
- 第四 交換ニ係ルモノハ其ノ交換ニ由テ得タル財產
- 第五 買入又ハ賣拂ノ契約ニ特別ノ條件アルモノハ其ノ條件
- 第十九條 此ノ規則第十六條ニ掲クル官有財產ノ目錄ニシテ第一回ノモノハ明治二十四年三月三十一日ノ現在高キ以テ同年六月三十日マテニ之ヲ調製スヘシ但シ調査未濟ノ官有財產ハ調査ヲ了ルマテ其ノ概算ヲ目錄ニ掲クヘシ
- 第二十條 此ノ規則ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

○第九款 帝國議會用財産管理ノ件

▲明治廿四年二月勅令第十五號

朕帝國議會ノ用ニ供スル官有財産ニ關スル條件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第十五號

第一條 帝國議會ノ用ニ供スル官有財産ニ關スル行政事務ハ各院書記官長之ヲ掌ル

第二條 前條事務ノ指揮監督ハ内務大臣之ヲ行フ

○第十款 森林原野及產物特別處分規則

▲明治廿三年十二月勅令第二百八十二號

朕官有森林原野及產物特別處分規則中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二百八十二號

明治二十三年(四月)勅令第六十九號官有森林原野及產物特別處分規則中左ノ通追加ス

第一條

十八 河海沼湖濠池ノ埋立ニ要スル土石ヲ賣渡ストキ

第三條 農商務大臣ハ相當ノ年限ヲ定メ社寺上地官林ノ全部又ハ幾分ヲ

○第一類○行政法 ○帝國議會用財産管理ノ件 ○森林原野及產物特別處分規則

該社寺ニ委托シ其林地ノ使用ヲ許可シ又ハ其林地ノ產物ヲ下附スルコトヲ得

▲明治廿四年六月勅令第六十六號

朕官有森林原野及產物特別處分規則中追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十六號

明治二十三年(四月)勅令第六十九號官有森林原野及產物特別處分規則中左ノ通追加ス

第四條 農商務大臣ハ社寺上地官林又ハ特別ノ緣故アル官有森林原野ニ

シテ存置ヲ要セスト認メタルモノハ其社寺又ハ其緣故アル者ニ限リ隨意ノ契約ヲ以テ賣渡スコトヲ得

▲明治廿四年七月農商務省告示第七號

官有森林原野ノ公賣ハ明治二十三年五月當省告示第四號林產物公賣規程ニ準シ施行ス

○第十一款 外交官及領事官等定員ノ件

▲明治廿三年十二月勅令第二百八十三號

朕茲ニ外交官、領事官及書記生ノ定員ヲ裁可ス

御名 御璽

勅令第二百八十三號

特命全權公使辦理公使代理公使ハ通シテ十名トス

公使館參事官、公使館書記官及交際官試補ハ通シテ二十八名トス

總領事、領事、副領事及貿易事務官ハ通シテ二十七名トス

公使館及領事館書記生ハ通シテ七十二名トス

無任所外交官及無任所領事官ハ右定員ノ内ニ算入セス

○第十二款 日本帝國領事規則

▲明治廿四年六月勅令第六十四號

朕日本帝國領事規則中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第六十四號

日本帝國領事規則中領事手数料及出張入費表目十項十一項左ノ通改正ス
十 船舶賣却及抵當ノ公認

○第一類 ○行政法 ○外交官及領事官等定員ノ件

登簿噸數十五噸以下	百五十石以下	五十錢
同	十五噸以上百噸以下	一圓
同	百噸以上千石以上	四圓
十一	國旗掲揚ノ認可書	

手数料ノ割合十項ニ同シ

(參照)

勅令第八十號日本帝國領事規則(明治二十三年五月二十日官報)抄錄

領事手数料及出張入費表目

十 船舶賣却及抵當ノ公認 四圓

十一 國旗掲揚ノ認可書 四圓

第十三款 外交官賜暇歸朝規則

▲明治廿四年七月勅令第七十四號

除外交官領事官貿易事務官公使館書記生及領事館書記生賜暇歸朝規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第七十四號

外交官領事官貿易事務官公使館書記生及領事館書記生賜暇歸朝規則

第一條 外交官領事官貿易事務官公使館書記生及領事館書記生引續歐米諸國ニ滿四年以上又ハ東洋及南洋諸國ニ滿三年以上在勤シタルトキハ外務大臣ハ公務ニ差支ナキ場合ニ限リ本人ノ願ニ依リ賜暇歸朝ヲ許可スルコトヲ得

第二條 歐米諸國ト東洋及南洋諸國ノ間ニ轉勤シタル場合ニ於テハ前條ノ在勤年期ハ新任國在勤ノ例ニ依ル但轉勤ノ後滿二年以上在勤スルヲ要ス

第三條 賜暇歸朝ノ者ハ往復日數ヲ除キ滿六箇月以内ニ出發歸任スヘシ但相當ノ理由アリテ期限内ニ出發シ難キ者ハ外務大臣ニ於テ豫メ日ヲ限リ特ニ出發延期ヲ許可スルコトアルヘシ

第十四款 內務報告例

▲明治廿三年八月內務省訓令第三十號

應府縣 憲兵司令部 集治監 假留 監

明治二十一年(十月)內務省訓令第二十號內務報告例別冊ノ通更定ス但別冊ハ別ニ頒ツ

○第一類 ○行政法 ○外交官賜暇歸朝規則 ○內務報告例

(別冊)
内務報告例

汎則

第一條 報告例ハ警視廳北海道廳府縣廳及憲兵司令部集治監假留監ニ於テ法律命令ヲ執行シ或ハ各長官權内ノ事務ヲ處分シタル事項ニ就キ緩急輕重ニ從ヒ内務ニ屬スル事項年報第一項ヲ除クヲ報告ス可キ順序ヲ示ス者ナリ

但凡ソ各廳ノ經費豫算決算等ニ關スル諸報告並氣象報告ハ別ニ定メタル規則ニ依準ス可シ

第二條 報告ヲ分テ日報週報月報半年報年報ノ五種トス

第三條 日報ハ毎日週報ハ每週月報ハ毎月半年報ハ每半年年報ハ毎年各一回報告スル者トス

第四條 報告ハ直接使命ノ外總テ郵便ニ付ス可シ

但例日日報中第十一第十二第二十四第二十五ニシテ事重大ナル者ハ即時電信ニテ報告ス可シ

第五條 報告期限ハ従前成規アル者ト否ラサルトテ問ハス總テ本例ニ於テ指定シタル時日マテニ發送ス可シ

第六條 報告ノ書類ハ他ノ文書ト混同セサルカ爲メ別紙雛形ノ通り一切墨線ノ野紙ヲ用井五種ニ通用ス可シ

但表式ハ白紙ヲ用フルモ妨ナシ

第七條 警察令及廳府縣令告示其他印刷シタル者ハ更ニ料紙ニ謄寫スルニ及ハスト雖モ料紙大ノ無野美濃紙一葉ニ滿タサル者ハ半葉ニスルモ妨ケナシニ印刷又ハ貼付シテ進達ス可シ

第八條 凡ソ報告書ハ添書ヲ要セス其記載方ハ一事件又ハ一表毎ニ紙頁ヲ改メ警察令及廳府縣令告示雖モ連載ス可カラス紙末又ハ冊尾適宜ノ所ニ於テ年月日宛名ヲ記シ長官署名調印ス可シ

但例目番號ノ肩ニ記スル文字ノ同一ナル者例ハ日報中ノ廳府縣處務細則ト議長改選トノ類ヲ二件以上ヲ同時ニ報告スルトキニ限り纏メテ一括トシ紙頁ハ之ヲ改ム目録ヲ付シ其年月日宛名長官ノ署名調印ハ目録紙ノ末ニ於テス可シ然ルトキハ一事件又ハ一表毎ニ之ヲ爲スニ及ハス

第九條 諸圖面等ハ其事柄ニ依リ大小廣狹ノ差違アルハ勿論ナレハ豫メ一定シ難シト雖モ成ル可ク美濃紙一葉ニ調製スルヲ要ス其縮小シ得可キ者ハ半葉ニ調製スルモ妨ケナシ

○第一類○行政法○内務報告例

但編綴ノ爲メ四隅ニ餘白ヲ存ス可シ

第十條 諸表様式ニハ横線ノミヲ示ス者ト雖モ進達ノ表ニハ縦線ヲ加フ可シ又登記ス可キ事項ナキ空欄アラハ縦線ヲ填充シテ脱漏ニ非サルヲ證ス可シ

第十一條 諸表様式ハ已ニ頒布ノ者ト雖モ執務者ノ便ヲ圖リ茲ニ彙集シテ本例ニ編入ス若シ今後命令訓令ニ依リ改正ヲ來ス可キ事アルトキハ延テ本例ニ及フ者トス

第十二條 今後新タニ發スル所ノ命令訓令中ニ於テ期限ヲ定メ報告ヲ要スル旨ヲ記載シタルトキハ其報告ノ種類ニ依リ此例目中ニ追加シタル者ト看做可シ

第十三條 數位ヲ以テ記入スル事實ニシテ前年ト比較シ著シキ増減アル者ハ其事由ヲ表尾ヘ付記ス可シ

第十四條 數位ハ金員ハ厘位ニ量數ハ合位ニ坪數ハ才位ニ段別ハ步位等ニ止メ一位ニ付シ傍ヘ圓石坪等ノ文字ヲ記載ス可シ

但表尾ニ特ニ數位ヲ示セル者ハ此限ニアラス
第十五條 本例目ニ掲載セサル者内訓ハ之ヲ除クハ總テ報告ニ及ハス但異例又ハ重要ノ事項ハ此限ニアラス

内務報告例目以下略ス

○第十五款 東京市區改正條例

▲明治廿三年八月勅令第百六十九號

朕東京市區改正條例中削除ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

勅令第百六十九號

東京市區改正條例中第八條ヲ削除ス

▲明治廿三年八月勅令第百七十號

朕東京市區改正條例東京市區改正土地建物處分規則及東京區内清酒輸入規則ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第百七十號

第一條 東京市區改正條例東京市區改正土地建物處分規則及東京府區内清酒輸入規則ノ規定ニ依リ東京府知事ニ屬スル事務ハ東京市參事會ニ之ヲ屬セシメ東京府市部會ニ屬スルモノハ東京市會ニ之ヲ屬セシム
第二條 市區改正ノ費用ヲ補助スル爲メ東京府市部ノ基本財産トシテ下

○第一類○行政法 ○東京市區改正條例
○土木工事業者保證金ノ件

付シタル河岸地ハ之ヲ東京市ニ引繼クヘシ

第三條 明治二十三年度東京市區改正ノ收支豫算ニシテ東京府市部會ノ議定ヲ經タルモノハ東京市ニ於テ之ヲ存續スヘシ

▲明治廿三年八月閣令第六號

明治二十一年(八月)閣令第十四號東京市區改正委員會組織權限中東京府區部會トアルヲ東京市會ト改メ東京府知事トアルヲ東京市參事會ト改ム

○第十六款 土木工事起業者保證金ノ件

▲明治廿四年三月勅令第二十六號

朕土木工事起業者保證金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二十六號

土木工事ヲ特許スルニ方リ當該官廳ハ其起業者ヲシテ保證金ヲ納付セシムルコトヲ得

但有價證券ヲ以テ代用セシムルモ妨ケナシ

○第十七款 土木監督署并派出所位置

▲明治廿三年八月內務省告示第二十五號
土木監督署並派出所位置左ノ如シ

第一區土木監督署	東京府管下	東京
同 派出所	靜岡縣管下	靜岡
第二區土木監督署	宮城縣管下	仙臺
第三區土木監督署	新潟縣管下	新潟
第四區土木監督署	大阪府管下	大阪
同 派出所	三重縣管下	桑名
第五區土木監督署	廣島縣管下	廣島
第六區土木監督署	福岡縣管下	久留米

○第十八款 判事懲戒法

▲明治廿三年八月法律第六十八號

朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第六十八號

判事懲戒法

○第一類 ○行政法 ○土木監督署并派出所位置 ○判事懲戒法 五百九十五

第一章 總則

第一條 凡ノ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ以テスヘシ

第一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ

第二 官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章 懲罰

第二條 懲罰ハ左ノ如シ

第一 譴責

第二 減俸

第三 轉所

第四 停職

第五 免職

第三條 前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコトヲ得

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以內ヲ減ス

第五條 轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條 停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セス

第七條 免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現任ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章 懲戒裁判所

第八條 懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條 控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條 懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規程ヲ準用ス

第十二條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

○第一類 ○行政法 ○判事懲戒法

第十三條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域内ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條 大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一 第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條 懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章 裁判手續

第十七條 懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條 檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテ

ハ七日ノ期間内ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條 抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條 開始決定ニハ懲戒スヘキ所爲及證據ヲ開示スヘシ

第二十一條 開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條 懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域内ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條 下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條 受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命判事ハ下調結了ノ後調書及一切ノ證據ヲ懲戒裁判所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時内ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

○第一類○行政法○判事懲戒法

第二十六條 檢事ハ三日内ニ意見ヲ付シ記録ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條 懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ
免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條 懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條 辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條 口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモ
ノトス
裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ

結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條 被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用ヰルコトヲ得

第三十四條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條 判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日内ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條 被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條 評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從フ

第三十八條 被告及檢事ハ十四日ノ期間内ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條 控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條 懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ
對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四十一條 懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條 控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルト

キハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立

テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實

ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限リ之ヲ許ス

職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規程

ヲ適用ス

第四十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費

用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ

控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所更ニ

判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト

共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ

第四十五條 調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規程

ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條 懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコト

ヲ得ス

第四十七條 懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件

ノ情況ヲ報告シ且判決ノ謄本ヲ差出スヘシ

第四十八條 懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司

法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章 職務停止

第四十九條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第一 刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ

第二 刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三 懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條 刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑

期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セラルルモノトス

第五十一條 懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノ

ト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ間リ懲戒裁

○第一類○行政法○判事懲戒法

判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ
職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ
刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テモ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ル
マテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後
其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章 懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第五十四條 刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開
始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴訟追ノ始マ
リタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免訴又ハ無罪ノ言渡
ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スル
ヲ妨ケス

刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタトルキハ懲戒
裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章 補則

第五十六條 懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルモノト雖本法ニ從ヒ之
ヲ訴追ス

第五十七條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

第十九款 採炭請負規則

▲明治廿四年六月海軍省告示第六號

新原採炭所ニ於テ石炭ノ採掘ヲ請負ハントスルモノハ左ノ規則ニ據ル可
シ

採炭請負規則

第一條 石炭採掘及斷層巖石開鑿並坑内諸道ノ請負事業ハ本則ニ據ルモ
ノトス但採炭請負價格ハ炭量一千基ヲ以テ算定シ採掘炭額ハ一日若ク
ハ一箇月ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二條 石炭採掘等ノ請負競争ニ加ハラントシ若クハ契約ヲ結ハントス
ル者ハ新原採炭所ニ就キ其設計、圖面、仕様書及炭坑ヲ熟覽スヘシ

第三條 請負ノ競争ニ加ハラントシ若クハ契約ヲ結ハントスル者ハ市町
村長又ハ區長ノ與書ヲ受ケ或ハ會社組合等ニシテ官許ニ係ル者ハ其指

○第一類 ○行政法 ○採炭請負規則

令書若クハ許可狀ノ寫ヲ添ヘ二年以來其職業ニ從事シタル證明書ヲ出スヘシ

第四條 請負ノ競争ニ加ハラントスル者ノ入札保證金ハ見積代金ノ百分ノ五以上契約保證金ハ其代金ノ百分ノ十以上新原採炭所ニ於テ定ムル所ニ依リ納ムヘシ

隨意契約ノ保證金額ハ新原採炭所ト請負人ト協議決定スル所ニ依ル但場合ニ依リ保證金ヲ免除スルコトアルヘシ

第五條 現金ヲ以テ保證金ヲ納ムルトキハ正貨、紙幣、銀行紙幣、兌換銀行券ノ内ヲ以テスヘシ

第六條 公債證書ヲ以テ保證金ヲ納ムルトキハ納付前月ノ株式取引所平均相場ニ據リ書入證書ヲ添付スヘシ但利札ハ拂渡期日前ニ下附ス

第七條 入札保證金ハ入札人入札ノトキ掛官ニ出スヘシ契約保證金ハ請負人結約ノトキ掛官ノ指示スル所ニ納入スヘシ

第八條 入札保證金ハ落札者契約ヲ結ハサルトキハ官ノ所得トシ落札ナラサル者ニハ即時還付シ落札者ニハ契約保證金納入ノ後之ヲ還付ス

第九條 契約保證金ハ請負ノ事項完済シタル後還付ス若シ請負人契約ノ義務ヲ果サ、ルトキハ契約書ニ掲クル處分法ニ依リ全額若クハ幾分ヲ

官ノ所得トス但天災其他防制スヘカヲサル事故ニ原由スルモノト認定シ解約スルトキハ還付ス

第十條 契約書ニハ請負事項、請負金額、保證金額、終始期限、保證金處分法、金額仕拂期限其他一切必要ナル條件ヲ掲載シ且契約書ニ明又アルモノ、外總テ本規則ニ從フ旨ヲ明記シ之ニ仕様書、仕様書等必要書類ヲ添付スヘシ

第十一條 契約書ニハ請負人保證人連署捺印シ新原採炭所長署名捺印スルモノトス

契約書ハ正副二本ヲ作り一本ハ官ニ留メ一本ハ請負人ニ於テ所持スルモノトス

豫定價格五百圓未滿ノ隨意契約ニ於テ契約書ヲ用ヒサルトキハ請負人署名捺印シタル書類ニ新原採炭所長捺印スルモノトス

第十二條 請負人死亡シ若クハ失踪シ又ハ契約ヲ履行セサルトキハ保證人ニ於テ請負本人ト同一ノ資格アル者ヲ撰ミ官ノ許可ヲ得テ契約ヲ履行セシムヘシ若シ保證人其義務ヲ果サ、ルトキハ契約ヲ解キ保證金ヲ官ノ所得トス但既ニ採掘シタル炭量其他既濟部分ニ對スル仕拂金額及保證金ハ検査官吏ノ測定ニ依リ下付スヘシ

○第一類○行政法○採炭請負規則

第十三條 競争入札ノ公告ニハ其入札ニ附スヘキ事項、設計、仕様書等必要ナル書類ヲ示ス場所、新原探炭所長氏名、開札日時、保證金額其他必要ノ事項ヲ掲グルモノトス

第十四條 入札書ニハ仕様書ヲ添ヘ入札人ノ職業住所姓名ヲ記載スヘシ入札者會社ナルトキハ其社長又ハ代理人ノ住所姓名ヲ記載スヘシ他人ノ代理トシテ入札スルトキハ委任狀ヲ添付スヘシ

第十五條 入札書ハ開札ノ日掛官ニ出スヘシ又入札人ハ入札前本規則及設計、圖面、仕様書等必要ナル書類其他炭坑等ヲ熟知シタルモノトシ開札後ニ至リ故障ヲ陳フルコトヲ許サス

第十六條 開札ハ新原探炭所長入札人ノ面前ニ於テ主務官ヲシテ入札書ヲ開封シ其要件ヲ朗讀セシメ豫定價格ノ制限ニ達スル最低金額ノ入札人ヲ以テ落札者ト定ム但入札保證金ヲ出サ、ル者ノ入札書ハ開封セスシテ却下ス又仕様書ヲ添付セス入札書其式ニ違ヒ相當ノ證明書類ヲ出サ、ル者ノ入札ハ直ニ却下ス

第十七條 入札金額一モ豫定價格ノ制限ニ達セス再入札ヲ爲サシムルトキハ即日同所ニ於テ之ヲ行フ再入札ノ金額仍ホ一モ該制限ニ達セサルトキハ其入札ヲ取消スヘシ

第十八條 落札トナルヘキ同價ノ入札人數名アルトキハ即日同所ニ於テ再入札ヲ爲サシメ仍ホ同價ナルトキハ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ム

第十九條 第十七條及前條ニ依リ再入札ヲ爲シタル落札者ハ二日以内ニ其落札金額ニ對スル改正仕様書ヲ出スヘシ之ヲ出サ、ルトキハ保證金ノ全額若クハ一部ヲ官ノ所得トシ契約ヲ結ハサルコトアルヘシ

第二十條 入札金額ノ仕様書ニ誤謬アルトキハ其内譯訂正ヲ許スト雖モ入札金額ノ改正ハ之ヲ許サス

第二十一條 隨意契約ハ新原探炭所長其契約ヲ結ハントスル請負人ヲシテ見積價格書及仕様書ヲ出サシメ五日以内ニ決定シ請負人ニ通知シ保證金ヲ納メシメ且契約書ニ調印セシム但時宜ニ依リ延期ヲ要スルトキハ速ニ請負人ニ通知スルモノトス

第二十二條 隨意契約ヲ結ハントスル請負人前條ノ期日內ニ確定ノ通知ヲ得ス若クハ確定延期ノ通知ヲ得タルトキ其契約ヲ辭スルコトヲ得

第二十三條 請負人ハ總テ新原探炭所員ノ指揮ニ從ヒ契約書ニ記載スル日時ニ必ス著手スヘシ且官ノ許可ヲ得スシテ他人ニ請負ハシムルコトヲ得ス若シ許可ヲ得スシテ之ヲ他人ニ請負ハシムルコトアルトキハ保證金ノ全額若クハ一部ヲ官ノ所得トシ契約ヲ解クコトアルヘシ

○第一類○行政法○採炭請負規則

第二十四條 請負人請負事項ヲ施行スルトキハ坑ノ内外取締ニ係ル諸則ヲ遵奉シ火災其他ノ豫防ニ注意シ服業時間ハ採炭所ノ定ムル所ニ據ルヘシ

第二十五條 請負事業施行中ハ請負人若クハ適當ノ代理人常ニ臨在シ採炭所官吏ノ巡檢スルトキハ必ス之ニ隨伴シ官吏ニ於テ事業ニ不充分ト認ムル所アルトキハ改修セシム

第二十六條 請負人ハ其使役スル職工人夫等ノ行爲ニ係ル一切ノ責ニ任スルモノトシ若シ官ニ於テ職工人夫中強硬命ニ服セス不正ノ行爲等アルモノハ其使役ヲ禁止スルコトアルヘシ但使役スル職工人夫ノ名簿ヲ採炭所ニ差出スモノトス

第二十七條 請負事業ニ使用スル材料物品ハ採炭所官吏ノ検査ヲ經サルモノハ使用スルコトヲ得ス

第二十八條 請負事業ニ使用スル納屋、車馬、器具、器械等及其雜費ハ契約ニ明又アルモノヲ除ク外總テ請負人ニ於テ調辨スルモノトス

第二十九條 天災其他防制スヘカヲサル事故ニ依リ約定期限ヲ後ル、トキハ請負人其事故ヲ證明スヘキ書類ヲ添へ速ニ主任官吏ニ告知スヘシ
第三十條 請負事業著手ノ後官ノ都合ニ依リ一時中止又ハ廢止ヲ要ス

ルトキハ請負人ニ於テ異議ヲ申立ツルコトヲ得ス但廢止ノ場合ニ在テハ保證金ヲ還付シ其既ニ採掘シタル炭量其他既濟部分及坑場ニ運搬シタル材料ニ對スル金額ヲ下付シ及運搬ニ係ル雜費ヲ辨償シ其材料ハ官ノ所得トス

第三十一條 前條ニヨリ請負事業一時中止セラレ其中止一年以上ニ及ブトキハ其契約ヲ辭スルコトヲ得此場合ニ於テハ保證金ヲ還付スル等前條廢止ノ例ニ依ル

第三十二條 官ノ都合ニ依リ請負事業ノ部分變換ヲ要スルトキハ請負人ニ於テ異議ヲ申出ツルコトヲ得サルモノトス但此場合ニ在テハ仕譯書ヲ改調セシメ請負金額ヲ増減スヘシ

第三十三條 請負金額ノ仕拂ハ毎月若クハ毎二箇月ニ區分シ既ニ採掘シタル炭量其他既濟部分ニ對スル價格五分ノ四以上ヲ仕拂フモノトス

○第二十款 元老院廢止之件

▲明治廿三年十月勅令第二百五十五號

朕元老院廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

○第一類○行政法○元老院廢止之件○華族懲戒例廢止之件 六百十一

勅令第二百五十五號
元老院ヲ廢ス

○第廿一款 華族懲戒例廢止之件

▲明治廿三年八月勅令第六十號
朕華族懲戒例廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
御名 御璽

勅令第六十號
明治十八年(二月)太政官號外達華族懲戒例ヲ廢止ス

○第廿二款 街路其他取締標準廢止之件

▲明治廿三年十月內務省訓令第四十號
明治十九年當省訓令第七號ハ自今廢止ス
廳府縣
(參照) 內務省訓令第七號(明治十九年六月十四日)

乘合馬車人力車宿屋ノ營業及街路ニ於ケル警察上各其取締ノ方法ヲ設ケサル可カラ
ス而シテ民度ノ高低土地ノ都鄙ニ由リ其間自ラ寬嚴ノ差ナキヲ得サルモノナレハ必ス
シモ各地畫一ノ制ヲ要セスト雖モ大體ニ於テ其則ヲ取ル所ナカルヘカラス依テ今般街

路乘合馬車營業人力車及宿屋取締ノ件ニ付別冊ヲ編制シテ其標準ヲ示ス各地方ニ於テ
各其標準ノ趣旨ニ從ヒ便宜増損規則ヲ設ケ本省ノ認可ヲ經テ施行スヘシ (別冊略ス)

○第廿三款 刑死者墓標之件

▲明治廿四年七月內務省令第十一號

第一條 刑死者ノ墓標ニハ氏名、法號、族籍、年齡、生死ノ年月日ヲ記入ス
ルニ止メ他ノ事項ヲ記スルコトヲ得ス

其墓標ハ遺骸埋葬地又ハ祖先塋域ノ外之ヲ建設スルコトヲ得ス
異様ノ墓標ヲ建設シ及文字ニ彩色ヲ施スコトヲ得ス

第二條 所轄警察署ノ許可ヲ得スシテ刑死者ノ爲メ公然祭祀ヲ行フコト
ヲ得ス但親族ノ香花ヲ供スルノ類ハ此限ニ在ラス

第三條 刑死者ノ寫眞其他肖像ヲ公然陳列シ又ハ販賣スルコトヲ得ス
其他總テ刑死者ヲ賞揚哀悼スルコトヲ得ス

第四條 前各條項ニ違背シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金若クハ
十一日以上二十五日以下ノ輕禁錮ニ處ス

第五條 犯罪ニ關シ現ニ搜查、起訴、勾留、服刑中ノ者若クハ搜查、起訴、
勾留、服刑中ニ死去シタル者及刑ヲ免レシト欲シテ自殺シ或ハ犯罪現

○第一類 ○行政法 ○街路其他取締標準廢止之件
○刑死者墓標之件

行ノ際殺害セラレタル者ニ付地方長官(東京府ハ警視總監)ハ安寧秩序ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルトキハ特ニ命令ヲ下シ第一條第二條第三條ニ掲クル所爲ヲ禁スルコトヲ得其命令ニ違背シタル者ハ第四條ニ據リ處分ス

○第二類 民法

○第一章 民法

○第一欸 財産取得編

▲明治廿三年十月法律第九十八號

朕民法中財産取得編人事編ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第九十八號

民法財産取得編目錄

第十三章 相続

總則

第一節 家督相続

○第二類○民法○財産取得編

第一款 家督相続ノ通則

第二款 家督相続人ノ順位

第三款 隱居家督相続ノ特別規則

第二節 遺産相続

第三節 國ニ屬スル相続

第四節 相続ノ受諾及ヒ拋棄

第一款 單純ノ受諾

第二款 限定ノ受諾

第三款 拋棄

第四款 相続人ノ曠缺セル相続財産ノ處分

第十四章 贈與及ヒ遺贈

總則

第一節 贈與又ハ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力

第二節 贈與

第一款 贈與ノ方式

第二款 贈與ノ廢罷

第三節 夫婦間ノ贈與ノ特例

第四節 遺贈

第一款 遺言ノ方式

第二款 遺言ノ特別方式

第三款 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ノ部分

第四款 遺言ノ効力及ヒ執行

第五款 遺言ノ廢罷及ヒ失効

第五節 包括ノ贈與又ハ遺贈ニ基ク不分財産ノ分割

第一款 分割

第二款 分割ノ効力及ヒ擔保

第三款 分割ノ銷除

第十五章 夫婦財産契約

第一節 總則

第二節 決定ノ制

民法

財產取得編

第十三章 相續

總則

第二百八十六條 相續ニ二種アリ家督相續及ヒ遺產相續是ナリ

第一節 家督相續

第二百八十七條 家督相續トハ戶主ノ死亡又ハ隱居ニ因ル相續ヲ謂フ

第一款 家督相續ノ通則

第二百八十八條 家督相續ヲ爲スハ一家一人ニ限ル

何人ト雖モ二家以上ノ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス

第二百八十九條 婚姻又ハ養子縁組ニ因リ他家ニ入リテ其家ニ在ル者ハ

實家其他ノ家ノ家督相續ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十條 一人ニシテ數家ノ家督相續人ニ指定セラレ又ハ選定セラ

レタル者ハ其中ノ一ヲ選擇スルコトヲ得

第二百九十一條 推定家督相續人ハ他家ノ家督相續人ニ指定セラレ又ハ

選定セラレタルモ其指定又ハ選定ハ無効トス

第二百九十二條 被相續人ヲ死ニ致シ又ハ死ニ致サントシタル爲メ刑ニ

處セラレタル者ハ相續ヨリ除斥セラル但過失ニ因ルモノハ此限ニ在ラス

第二百九十三條 相續除斥ノ訴權ハ被相續人ノ明示ノ宥免ニ因リテ消滅

ス

第二百九十四條 家督相續人ハ姓氏、系統、貴號及ヒ一切ノ財産ヲ相續シ

○第二類○民法○財產取得編

テ戸主ト爲ル

系譜、世襲財産、祭具、墓地、商號及ヒ商標ハ家督相續ノ特權ヲ組成ス

第二款 家督相續人ノ順位

第二百九十五條 法律ニ於テ家督相續人ト爲ル可キ者ノ順位ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 被相續人ノ家族タル卑屬親中親等ノ最モ近キ者

第二 卑屬親中同親等ノ男子ト女子ト有ルトキハ男子

第三 男子數入アルトキハ其先ニ生マレタル者但嫡出子ト庶子又ハ

私生子ト有ルトキハ嫡出子

第四 女子ノミ數人アルトキハ其先ニ生マレタル者但嫡出子ト庶子又ハ私生子ト有ルトキハ嫡出子

然レトモ右ノ規定ニ從ヒテ家督相續人タル可キ者カ被相續人ニ先ダチテ死亡シ又ハ第二百九十七條ニ掲ケタル原因ニ由リテ廢除セラレタル場合ニ於テ其者ニ卑屬親アルトキハ其卑屬親ハ法定ノ順位ニ依リテ家督相續人ト爲ル

第二百九十六條 被相續人ハ正當ノ原因アルニ非サレハ法定ノ推定家督相續人ヲ廢除スルコトヲ得ス

第二百九十七條 法定ノ推定家督相續人ヲ廢除スルコトヲ得ヘキ正當ノ原因ハ左ノ如シ

第一 失踪ノ宣言

第二 民事上禁治産及ヒ准禁治産

第三 重禁錮一年以上ノ處刑

第四 家政ヲ執ルニ堪ヘサル不治ノ疾病

第五 祖父母、父母ニ對スル罪ノ處刑

第六 重罪ニ因レル處刑

第二百九十八條 推定家督相續人ノ廢除ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ身分取扱吏ニ申述シテ之ヲ爲スコトヲ得

申述ニ基ク家督相續人ノ廢除ハ被相續人之ヲ取消スコトヲ得廢除ノ取消ハ身分取扱吏ニ申述シテ之ヲ爲ス

第二百九十九條 法定ノ家督相續人アルトキハ被相續人ハ家督相續人ヲ指定スルコトヲ得ス但此規定ニ違ヒタル指定ト雖モ被相續人ノ死亡ノ日ニ法定ノ家督相續人アラサルトキハ有効トス

第三百條 家督相續人ノ指定ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲スコシ

第三百一條 法定又ハ指定ノ家督相續人アラサル場合ニ於テ其家ニ死亡

者ノ父アルトキハ父、父アラサルトキハ母ハ左ノ順序ニ從ヒ家族中ヨリ家督相續人ヲ選定ス

第一 兄弟

第二 姊妹

第三 兄弟姊妹ノ身屬親中親等ノ最モ近キ男子若シ男子アラス又ハ拋棄シタルトキハ女子

第三百二條 前條ノ場合ニ於テ父母アラサルトキハ家督相續人選定ノ權利ハ親族會ニ屬ス但親族會ハ前條ニ定メタル選定ノ順序ヲ變更スルコトヲ得ス

第三百三條 第三百一條ノ規定ニ從ヒ選定ス可キ家督相續人アラサルトキ又ハ皆拋棄シタルトキハ其家ニ在ル尊屬親中親等ノ最モ近キ者任意ニ家督相續ヲ爲スコトヲ得

第三百四條 前條ノ家督相續人アラサルトキハ配偶者家督相續ヲ爲スコトヲ得

第三百五條 親族會ハ前數條ニ記載シタル相續人アラサルトキ又ハ皆拋棄シタルトキニ非サレハ他人ヲ選定スルコトヲ得ス

第三款 隱居家督相續ノ特別規則

第三百六條 隱居ヲ爲スニハ左ノ條件ノ具備スルコトヲ要ス

第一 滿六十年以上ナルコト

第二 任意ニ出タルコト

第三 成年ニシテ且實際家政ヲ執ルノ能力アル家督相續人カ單純ノ受諾ヲ爲シタルコト

第四 配偶者ノ承諾シタルコト

第三百七條 隱居者カ重病其他ノ原因ノ爲メニ實際家政ヲ執ル能ハサルトキ又ハ分家ノ戶主カ本家ヲ承繼スルノ必要アルトキハ本人ノ申立ニ因リ區裁判所ハ年齡ノ條件ヲ宥恕スルコトヲ得

第三百八條 隱居者ノ配偶者、親族及ヒ檢事ハ左ノ原因ノ一ニ基キ隱居届出ノ日ヨリ六十日內ニ故障ヲ申立ツルコトヲ得

第一 第三百六條第一號乃至第三號ノ條件ニ違ヒタル事實

第二 家督相續ヲ爲ス者カ推定家督相續人ニ非サル事實

又隱居カ任意ニ出テサリシ場合ニ於テハ隱居者モ亦故障ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九條 隱居カ第三百六條第四號ノ條件ニ違ヒタル事實アルトキハ隱居者ノ配偶者ニ限リ故障ヲ申立ツルコトヲ得

又隠居者カ債權者ヲ詐害スルノ意思ヲ以テ隠居ヲ爲サントスルトキハ債權者ハ故障ヲ申立ツルコトヲ得
前條ノ期間ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

第三百十條 隠居ヲ爲ストキハ當事者ヨリ其旨ヲ身分取扱吏ニ届出ツ可
シ

第三百十一條 隠居家督相續ハ届出前ノ利害關係人ニ對シテハ第三百八
條ニ定メタル期間満限ノ日ヨリ又故障アリタルトキハ其故障ノ棄却確
定シタル日ヨリ死亡ニ因ル相續ト同一ノ効力ヲ生ス但隠居者ノ終身ヲ
限度トスル權利及ヒ義務ヲ消滅セシメス

第二節 遺産相續

第三百十二條 遺産相續トハ家族ノ死亡ニ因ル相續ヲ謂フ

第三百十三條 家族ノ遺産ハ其家族ト家ヲ同フスル身屬親之ヲ相續シ身
屬親ナキトキハ配偶者之ヲ相續シ配偶者ナキトキハ戸主之ヲ相續ス

第三百十四條 身屬親カ遺産ヲ相續スル場合ニ於テハ第三百九十五條ノ
規定ヲ適用ス

第三節 國ニ屬スル相續

第三百十五條 相續人アラサル財産ハ當然國ニ屬ス

國ハ限定ノ受諾ヲ以テ相續ス

第三百十六條 國ニ屬ス可キ相續財産ハ其領收ヲ爲スニ至ルマテ相續人
曠缺ノ財産ヲ管理スル如ク之ヲ管理ス

第四節 相續ノ受諾及ヒ拋棄

第三百十七條 相續人ハ相續ニ付キ單純若クハ限定ノ受諾ヲ爲シ又ハ拋
棄ヲ爲スコトヲ得但法定家督相續人ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得ス又隠居家
督相續人ハ限定ノ受諾ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十八條 隠居家督相續ヲ除ク外相續人ハ相續財産ヲ調査スル爲メ
相續ノ日ヨリ三ヶ月ノ期間ヲ有ス但裁判所ハ情況ニ因リ更ニ三個月内
ノ延期ヲ許スコトヲ得

受諾又ハ拋棄ヲ決定スル爲メ一ヶ月ノ期間ヲ有ス此期間ハ調査期間満
限ノ日又ハ其前ニ實際ノ調査ヲ終了シタル日ヨリ之ヲ算ス

第三百十九條 相續人ハ調査又ハ決定ノ期間内相續財産ニ關スル一切ノ
訴訟手續ヲ止停セシムルコトヲ得

第三百二十條 相續財産ニ關スル訴訟ニ要セシ費用ハ法律上ノ期間内ニ
係ルモノト裁判所ノ許シタル延期内ニ係ルモノトト問ハス總テ相續財
産ノ負擔トス但相續人ノ所爲又ハ過失ニ因リテ要セシ費用ハ此限ニ在

ラス

第二百二十一條 相續財産中ニ損敗シ易ク又ハ保存スルニ著シキ費用ヲ要スル物品アルトキハ調査又ハ決定ノ期間内ト雖モ區裁判所ノ認可ヲ得テ其物品ヲ競賣ニ付スルコトヲ得但日用品ハ裁判所ノ認可ヲ經スシテ之ヲ處分スルコトヲ得

第一款 單純ノ受諾

第二百二十二條 相續人カ被相續人ノ財産ニ關シ明示又ハ默示ニテ其代表者ト爲ルノ意思ヲ顯ハストキハ單純ノ受諾トス

第二百二十三條 左ノ如キ場合ニ於テハ默示ノ受諾アリトス

第一 相續財産ノ一箇又ハ數個ニ付キ他人ノ爲メニ所有權ヲ讓渡シ又ハ其他ノ物權ヲ設定シタルトキ但財産編第百十九條以下ノ制限ニ從ヒタル賃借權ノ設定ハ此限ニ在ラス

第二 相續人カ第三百十八條ノ期間内ニ限定受諾又ハ拋棄ヲ爲ササルトキ

右ノ外尚ホ第三百二十七條第二號ノ場合ハ單純ノ受諾ヲ成ス

第二百二十四條 受諾ハ左ノ原因ノ一アルニ非サレハ之ヲ銷除スルコトヲ得ス

第一 身體又ハ財産ニ強暴ヲ加ヘラレタルニ因リテ受諾シタルトキ

第二 詐欺ノ爲メニ受諾シタルトキ

第三 無能力者又ハ後見人カ方式ニ違ヒテ受諾シタルトキ

第四 受諾ノ時成立セルコトヲ知ラサル債務ノ爲メ破産又ハ無資力ト爲ルニ至ル可キトキ

此銷除訴權ハ財産編第五百四十四條以下ニ規定シタル銷除訴權ノ期間及ヒ條件ニ從フ

第二款 限定ノ受諾

第二百二十五條 相續人カ相續財産ノ限度マテニ非サレハ債務ノ辨償ノ責ニ任セサルトキハ限定ノ受諾トス

第二百二十六條 相續人ニシテ限定ノ受諾ヲ爲スノ意思ヲ有スル者ハ第三百十八條ノ期間内ニ調査シタル財産ノ目錄ヲ相續地ノ區裁判所ニ差出タシ其申述ヲ爲シ裁判所ハ別段ニ備ヘタル張簿ニ之ヲ記載ス可シ

第二百二十七條 左ノ場合ニ於テハ相續人ハ限定受諾ヲ爲スノ權利ヲ失フ

第一 單純ノ受諾ヲ爲シタルトキ

第二 相續財産ヲ私取シ若クハ隱匿シ又ハ惡意ヲ以テ財産調査目錄

○第一類○行政法○財産取得編

中ニ相續財産ノ幾分ヲ記載セカリシトキ

第三百二十八條 限定受諾者ハ其特有財産ニ於ケルト同一ノ注意ヲ以テ相續財産ヲ管理シ債權者及ヒ受遺者ニ其計算ヲ爲ス可シ但此計算ハ債務及ヒ遺贈ノ辨濟ノ爲メ相續財産ヲ拂盡シタル後一个月内ニ之ヲ完了スルコトヲ要ス

第三百二十九條 限定受諾者ハ動産ト不動産トヲ問ハス總テ相續財産ノ賣却ヲ要スルトキハ區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ競賣ニ付ス可シ

第三百三十條 限定受諾者ハ適法ニ賣却シタル財産ノ各箇ニ付テ得タル代價ヲ混同セス其各箇ニ付テ優先權ヲ有スル債權者ニ順次ニ辨濟ス可シ

第三百三十一條 相續ノ負擔スル債務又ハ遺贈ノ辨濟ヲ差押ヘ又ハ其辨濟ニ付キ異議ヲ述フル債權者又ハ受遺者アルトキハ限定受諾者ハ裁判ヲ以テ定メタル順次及ヒ方法ニ從フニ非サレハ其辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第三百三十二條 前條ノ差押又ハ異議アラサルハ債權者又ハ受遺者ノ要求ニ從ヒテ辨濟ヲ爲ス辨濟ノ爲メニ相續財産ヲ拂盡シタル後ト雖モ第三百二十八條ニ規定シタル計算ヲ完了セサル前ニ要求ヲ爲ス債權者

又ハ受遺者ハ左ノ區別ニ從ヒ既ニ辨濟ヲ得タル債權者及ヒ受遺者ニ對シテ求償權ヲ行フコトヲ得

第一 債權者ハ先ツ受遺者ニ對シ次ニ債權者ニ對スルコト

第二 受遺者ハ單ニ受遺者ニ對スルコト

第三百三十三條 相續人カ計算ノ完了ヲ遲延シタル場合ニ於テハ債權者中未タ辨濟ヲ得サル者ヨリ既ニ辨濟ヲ得タル受遺者及ヒ債權者ニ求償スルコトヲ得ヘキ額ヲ直チニ相續人ノ特有財産ニ付キ求償スルコトヲ得

第三百三十四條 相續財産ヲ拂盡シ計算ヲ完了シタル後ニ要求ヲ爲ス債權者ハ單ニ辨濟ヲ得タル受遺者ニ對スルニ非サレハ求償權ヲ行フコトヲ得ス

第三百三十五條 前三條ノ求償權ハ三ヶ年之間之ヲ行フコトヲ得但此期間ハ計算ノ完了前ニ係ルトキハ初メ相續人ニ要求シタル日又完了後ニ係ルトキハ其完了ノ日ヨリ之ヲ算ス

第三款 拋棄

第三百三十六條 相續ヲ拋棄セントスル相續人ハ相續地ノ區裁判所ニ其旨ヲ申述シ裁判所ハ別段ニ備ヘタル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第三百三十七條 拋棄シタル相續ハ他ニ受諾シタル相續人アラサル間ハ

○第二類○行政法○財産取得編

拋棄者更ニ之ヲ受諾スルコトヲ得然レトモ此受諾ハ第三百十八條ノ期間内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス但相續財産ニ付キ第三者ノ有効ニ得タル權利ヲ害スルコト無シ

第三百三十八條 相續ヲ拋棄シタル者ハ他ニ受諾シタル相續人アリト雖モ左ノ場合ニ於テハ其拋棄ヲ銷除スルコトヲ得

- 第一 身體又ハ財産ニ強暴ヲ加ヘテレタルニ因リテ拋棄シタルトキ
- 第二 詐欺ノ爲メニ拋棄シタルトキ
- 第三 無能力者又ハ後見人カ方式ニ違ヒテ拋棄シタルトキ

此銷除訴權ハ財産編第五百四十四條以下ニ規定シタル期間及ヒ條件ニ從フ

第三百三十九條 債權者ヲ詐害スル意思ニ出テタル拋棄ハ財産編第三百四十一條以下ニ定メタル區別及ヒ期間ニ從ヒ債權者自己ノ利益ノ爲メ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百四十條 適法ニ受諾シ又ハ受諾者ト推定セラレタル者ハ拋棄ヲ爲スコトヲ得ス

第三百四十一條 相續ニ包含スル物ヲ私取シ又ハ隱匿シタル相續人ハ其相續ヲ拋棄スル權利ヲ失フ

第四款 相續人ノ曠缺セル相續財産ノ處分

第三百四十二條 相續人現出セス相續人ノ有無分明ナラス又ハ相續人相續ヲ拋棄シタルトキハ相續人ノ曠缺セルモノト看做ス

第三百四十三條 相續地ノ區裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ相續財産ノ管理人ヲ命ス可シ

第三百四十四條 管理人ハ利害關係人ヲ召喚シテ相續財産ヲ調査シ其目錄ヲ作り財産ノ形狀ヲ檢證セシム可シ

管理人ハ此手續ヲ終了シタル後相續ニ屬スル權利ヲ行使シ之ヲ訟求シ又其相續ニ對スル訟求ニ答辯ス可シ

金錢ハ相續財産中ニ存スルモノト其實却ヨリ得タルモノトヲ問ハス供託所ニ之ヲ供託ス可シ

相續ノ負擔スル債務ハ區裁判所ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ辨濟スルコトヲ得ス

第三百四十五條 限定受諾者ノ義務及ヒ責任ニ關シ第三百二十八條以下ニ定メタル規則ハ管理人ニ之ヲ適用ス

第三百四十六條 管理人ハ計算ヲ完了シテ尙ホ相續財産ノ存スルニ於テハ區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ競賣ニ付シ其得タル金額ヲ供託所ニ供託

○第二類○行政法○財産取得編

ス可シ

管理人ハ其領收證ヲ區裁判所ニ差出タシ區裁判所ハ之ヲ保存ス可シ
第三百四十七條 相續人現出スルトキハ其相續人ハ區裁判所ヨリ供託所
ノ領收證及ヒ相續人タル身分ノ證明書ヲ得テ之ヲ供託所ニ提出シ供託
金額ヲ領收ス可シ

第三百四十八條 相續人アラサルコト確實ニ至リタルトキハ國ハ特別法
ニ從ヒ供託金額ヲ領收ス可シ

第十四章 贈與及ヒ遺贈

總則

第三百四十九條 贈與トハ當事者ノ一方カ無償ニテ他ノ一方ニ自己ノ財
産ヲ移轉スル要式ノ合意ヲ謂フ

第三百五十條 贈與ハ單純、有期又ハ條件附ナルコト有リ

贈與ハ法律ノ認メタル原因アルニ非サレハ之ヲ廢罷スルコトヲ得ス
第三百五十一條 贈與者ハ贈與物ノ妨碍及ヒ追奪ヲ擔保セス但其贈與以
後ニ係ル贈與者ノ所爲ヨリ生シタル妨碍及ヒ追奪ハ此限ニ在ラス
第三百五十二條 遺贈トハ當事者ノ一方カ他ノ一方ニ無償ニテ自己ノ財
産ヲ遺言ニ因リテ死亡ノ時ニ移轉スル行爲ヲ謂フ

遺贈ハ遺言者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百五十三條 遺言書中ニ存スル不能又ハ不法ノ條件ハ之ヲ記セサル
モノト看做ス

贈與書中ニ不能又ハ不法ノ條件アルトキハ其贈與ヲ無効ト爲ス

第三節 贈與又ハ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力

第三百五十四條 法律上特ニ無能力者ト定メタル者ヲ除ク外何人ニ限ラ
ズ贈與及ヒ遺贈ヲ爲シ又ハ收受スル能力ヲ有ス

第三百五十五條 左ニ掲クル者ハ贈與ヲ爲ス能力ヲ有セス

第一 贈與ヲ爲ス時ニ於テ喪心シタル者

第二 禁治産者

第三 瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ル者

第四 未成年者但夫婦財産契約ノ爲メ法律ノ特ニ許ス場合ハ例外ト
ス

第三百五十六條 准禁治産者ハ財産讓渡ノ爲メ法律ノ要スル方式ニ從フ
ニ非サレハ贈與ヲ爲スコトヲ得ス

第三百五十七條 左ニ掲クル者ハ遺贈ヲ爲ス能力ヲ有セス

第一 遺贈ヲ爲ス時ニ於テ喪心シタル者

○第一類○行政法○財産取得編

第二 民事上ノ禁治産者

第三 瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ル者

第四 未成年者但自治産者ハ此限ニ在ラス

第二節 贈與

第一款 贈與ノ方式

第二百五十八條 贈與ハ分家ノ爲メニスルモノト其他ノ原因ノ爲メニスルモノトヲ問ハス普通ノ合意ノ成立ニ必要ナル條件ヲ具備スル外尙ホ公正證書ヲ以テスルニ非サレハ成立セズ
然レトモ慣習ノ贈物及ヒ單一ノ手渡ニ成ル贈與ニ付テハ此方式ヲ要セズ

第三百五十九條 贈與ハ贈與者ノ現有ノ財産ノミヲ包含ス若シ將來ノ財産ヲ包含シタルトキハ其財産ニ付テハ贈與ハ無効トス
然レトモ數額ノ定マリタル金錢又ハ定量物ノ贈與ハ贈與者ノ現有スルト否トヲ問ハス有効トス
第三百六十條 贈與ノ性質又ハ諾約ニ因リテ受贈者カ贈與者ノ債務ヲ辨濟スル義務ヲ負ヒタルトキハ其義務ハ贈與ノ時既ニ存在シタル債務ニ非サレハ包含セズ

受贈者カ贈與者ノ將來ノ債務ヲ辨濟ス可キノ諾約ヲ爲シタルトキハ其諾約ハ無効トス

第三百六十一條 贈與者ハ自己ノ利益ニ於テスルニ非サレハ自己ニ先クテ受贈者ノ死亡スルトキ其贈與ヲ解除ス可キ條件ヲ要約スルコトヲ得ス

若シ贈與者カ其相續人又ハ第三者ノ利益ニ於テ此解除條件ヲ要約シタルトキハ無効トス

第三百六十二條 前條第一項ノ規定ニ從ヒテ有効ニ要約シタル解除條件ノ成就ハ受贈者ノ相續人ニ對スルト第三者ニ對スルトヲ問ハス普通ノ合意ニ於テ要約シタル解除條件ト同一ノ効力ヲ生ス

然レトモ受贈者ノ婦ハ解除ニ拘ハラズ左ノ二箇ノ條件具備スルトキハ贈與財産ニ付キ法律上ノ抵當權ヲ保有ス

- 第一 贈與カ夫婦財産契約ヲ以テ夫ノ爲メ爲サレタルモノナルトキ
- 第二 贈與財産ノ外ナル夫ノ財産ヲ以テ婦ノ特有財産ノ返還ヲ擔保スルニ足ラサルトキ

第二款 贈與ノ廢罷

第三百六十三條 贈與ハ合意ヲ無効ト爲ス普通ノ原因ノ外尙ホ贈與者ノ

○第二類○民法○財産取得編

要約シタル條件ノ不履行ノ爲メ之ヲ廢罷スルコトヲ得

第三百六十四條 條件ノ不履行ニ基ク贈與ノ廢罷ハ贈與者又ハ其承繼人ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得

第三百六十五條 條件ノ不履行ニ基キ贈與ヲ廢罷シタル場合ニ於テハ受贈者ニ對スルト第三者ニ對スルトヲ問ハス未必條件ノ成就ニ因リテ合意ヲ解除シタルトキト同一ノ効力ヲ生ス

第三節 夫婦間ノ贈與ノ特例

第三百六十六條 未成年ノ夫又ハ婦ハ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ人ノ許諾及ヒ立會ヲ得且夫婦財産契約ヲ以テスルニ非サレハ贈與ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十七條 夫婦間ノ贈與ハ何等ノ約款アルニ拘ハラズ婚姻中贈與者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得

贈與ノ廢罷ハ第三者ニ對シテ効力ヲ有セス但贈與ノ登記ニ廢罷ノ訴狀ヲ附記シタル後ニ受贈者ノ遺産所持者ヨリ贈與財産ニ付キ物權ヲ取得シタル第三者ニ對シテハ此限ニ在ラス

第四節 遺贈

第一款 遺言ノ方式

第三百六十八條 遺言ハ遺言者ノ自筆ノ證書、公正證書又ハ祕密ノ方式ニ依リテ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ二人以上ノ人ハ一箇ノ證書ヲ以テ遺言ヲ爲スコトヲ得ス

第三百六十九條 自筆ノ遺言書ハ遺言者カ其全文、日附及ヒ氏名ヲ自書シテ捺印シタルニ非サレハ其効ヲ有セス

第三百七十條 公正證書ニ依ル遺言ハ公證人一人及ヒ證人二人ノ前ニ於テ遺言者カ遺言ノ旨趣ヲ口授シ公證人之ヲ筆記シ朗讀シタル後遺言者及ヒ證人各其氏名ヲ自書シテ捺印シタルニ非サレハ其効ヲ有セス然レトモ氏名ヲ自書スル能ハサル者アルトキハ其事由ヲ證書ニ記載スルヲ以テ足ル

第三百七十一條 祕密ノ方式ニ依ル遺言書ハ遺言者ノ自書シタルト他人ノ之ヲ書シタルトヲ問ハス左ノ諸件ヲ具備スルニ非サレハ其効ヲ有セス

第一 遺言者カ氏名ヲ自書シテ捺印シタルコト

第二 遺言書ヲ封シテ遺言者カ之ニ封印シタルコト

第三 遺言者カ公證人一人及ヒ證人二人ノ前ニ封書ヲ提出シテ自己ノ遺言書タル旨ヲ陳述シタルコト

○第二類 ○民法 ○財産取得編

第四 公證人カ遺言者ノ陳述ト之ヲ聽キタル日附トテ封紙ニ記シテ遺言者及ヒ證人ト共ニ各其氏名ヲ自書シテ捺印シタルコト但此場合ニ於テ氏名ヲ自書スル能ハサル證人アルトキハ公證人其事由ヲ封紙ニ記スルヲ以テ足ル

公證人ハ遺言者ノ死亡ノ後其相續人ノ立會ノ上ニ非サレハ開封セサル旨ヲ記シタル領收書ヲ遺言者又ハ其指定シタル證人中ノ一人ニ授付ス可シ

第三百七十二條 祕密ノ方式ニ依ル遺言トシテ有効ナル爲メ前條ニ定メタル條件ニ缺クルモノ有リト雖モ其全文、日附及ヒ氏名共ニ遺言者ノ自書ニ係ルトキハ自筆ノ遺言書トシテ有効トス

第三百七十三條 受遺者、遺言ニ立會フ分證人ノ筆生其他普通ノ無能力者ハ證人ト爲ルコトヲ得ス

第二款 遺言ノ特別方式

第三百七十四條 軍人及ヒ軍屬ニシテ遠征中ニ在ル者又ハ内地ト雖モ交戰中若シハ合圍中ニ在ル者ハ將校一人證人二人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十五條 遠征中、交戰中又ハ合圍中ニ在ル軍人及ヒ軍屬ニシテ

疾病又ハ傷痍ノ爲メ病院ニ在ル者ハ其院ノ醫官及ヒ事務官ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十六條 傳染病ノ爲メ行政處分ヲ以テ交通ヲ遮斷シタル地方ニ在ル者ハ其疾病中ナルト否トヲ問ハス警察官一人及ヒ證人一人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十七條 航海中ニ在ル者ハ軍艦ニ在テハ將校一人其他ノ船舶ニ在テハ事務員一人及ヒ證人二人ノ補助ヲ以テ遺言書ヲ作ルコトヲ得

第三百七十八條 海上ニテ遺言書ヲ作リタルトキハ其旨ヲ航海日誌ニ記載ス可シ

第三百七十九條 本款ノ規定ニ從ヒテ作リタル遺言書ニハ遺言者、代書者及ヒ立會人各其氏名ヲ自書シテ捺印ス可シ
氏名ヲ自書シ又ハ捺印スル能ハサル者アルトキハ其事由ヲ遺言書ニ記載スルヲ以テ足ル

第三百八十條 外國ニ在ル日本人ハ第三百六十九條ニ定メタル自筆ノ方式ニ依リ又ハ其他ニ用ユル公正ノ方式ニ從ヒテ遺言ヲ爲スコトヲ得

○第二類○民法○財産取得編

居所ノ區裁判所ノ簿冊ニ之ヲ登錄シタル後ニ非サレハ日本國內ニ在ル
財産ニ付キ其遺言ヲ執行スルコトヲ得ス
又其遺言書ニ日本國內ニ在ル不動産ノ處分ヲ包含スルトキハ其不動産
所在地ノ區裁判所ニ登記ヲ求メタル後ニ非サレハ第三者ニ對抗スルコ
トヲ得ス

第三百八十二條 日本ニ在ル外國人ハ日本ノ法律ニ從ヒ又ハ其本國ノ法
律ニ從ヒテ遺言ヲ爲スコトヲ得

第三款 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ノ部分

第三百八十三條 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル財産ト相續人ニ貯存ス可キ財産
トノ部分ヲ定ムルニハ家督相續ノ特權ヲ組成スルモノヲ控除ス

第三百八十四條 法定家督相續人アルトキハ被相續人ハ相續財産ノ半額
マテニ非サレハ他人ノ爲メ遺贈ヲ爲スコトヲ得ス

家族ノ遺產ヲ相續スル卑屬親アルトキモ亦同シ

第三百八十五條 用益權ノ如キ其存立時間ノ不確實ナル權利ハ相續ノ時
ニ於ケル價額ヲ査定シテ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ定ム

其權利ノ價額カ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ超過スルトキハ相續人ハ
或ハ被相續人ノ遺贈ヲ履行シ或ハ遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ノ完全ヲ

ル所有權ヲ與ヘテ其權利ヲ受戻スコトヲ得

第三百八十六條 遺贈ヲ爲スコトヲ得ル部分ヲ超過スル遺贈ハ之ヲ其部
分マテニ減殺ス

第三百八十七條 減殺ス可キ分量ハ相續ノ時ニ現存スル總テノ財産ノ評
價額ヨリ被相續人ノ債務額ヲ控除シタル剩餘額ニ付キ之ヲ算定ス

第三百八十八條 遺贈ノ幾分ヲ減殺シテ貯存ス可キ財産ノ分量ヲ組成ス
可キトキハ包括ノ遺贈ト特定ノ遺贈トヲ問ハス其價額ノ割合ヲ以テ總
テノ遺贈ヲ減殺ス可シ

第三百八十九條 總テノ贈與ニシテ贈與者ノ死亡ノ後執行ス可キモノハ
遺贈ト其効力ヲ同フス

第四款 遺言ノ効力及ヒ執行

第三百九十條 單純又ハ有期ノ遺贈ハ遺言者ノ死亡ノ時ヨリ受遺者ノ知
ルト否トヲ問ハス包括ノ遺贈ニ付テハ其包含スル財産及ヒ債務ヲ受遺
者ニ移轉シ特定ノ遺贈ニ付テハ其遺贈物ノ權利ヲ受遺者ニ移轉ス然レ
トモ有期ノ遺贈ハ滿期ニ至ルマテ其執行ヲ止ム
停止又ハ解除ノ條件附ニ於ケル遺贈ノ効力ハ合意ノ事項ニ關シテ規定
シタル如ク其條件ノ成就如何ニ從フ

遺贈ノ目的物カ代替物ナルトキハ其所有權ハ財産編第三百二十二條ノ規定ニ從ヒテ移轉ス

如何ナル場合ニ於テモ受遺者ハ遺贈ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百九十一條 遺言者カ不分ノ權利ヲ有スル物ヲ遺贈シタルトキハ受遺者ハ遺言者ト同一ナル權利ヲ取得ス

第三百九十二條 受遺者ハ遺贈物ノ引渡ヲ要求シタル時ヨリ後ニ非サレハ遺贈物ノ果實ヲ收受スル權利ヲ有セス但期限ノ到來シ又ハ未必條件ノ成就シタルコトヲ要ス

然レトモ左ノ三箇ノ場合ニ於テハ受遺者ハ遺言者ノ死亡、滿期又ハ條件成就ノ時ヨリ要求ヲ待タズシテ直チニ果實ヲ收受スル權利ヲ有ス

第一 遺言者カ果實ヲ收受スル權利ヲ明示シタルトキ

第二 遺贈カ養料ノ性質ヲ有スルトキ

第三 相續人カ惡意ヲ以テ遺言ヲ隱秘シタルトキ

第三百九十三條 遺贈物ハ其遺贈ノ單純ナルトキハ當然ノ附從物ト共ニ遺言者ノ死亡ノ時ニ於ケル現狀ニテ之ヲ引渡ス可シ其遺贈ノ有期又ハ未必條件附ナルトキハ引渡ヲ請求スルコトヲ得ヘキ時ニ於ケル現狀ニテ之ヲ引渡ス可シ

相續人カ遺贈物ニ加ヘタル改良又ハ毀損ハ相續人ト受遺者トノ間相互ニ賠償ヲ請求スル權利ヲ生ス

解除ノ未必條件ヲ以テ遺贈ヲ爲シタル場合ニ於テ其條件ノ成就シタルトキハ受遺者又ハ其相續人ヨリ遺贈物ヲ現狀ニテ返還ス可シ但人爲ニ因ル改良又ハ毀損ニ付キ雙方ノ間ニ於ケル相互ノ賠償ヲ妨ケス

第三百九十四條 遺言者カ遺言ノ後ニ取得シタル土地又ハ建物ハ遺贈ノ不動産ニ接著シ又ハ其不動産ノ利用ヲ改良スル爲メニ供ヘタルモノト雖モ其不動産ノ受遺者ヲ利セス

第三百九十五條 遺言書ハ公正證書ヲ除ク外相續地ノ區裁判所ノ檢認ヲ得タル後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

封印アル遺言書ハ區裁判所ニ於テスルニ非サレハ開封スルコトヲ得ス前二項ノ規定ニ違フ者ハ百圓以下ノ過料ニ處ス

第三百九十六條 遺言ノ執行及ヒ遺贈物ノ引渡ニ關スル費用ハ相續財産ノ負擔トス但貯存財産ニ負擔セシムルコトヲ得ス

第三百九十七條 不動産物權ノ遺贈ハ遺言者ノ死亡ノ後受遺者カ其遺贈ヲ知リタル時ヨリ三十日內ニ之ヲ登記シタルニ非サレハ遺言者ノ死亡ノ日ニ遡リテ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

○第一類○行政法○財産取得編

登記ノ費用ハ受遺者ノ負擔トス
第三百九十八條 遺言者ハ合意又ハ遺言ヲ以テ遺贈ノ執行ヲ一人又ハ數人ニ委託スルコトヲ得

遺言執行者ハ代理人ノ普通義務ニ服ス

第五款 遺言ノ廢罷及ヒ失効

第三百九十九條 遺言ハ遺言者隨意ニ之ヲ廢罷スルコトヲ得廢罷ハ明示

又ハ默示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百條 遺言者カ遺言ノ方式ニ從ヒ遺言ノ全部又ハ一分ヲ廢罷スル意

思テ證書ニ記載シタルトキハ其廢罷ハ明示ノモノトス

第四百一條 後ノ遺言ヲ以テ前ノ遺言ニ包含スル特定物ヲ處分シタルト

キハ其物ニ付テハ前ノ遺言ヲ默示ニテ廢罷シタルモノトス

遺言者カ生存中遺言ニ包含スル特定物ヲ有償又ハ無償ニテ處分シタル

トキモ亦同シ

第四百二條 廢罷ニ歸シタル遺言ハ前條ノ處分ノ無効ト爲ルトキト雖モ

有効ニ復セス

第四百三條 遺言ハ受遺者ノ條件不履行ノ爲メ又ハ遺言者ヲ死ニ致シタル

原因ノ爲メ相續人ヨリ廢罷ヲ請求スルコトヲ得

第四百四條 遺言ハ方式上完全ノモノト雖モ左ノ場合ニ於テハ其効ヲ失

フ

第一 受遺者カ遺言者ヨリ先ニ死亡シタルトキ

第二 停止條件附ノ遺言ニ付キ其條件ノ成就前ニ受遺者ノ死亡シタルトキ

ルトキ

第四百五條 廢罷又ハ失効ニ歸シタル遺言ノ部分ニ付テハ曾テ遺言アラ

サリシモノト看做ス但遺言者カ明示ヲ以テ其部分ヲ利得ス可キ旨ヲ指

定シタルトキハ此限ニ在ラス

第五節 包括ノ贈與又ハ遺言ニ基ク不分財產ノ分割

第四百六條 包括ノ贈與又ハ遺贈ヲ爲シタルニ因リ贈與者又ハ相續人ト

受贈者又ハ受遺者トノ間ニ不分財產ヲ生シタルトキハ下ノ規定ニ從ヒ

之ヲ分割ス受贈者數人アルトキモ亦同シ

第一款 分割

第四百七條 不分財產ノ所有者ノ各自ハ其財產ノ分割ヲ要求スルコトヲ

得財產編第三十九條ノ規定ニ從ヒテ分割セサルコトヲ約シタルトキハ

此限ニ在ラス

第四百八條 分割ハ明示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス財產ヲ區別シテ收益

○第一類○行政法○財產取得編

スル事實ハ分割トセス
第四百九條 不分割ノ分割ハ所有者各自ノ合意ヲ以テ自由ニ之ヲ爲ス
コトヲ得

然レトモ左ノ場合ニ於テハ裁判ヲ以テスルニ非サレハ其分割ヲ爲スコ
トヲ得ス

第一 所有者中ニ未成年者、禁治産者又ハ瘋癲者アリテ其後見人又
ハ假管理人アラサルトキ

第二 所有者中ニ不在者アリテ有効ニ分割ヲ承諾スル權限ヲ有スル
合意上ノ代理人アラサルトキ

第三 所有者中ニ合意上ノ分割ヲ承諾セサル者アルトキ

第四百十條 裁判上ノ分割ヲ要スルトキハ相續地ノ區裁判所ハ相續人、
債權者又ハ檢事ノ請求ニ因リ封印ヲ爲シ及ヒ目錄ヲ作ラシム可シ

第四百十一條 裁判上ノ分割ヲ要セサルトキト雖モ債權者ハ區裁判所ノ
許可ヲ得テ封印及ヒ目錄調製ヲ請求スルコトヲ得但執行力アル證書ヲ
有スルトキハ此許可ヲ要セス

封印ノ除去ニ付テハ總テノ債權者異議ヲ述フルコトヲ得

第四百十二條 所有者ノ各自ハ不分割ノ現物ニテ其部分ノ引渡ヲ要求

スルコトヲ得但債權者其引渡ヲ差押ヘタルトキ又ハ所有者ノ多數ヲ以
テ其財産ノ負擔スル債務及ヒ費用ヲ豫メ辨濟スル爲メ賣却ヲ必要ト決
シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百十三條 未成年者、禁治産者瘋癲者又ハ不在者ノ爲メ定メタル規
則ニ違ヘル分割ハ其者ノ利益ニ於テノニ假定ノモノトス

第四百十四條 分割ノ際利益ノ相反スル無能力者又ハ不在者ノ數人アル
トキハ其各自ノ爲メ臨時保佐人又ハ管理人ヲ指定ス可シ

第四百十五條 分割ノ結了シタルトキ各所有者ハ其領收シタル物ノ證書
ヲ保有ス

所有者ノ總體又ハ數人ニ分割シタル一箇ノ物ノ證書ハ其最大ノ部分ヲ
領收シタル者之ヲ保有ス最大ノ部分ヲ領收シタル者ナキハ各所有者
ノ協議ヲ以テ其保有者ヲ定ム若シ協議ハサルハ裁判所之ヲ指定ス
何レノ場合ニ於テモ證書ノ保有者ハ他ノ所有者ノ求メニ應シテ之ヲ便
用セシム可シ

第四百十六條 所有者ハ各自ニ受クル部分ノ割合ヲ以テ債務ヲ分擔ス

第二款 分割ノ効力及ヒ擔保

第四百十七條 分割ノ効力ニ付テハ第五百五十五條ノ規定ヲ適用ス

第四百十八條 各所有者ハ分割前ノ原因ニ基テ分割物ノ妨碍及ヒ追奪ニ付キ互ニ擔保ノ責ニ任ス但別段ノ合意ヲ以テ擔保ヲ免除シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百十九條 債權ニ付テハ分割ノ當時ニ於ケル債務者ノ資力ノ限度マテニ非サレハ各所有者擔保ノ責ニ任セス

第三款 分割ノ銷除

第四百二十條 分割ハ財產編第三百四條以下ニ定メタル區別ニ從ヒ不成立又ハ無効タル外尙ホ所有者ノ一人カ其領收シタル部分ニ付キ四分之一以上ノ缺損ヲ被フリタルトキハ其缺損ノ爲メ之ヲ銷除スルコトヲ得缺損ノ査定ハ分割ノ時ニ於ケル物ノ價格ニ從ヒテ之ヲ爲ス可シ

第四百二十一條 分割銷除ノ訴權ハ財產編第五百四十四條以下ニ定メタル時効及ヒ諾諾ニ因リテ消滅ス

第十五章 夫婦財產契約

第一節 總則

第四百二十二條 夫婦財產契約ハ婚姻ノ儀式前ニ之ヲ爲シ及ヒ公證人ヲシテ其證書ヲ作ラシムルニ非サレハ成立セス
婚姻ノ儀式後ハ契約ヲ變更スルコトヲ得ス

第四百二十三條 婚姻ヲ爲スコトヲ得ル未成年者ハ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ尊屬親又ハ後見人ノ立會ニテ財產契約ヲ爲スコトヲ得

第四百二十四條 財產契約ヲ爲サシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ財產ノ關係ハ法定ノ制ニ從フ

第四百二十五條 日本ニ於テ財產契約ヲ爲サシテ婚姻ヲナシタル外國人ハ夫タル者ノ本國ニ行ハルル普通ノ制ニ從ヒタルモノト看做ス

第二節 法定ノ制

第四百二十六條 婦又ハ入夫カ婚姻ノ儀式ノ時ニ於テ現ニ所有シ又ハ將來ニ所有ス可キ特有財產ヨリ婚姻中ニ生スル果實及ヒ自己ノ勞力ニ因リテ婚姻中ニ得タル所得ハ婚姻中ノ費用分擔ノ爲メニ之ヲ配偶者ニ供出シタルモノト看做ス

第四百二十七條 夫又ハ戶主タル婦カ配偶者ノ特有財產ニ付テ有スル權利ハ用益者ノ權利ニ同シ
又配偶者ノ特有財產ニ關シテ收益ヲ爲ス夫又ハ戶主タル婦ハ用益者ノ負擔スル修繕其他收益ヲ以テ辨濟ス可キ義務ヲ負フ

第四百二十八條 夫ハ婦ノ特有財產入夫ハ戶主タル婦ノ財產ヲ管理ス

第四百二十九條 夫又ハ入夫ハ婦又ハ戶主タル婦ノ承諾ヲ得ルニ非サレ

ハ婦ノ特有財産又ハ戸主タル婦ノ財産ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スル
コトヲ得ス但人事編第二百二十九條及ヒ第二百七十五條ノ場合ハ此限
ニ在ラス

第四百三十條 入夫ハ戸主タル婦ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ婚姻中ノ所得
ヲ讓渡シ又ハ之ヲ擔保ニ供スルコトヲ得ス但其特有財産ヨリ生スル果
實及ヒ自己ノ勞力ニ因リテ得タル所得ハ此限ニ在ラス

第四百三十一條 夫カ婦ノ特有財産ニ付キ入夫カ戸主タル婦ノ財産ニ付
キ其承諾ヲ得スシテ爲ス貸貸借ニ關シテハ財産編第一百十九條以下ノ規
定ヲ適用ス

第四百三十二條 管理ノ失當ニ因リ夫又ハ入夫カ婦ノ特有財産又ハ戸主
タル婦ノ財産ヲ危險ニ置クトキハ婦又ハ戸主タル婦ハ自ラ其財産ヲ管
理セシト請求スルコトヲ得

第四百三十三條 婦又ハ入夫カ婚姻ノ儀式ノ時ニ於テ負ヘル債務及ヒ婚
姻中ニ生スル債務ニ付テハ債權者ハ婦又ハ入夫ノ特有財産ニ對シテ債
利ヲ行フコトヲ得

第四百三十四條 婦ノ名ヲ以テ生セシメタル債務ニ付テハ債權者ハ其債
務カ家事管理ノ爲メニ生シタルコトヲ證スルトキニ限り夫ニ對シテ其

辨濟ヲ請求スルコトヲ得
入夫ノ名ヲ以テ生セシメタル債務ニ付テハ債權者ハ其債務ノ財産管理
ノ爲メニ生シタルコトヲ證スルトキニ限り戸主タル婦ニ對シテ其辨濟
ヲ請求スルコトヲ得
第四百三十五條 婦又ハ入夫ノ特有財産タルコトヲ證セサル財産ハ總テ
夫又ハ戸主タル婦ニ屬スルモノト看做ス

○第二款 人事編

▲明治廿三年十月法律第九十八號

民法人事編目錄

第一章 私權ノ享有及ヒ行使

第二章 國民分限

第一節 國民分限ノ取得

第二節 國民分限ノ喪失及ヒ回復

第三節 國民分限變更ノ方式及ヒ効力

第三章 親屬及ヒ姻屬

第四章 婚姻

第一節 婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件

○第二類○民法○人事編

第二節 婚姻ノ儀式

第三節 日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻

第四節 婚姻成立ノ證據

第五節 婚姻ノ不成立及ヒ無効

第六節 婚姻ノ効力

第七節 罰則

第五章 離婚

第一節 協議ノ離婚

第二節 特定原因ノ離婚

第一款 離婚及ヒ不受理ノ原因

第二款 假處分

第三款 離婚ノ訴

第三節 離婚ノ効力

第六章 親子

第一節 親子ノ分限ノ證據

第二節 否認訴權

第三節 庶子及ヒ私生子ノ適出子ト爲ル權

第七章 養子縁組

第一節 養子縁組ニ必要ナル條件

第二節 養子縁組ノ儀式

第三節 養子縁組ノ證據

第四節 養子縁組ノ不成立及ヒ無効

第五節 養子縁組ノ効力

第六節 罰則

第八章 養子ノ離縁

第一節 協議ノ離縁

第二節 特定原因ノ離縁

第三節 離縁ノ効力

第九章 親權

第一節 子ノ身上ニ對スル權

第二節 子ノ財産ノ管理

第三節 嫡母、繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則

第十章 後見

總則

- 第一節 後見人
- 第二節 後見監督人
- 第三節 親族會
- 第四節 後見ノ免除
- 第五節 後見人及ヒ親族會員ノ缺格、除斥及ヒ罷黜
- 第六節 後見人ノ管理
- 第七節 後見監督人ノ任務
- 第八節 後見ノ終了
- 第九節 後見ノ計算
- 第十一章 自治産
- 第十二章 禁治産
- 第一節 民事上禁治産
- 第二節 准禁治産
- 第三節 刑事上禁治産
- 第四節 瘋癲者ノ財産ノ假管理
- 第十三章 戸主及ヒ家族
- 第十四章 住所

- 第十五章 失踪
- 第一節 失踪ノ推定
- 第二節 失踪ノ宣言
- 第三節 失踪宣言ノ効力
- 第四節 失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル通則
- 第五節 不在者ニ關スル規則
- 第十六章 身分ニ關スル證書

民法

人事編

- 第一章 私權ノ享有及ヒ行使
- 第一條 凡ソ人ハ私權ヲ享有シ法律ニ定メタル無能力者ニ非サル限りハ自ラ其私權ヲ行使スルコトヲ得
- 第二條 胎内ノ子ト雖モ其利益ヲ保護スルニ付テハ既ニ生マレタル者ト看做ス
- 第三條 私權ノ行使ニ關スル成年ハ滿二十年トス但法律ニ特別ノ規定アルトキハ此限ニ在ラス
- 第四條 外國人ハ法律又ハ條約ニ禁止アルモノヲ除ク外私權ヲ享有ス

第五條 法人ハ公私ヲ問ハス法律ノ認許スルニ非サレハ成立スルコトヲ得ス又法律ノ規定ニ從フニ非サレハ私權ヲ享有スルコトヲ得ス
第六條 法律ハ外國法人ノ成立ヲ認許セス但條約又ハ特許アルトキハ此限ニ在ラス

成立ノ認許ヲ得タル外國法人ハ日本ニ成立スル同種ノ者ト同一ノ私權ヲ享有ス但條約中又ハ特許中ニ其權利ヲ制限シタルキハ此限ニ在ラス

第二章 國民分限

第一節 國民分限ノ取得

第七條 日本人ノ子ハ外國ニ於テ生マレタルトキト雖モ日本人トス

父母分限ヲ異ニスルトキハ父ノ分限ヲ以テ子ノ分限ヲ定ム

父ノ知レサルトキハ子ハ母ノ分限ニ從フ

父母共ニ知レサルトキハ日本ニ於テ生マレタル子ハ日本人トス若シ其

出生地ノ知レサルトキハ現ニ日本國內ニ在ル者ハ日本人トス

第八條 左ノ場合中ノ一ニ在ル子ハ日本人ノ分限ヲ選擇スルコトヲ得

第一 父カ外國人タルモ母ノ日本人タルトキ

第二 外國人ノ子タルモ日本ニ生マレタルトキ

第三 日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ子ニシテ其分限喪失ノ後ニ生マ

レタル者ナルトキ

第四 歸化人ノ子ニシテ成年者ナルトキ

第九條 日本人ノ分限ヲ選擇セント欲スル子ハ本國法律ニ從ヒテ成年ニ至リシ時ヨリ一个年内ニ其意思ヲ申述シ且其申述ヨリ一个年内ニ住所ヲ日本ニ定ム可シ

成年ノ後ニ至リテ外國人ノ認知シタル私出子ハ認知ヨリ又歸化人ノ子ハ歸化ヨリ一个年内ニ右ノ申述ヲ爲スコトヲ得

第十條 日本人ト婚姻スル外國ノ女ハ日本人ノ分限ヲ取得シ婚姻解消ノ後ト雖モ其分限ヲ保有ス

第十一條 外國人ハ歸化ニ因リテ日本人ノ分限ヲ取得スルコトヲ得其條件及ヒ方式ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

歸化人ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ日本ニ住居ヲ定メタルトキハ日本人ノ分限ヲ取得ス

第二節 國民分限ノ喪失及ヒ回復

第十二條 日本人ハ左ノ場合ニ於テ其分限ヲ失フ

第一 任意ニ外國人ノ分限ヲ取得シタルトキ

第二 日本政府ノ允許ナクシテ外國政府ノ官職ヲ受ケ又ハ外國ノ軍

隊ニ入りタルトキ

第十三條 前條ノ場合ニ於テ日本人ノ分限ヲ失ヒタル者其分限ヲ回復セ
ント欲スルトキハ日本政府ノ允許ヲ得タル上歸國シテ其意思ヲ申述シ
且一个年内ニ住所ヲ日本ニ定ムルトキハ其分限ヲ回復ス

第十四條 日本人ノ分限ヲ失ヒタル者ノ婦及ヒ未成年ノ子ハ引續キ日本
ニ住居スルニ非サレハ日本人ノ分限ヲ失フ但婦ハ第十五條第二項ノ規
定ニ從ヒ又未成年ノ子ハ第九條第一項ノ規定ニ從ヒ其分限ヲ回復スル
コトヲ得

第十五條 外國人ト婚姻スル日本ノ女ハ日本人ノ分限ヲ失フ
然レトモ婚姻解消ノ後日本ニ住居シ又復歸シ且日本ニ住所ヲ定ムルコ
トヲ申述スルトキハ其分限ヲ回復ス

第三節 國民分限變更ノ方式及ヒ効力
第十六條 國民分限ノ變更ニ關スル申述ハ日本ニ在リテハ住居地ノ身分
取扱吏ニ外國ニ在リテハ日本公使館又ハ日本領事館ニ之ヲ爲ス可シ
此申述ハ部理代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第十七條 國民分限ノ變更ハ將來ニ非サレハ其効力ヲ生セズ
第十八條 國民分限ハ出生ノ時ヲ以テ之ヲ定ム然レトモ懷胎ヨリ出生マ

テノ間父又ハ母ノ分限ニ變更アリタルトキハ子ハ日本ニ住居スル場合
ニ限リ日本人ノ分限ヲ保有ス

第三章 親屬及ヒ姻屬

第十九條 親屬トハ血統ノ相聯結スル者ノ關係ヲ謂フ

六親等ノ外ハ親屬ノ關係アルモ民法上ノ効力ヲ生セズ

第二十條 親屬ノ遠近ハ世數ヲ以テ之ヲ定メ一世ヲ以テ一親等トス

親等ノ連續スルヲ親系ト爲ス彼ヨリ此ニ直下スル者ノ親系ヲ直系ト謂
ヒ其直下セズシテ同始祖ニ出ツル者ノ親系ヲ傍系ト謂フ

直系ニ於テ自己ノ出ツル所ノ親族ヲ尊屬親ト謂ヒ自己ヨリ出ツル所ノ
親族ヲ卑屬親ト謂フ

第二十一條 直系ニ於テハ親族ノ世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

傍系ニ於テハ親族ノ一人ヨリ同始祖ニ遡リ又其始祖ヨリ他ノ一人ニ下
タル其間ノ世數ヲ算シテ親等ヲ定ム

第二十二條 養子縁組ハ養子ト養父母及ヒ其親族トノ間ニ親屬ニ同シキ
關係ヲ生ズ但養子トハ男女ヲ總稱ス

第二十三條 嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ關係ハ親子ニ準ス

第二十四條 姻屬トハ婚姻ニ因リテ夫婦ノ一方ト其配偶者ノ親族トノ間

ニ生スル關係ヲ云フ
然レトモ婦ノ夫家ニ於ケル又入夫ノ婦家ニ於ケル尊屬親トノ關係ハ親屬ニ準ス

第二十五條 夫婦ノ一方ノ親族ハ其親系及ヒ親等ニ於テ配偶者ノ姻族トス

姻屬ノ關係ハ婚姻無効ノ判決又ハ離婚ニ因リテ止ム又生存配偶者其家ヲ去ルニ因リテ止ム

第二十六條 直系ノ親族ハ相互ニ養料ヲ給スル義務ヲ負擔ス

嫡母、繼父又ハ繼母ト其配偶者ノ子トノ間及ヒ婦又ハ入夫ト夫家又ハ婦家ノ尊屬親トノ間モ亦同シ

第二十七條 兄弟姉妹ノ間ニハ疾病其他本人ノ責ニ歸セサル事故ニ因リテ自ラ生活スル能ハサル場合ニ限リ相互ニ養料ヲ給スル義務アリ

第二十八條 養料ノ義務ヲ負擔ス可キ者ノ順位ハ左ノ如シ

第一 第二十六條ニ掲ケタル者

第二 兄弟姉妹

直系ノ親屬ノ間ハ其親等ノ最モ近キ者養料ノ義務ヲ負擔ス

第二十九條 養料ハ之ヲ受ク可キ者ノ必需ト之ヲ給ス可キ者ノ資産トニ

應シテ其額ヲ定ム

第四章 婚姻

第一節 婚姻ヲ爲スニ必要ナル條件

第三十條 男ハ滿十七年女ハ滿十五年ニ至ラサレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十一條 配偶者アル者ハ重ネテ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十二條 夫ノ失踪ニ原因スル離婚ノ場合ヲ除ク外女ハ前婚解消ノ後六个月内ニ再婚ヲ爲スコトヲ得ス

此制禁ハ其分婉シタル日ヨリ止ム

第三十三條 姦通ノ原因ニ由リテ離婚ノ裁判ヲ言渡サレタル曲者ハ相姦者ト婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

第三十四條 直系ニ於テハ尊屬親ト身屬親トノ間婚姻ヲ禁ス

第三十五條 傍系ニ於テハ兄弟姉妹及ヒ伯叔父姑甥姪ノ間婚姻ヲ禁ス

第三十六條 直系ノ姻族ノ間ハ其關係ノ止ミタル後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十七條 養子ト養父母又ハ其尊屬親トノ間及ヒ養父母又ハ其尊屬親ト養子ノ配偶者又ハ其尊屬親トノ間ハ離縁ノ後ト雖モ婚姻ヲ禁ス

第三十八條 子ハ父母ノ承諾ヲ受クルニ非サレハ婚姻ヲ爲スコトヲ得ス

○第二類○民法○人事編

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

繼父又ハ繼母アル場合ニ於テ其配偶者タル母又ハ父ノ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ繼父又ハ繼母ノ許諾ヲ受ク可シ其許諾ニ付テ第九章第三節ノ規定ヲ適用ス

第二十九條 父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ク可シ

祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第四十條 父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ滿二十年ニ至ラサル者ニ限リ後見人ノ許諾ヲ受ク可シ

第四十一條 父母ノ知レサル子ハ二十年未滿ニ限リ後見人ノ許諾ヲ受ク可シ

第四十二條 育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ婚姻ハ二十年未滿ニ限リ院長ノ許諾ヲ受ク可シ

第二節 婚姻ノ儀式

第四十三條 婚姻ノ儀式ハ當事者ノ一方ノ住所又ハ居所ノ地ニ於テ之ヲ

行フ可シ

雙方ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ前ニ其地ノ身分取扱吏ニ婚姻ヲ爲サントスル申出ヲ爲スコトヲ要ス但此申出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四十四條 雙方ハ前條ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出ス可シ

- 第一 出生證書
- 第二 前婚ノ解消ヲ證スル證書
- 第三 婚姻ニ必要ナル許諾又ハ其許諾書ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四十五條 雙方又ハ一方カ出生證書ヲ呈示スル能ハサルハ出生地、住所又ハ居所ノ區裁判所ノ授付シタル保證書ヲ以テ出生證書ニ代用スルコトヲ得

保證書ハ男女ヲ問ハス又親族ト否トヲ問ハス證人二人カ左ノ諸件ニ付キ區裁判所ニ爲シタル申述ヲ記載ス

- 第一 本人ノ氏名、職業、住所及ヒ居所並ニ其父母分明ナルトキハ其氏名、職業、住所及ヒ居所
- 第二 本人ノ出生ノ地及ヒ年月日
- 第三 本人ノ出生證書ヲ呈示スル能ハサル原因及ヒ證人ノ其實事ヲ

聞知シタル緣由

第四十六條 身分取扱更ハ婚姻ノ儀式ヲ行フ障碍ト爲ル可キ法律上ノ原因アルコトヲ知リタルトキハ其儀式ヲ行フコトヲ差止ム可シ

此場合ニ於テハ身分取扱更ハ理由ヲ記シタル差止書ヲ授付ス可シ
當事者此差止ヲ不當ナリト思料スルトキハ區裁判所ニ抗告シテ其取消ヲ求ムルコトヲ得

裁判所ハ休職事件ト同シク之ヲ取扱フ可シ

第四十七條 婚姻ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ其儀式ヲ行フニ因リテ成ル

當事者ノ承諾ハ此儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

第四十八條 婚姻ノ儀式ハ其申出ノ日ヨリ三日後二十日內ニ之ヲ行フコトヲ要ス

第四十九條 婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ雙方ヨリ十日內ニ身分取扱更ニ其届出ヲ爲ス可シ但此届出ハ代理人ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二節 日本人外國ニ於テ爲シ及ヒ外國人日本ニ於テ爲ス婚姻
第五十條 外國ニ於テ日本人ノ間又ハ日本人ト外國人トノ間ニ婚姻ヲ爲ストキハ其國ノ規則ニ從ヒテ儀式ヲ行フコトヲ得但本章第一節ニ定メ

タル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第五十一條 外國ニ於テ日本人ノ間ニ日本ノ規則ニ從ヒテ婚姻ヲ爲スルキハ其國ニ在ル日本公使館又ハ日本領事館ニ婚姻ノ申出ヲ爲スコトヲ要ス

婚姻ノ儀式ヲ行ヒタルトキハ第四十九條ノ規定ニ從ヒテ其届出ヲ爲ス可シ

第五十二條 日本ニ於テ外國人カ婚姻ヲ爲サントスルトキハ其能力ハ本國ノ法律ニ從フ但第三十一條乃至第三十七條ノ條件ニ違背セサルコトヲ要ス

外國人ハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ婚姻ヲ爲スニ障碍ナキコトヲ證スル本國相當官署ノ認定書ヲ差出タス可シ

第四節 婚姻成立ノ證據

第五十三條 婚姻成立ノ證據ハ婚姻證書ヲ以テ之ヲ舉ク可シ但第二百九十一條ニ規定スルモノハ此限ニ在ラズ

第五十四條 婚姻證書ヲ増減シ毀棄シ隱匿シ又ハ片紙ニ記載シタル場合ニ於テ刑事又ハ民事ノ訴訟ニ因リテ婚姻ノ成立ヲ認めタル判決ハ之ヲ婚姻證書ニ代用スルコトヲ得

第五節 婚姻ノ不成立及ヒ無効

第五十五條 人違、喪心又ハ強暴ニ因リテ雙方又ハ一方ノ承諾ノ全ク欠
缺シタル婚姻ハ不成立トス

第三十四條乃至第三十七條ノ規定ニ違ヒテ爲シタル婚姻モ亦不成立ト
ス

婚姻ノ不成立ハ何人ニ限ラス何時ニテモ之ヲ申立ツルコトヲ得

第五十六條 第三十條第三十一條及ヒ第三十三條ノ規定ニ違ヒテ婚姻ヲ
爲シタルトキハ雙方、尊屬親又ハ現實ノ利益ヲ有スル者ヨリ何時ニテ
モ其無効ヲ請求スルコトヲ得

右同一ノ場合ニ於テ檢事ハ夫婦ノ生存中ニ限り職權ヲ以テ婚姻ノ無効
ヲ請求スルコトヲ得

第五十七條 不適齡ニ付キ無効ヲ請求スル權利ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 適齡ナラザリシ者カ適齡ニ至レル後明示ニテ婚姻ヲ認諾シ又
ハ三ヶ月ヲ過キタルトキ

第二 無効ノ請求後ト雖モ婦カ適齡ナラスシテ懐胎シタルトキ

第三 夫カ適齡ナラスシテ婦ノ懐胎シタルトキ但婦ノ姦通ヲ證スル
トキハ格別ナリトス

第五十八條 重婚ニ原因スル婚姻無効ノ請求アリタル場合ニ於テ後婚ノ

雙方カ前婚ノ不成立、無効又ハ離婚ヲ主張スルトキハ先ツ其裁判ヲ爲
ス可シ

前婚ノ配偶者カ失踪シタルトキハ其失踪中ハ重婚ノ無効訴權ヲ行フコ
トヲ得ス

第五十九條 左ノ場合ニ於テハ婚姻ハ無効トス

第一 身分取扱吏ニ婚姻ノ申出ヲ爲サス又ハ其差止ヲ受ケタルニ拘
ハラス儀式ヲ行ヒタルトキ

第二 身分取扱吏ノ管轄違ナルトキ

第三 第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四 證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒタルトキ

此無効ハ第五十六條ニ掲ゲタル者ヨリ之ヲ請求スルコトヲ得但婚姻儀
式後一介年ヲ過キタルトキハ無効訴權ヲ行フコトヲ得ス

第六十條 第二十八條乃至第四十二條ニ定メタル承諾ナクシテ婚姻ヲ爲
シタルトキハ其承諾ヲ與フ可キ者又ハ之ヲ受ク可キ者ヨリ其無効ヲ請
求スルコトヲ得

承諾アリタル場合ト雖モ其承諾カ強暴ニ原因シタルトキモ亦同シ

第六十一條 前條ノ場合ニ於テ婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ婚姻ヲ認諾セ
スシテ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ法律ニ定メタル順位
ニ從ヒテ其許諾ヲ與フ可キ者ハ無効訴權ヲ行フコトヲ得

第六十二條 第六十條ニ掲ケタル無効訴權ハ左ノ場合ニ於テ消滅ス

第一 婚姻ノ許諾ヲ與フ可キ者カ認諾ヲ爲シ又ハ婚姻アリタルコト
ヲ知リシ後三ヶ月ヲ過キタルトキ

第二 三ヶ月内ト雖モ許諾ヲ受ク可キ者カ婚姻上ノ成年ニ至リ又ハ
死亡シタルトキ

第六十三條 強暴ニ因リテ承諾ニ瑕疵アル婚姻ノ無効ハ強暴ヲ受ケタル
者ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得

第六十四條 前條ノ場合ニ於テ配偶者強暴ヲ免カレタル後明示ニテ認諾
シ又ハ三ヶ月間引續キ同居シタルトキハ婚姻ノ無効ヲ請求スルコトヲ
得ス其同居セサル場合ニ於テモ無効訴權ハ一年ヲ以テ消滅ス

第六十五條 裁判所ハ婚姻ノ不成立又ハ無効ノ訴訟中夫婦ノ一方ノ請求
ニ因リ又ハ職權ヲ以テ婦又ハ夫ニ住家ヲ去ル可キヲ命スルコトヲ得

第六十六條 無効ノ言渡アリタル婚姻ハ子ニ付テハ其出生ノ婚姻前後ナ
ルヲ問ハス法律上ノ効力ヲ生ス

第六節 婚姻ノ効力

第六十七條 婚姻ハ其儀式ヲ行ヒタル日ヨリ効力ヲ生ス但夫婦財産契約
ニ付テハ婚姻ノ届出後ニ非サレハ第三者ニ對シテ婚姻ノ効力ヲ援用ス
ルコトヲ得ス

第六十八條 婦ハ夫ノ許可ヲ得ルニ非サレハ贈與ヲ爲シ之ヲ受諾シ不動
産ヲ讓渡シ之ヲ擔保ニ供シ借財ヲ爲シ債權ヲ讓渡シ之ヲ質入シ元本ヲ
領收シ保證ヲ約シ及ヒ身體ニ羈絆ヲ受クル約束ヲ爲スコトヲ得ス又和
解ヲ爲シ仲裁ヲ受ケ及ヒ訴訟ヲ起スコトヲ得ス

第六十九條 夫ノ許可ハ特定又ハ總括ナルコトヲ得但總括ノ許可ハ證書
ヲ以テ之ヲ與フルコトヲ要ス

夫ハ夫婦財産契約ニ依リテ與ヘタル總括ノ許可ト雖モ之ヲ廢罷スルコ
トヲ得

第七十條 左ノ場合ニ於テハ婦ハ夫ノ許可ヲ得ルコトヲ要セス

第一 夫カ失踪ノ推定ヲ受ケタルトキ

第二 夫カ禁治産又ハ准禁治産ヲ受ケタルトキ

第三 夫カ瘋癲ノ爲メ病院又ハ監置ニ在ルトキ

第七十一條 夫ハ婦ニ與ヘタル許可ニ因リテ義務ヲ負擔セス

第七十二條 夫ノ許可ヲ得スシテ婦ノ爲シタル行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

此銷除ハ夫婦ノ各自及ヒ婦ノ承繼人ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第七十三條 夫ニ屬スル銷除訴權ハ其銷除シ得ヘキ行爲ヲ知リタル日ヨリ五ヶ年ノ時効ニ因リ又ハ婚姻ノ解消ニ因リテ消滅ス
婦及ヒ其承繼人ニ屬スル銷除訴權ハ婚姻解消ノ日ヨリ五ヶ年ノ時効ニ因リテ消滅ス

財產編第五百四十四條以下ノ規定ハ本條ノ銷除訴權ニ之ヲ適用ス

第七節 罰則

第七十四條 婚姻申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱吏ハ二圓以上二十圓以下ノ過料ニ處ス

第七十五條 婚姻ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因アルヲ知リテ其儀式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十六條 第三十二條ノ制禁ニ違背シテ再婚ヲ爲シタル婦ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス其情ヲ知リテ婚姻ヲ爲シタル夫及ヒ婚姻ノ儀

式ヲ行フコトヲ差止メサル身分取扱吏モ亦同シ

第七十七條 夫婦ノ一方ニシテ婚姻ノ無効ヲ致シタル原因ヲ知リ之ヲ他ノ一方ニ隱秘シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第五章 離婚

第一節 協議ノ離婚

第七十八條 夫婦ハ下ニ定メタル條件及ヒ方式ニ從ヒ協議ヲ以テ離婚ヲ爲スコトヲ得

第七十九條 離婚セントスル夫婦ハ婚姻許諾ノ爲メ第四章第一節ニ定メタル規則ニ從ヒ各其父母、祖父母又ハ後見人ノ許諾ヲ受クルヲ要ス
第八十條 夫婦ハ離婚協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第一 婚姻證書

第二 離婚ノ許諾ヲ與フ可キ者ノ許諾書若シ其者死亡シ又ハ意思ヲ表スル能ハサルトキハ死亡證書又ハ其事由ヲ證スル書類

第二節 特定原因ノ離婚

第一款 離婚及ヒ不受理ノ原因

第八十一條 離婚ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

○第二類○民法○人事編

第一 姦通但夫ノ姦通ハ刑ニ處セラレタル場合ニ限ル
 第二 同居ニ堪ヘサル暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱
 第三 重罪ニ因レル處刑
 第四 竊盜、詐欺取財又ハ猥褻ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑
 第五 惡意ノ遺棄
 第六 失踪ノ宣言
 第七 婦又ハ入夫ヨリ其家ノ尊屬親ニ對シ又ハ尊屬親ヨリ婦又ハ入夫ニ對スル暴虐、脅迫及ヒ重大ノ侮辱
 第八十二條 離婚ノ請求ヲ爲ス一方ニ對シテ離婚ノ原因存スルトキハ他ノ一方モ反訴ヲ以テ離婚ヲ請求スルコトヲ得
 然レトモ前條第三號及ヒ第四號ニ記載スル重罪又ハ輕罪ノ刑ニ處セラレタル一方ハ他ノ一方ノ處刑ヲ原因トシテ離婚ヲ請求スルコトヲ得ス
 第二款 假處分
 第八十三條 離婚ノ訴訟中子ノ監護ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス夫ニ屬ス但入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス
 然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ其監護ヲ他ノ一方又ハ第三者ニ命スルコトヲ得

第八十四條 離婚ノ訴訟中婦ハ原告又ハ被告タルヲ問ハス裁判所ノ許可ヲ得テ住家ヲ去ルコトヲ得此場合ニ於テハ自己ノ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得
 裁判所ハ夫ノ意見ヲ聽キテ婦ノ移居ス可キ家屋ヲ指示スルコトヲ要ス若シ婦カ正當ノ理由ナクシテ其家屋ヲ去ルトキハ夫ハ養料ヲ拒ムコトヲ得
 第八十五條 入夫及ヒ婿養子ニ付テハ裁判所ハ離婚ノ訴訟中夫ヲシテ住家ヲ去ラシムルコトヲ得此場合ニ於テハ前條第一項ノ規定ヲ適用ス
 第八十六條 裁判所ハ住家ヲ去ル婦又ハ夫ノ請求ニ因リ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得
 第三款 離婚ノ訴
 第八十七條 離婚ヲ請求スル訴權ハ夫婦ノミニ屬ス
 第八十八條 離婚ノ原因ハ通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證ス可シ但シ自白ノミヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得ス又尊屬親ヲ除外親族、姻族又ハ雇人ニ關スル忌避ノ規定ヲ適用セズ
 第三節 離婚ノ効力
 第八十九條 離婚ハ其届出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ効力ヲ生セズ

第九十條 離婚ノ後子ノ監護ハ夫ニ屬ス但入夫及ヒ婿養子ニ付テハ婦ニ屬ス

然レトモ裁判所ハ夫、婦、親族又ハ檢事ノ請求ニ因リ子ノ利益ヲ慮リテ之ヲ他ノ一方又ハ第三者ノ監護ニ付スルコトヲ得

第六章 親子

第一節 親子ノ分限ノ證據

第九十一條 婚姻中ニ懐胎シタル子ハ夫ノ子トス

婚姻ノ儀式ヨリ百八十日後又ハ夫ノ死亡若クハ離婚ヨリ三百日內ニ生マレタル子ハ婚姻中ニ懐胎シタルモノト推定ス

第九十二條 嫡出子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス

第九十三條 出生證書ヲ呈示スル能ハサルトキハ親子ノ分限ハ嫡出子タル身分ノ占有ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得但第二百九十一條ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第九十四條 身分ノ占有トハ夫婦ト其婚姻ニ因リテ生マレタリト主張スル者トノ間其者ノ出生ノ時ヨリ親子ノ分限ヲ證スルニ足ル可キ事實ノ湊合スルヲ謂フ其實ノ著明ナルモノ左ノ如シ

第一 子ナリト主張スル者カ常ニ其父ナリトスル者ノ氏ヲ稱シタル

コト

第二 子ナリト主張スル者カ常ニ其父母ナリトスル者ヨリ嫡出子ノ如ク取扱ハレ其養育、教育ヲ受ケタルコト

第三 子ナリト主張スル者カ常ニ親族及ヒ世上ニ於テ嫡出子ト認メテレタルコト

第九十五條 庶子ハ父ノ届出ニ基ク出生證書ヲ以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十六條 父ノ知レサル子ハ私生子トス

第九十七條 私生子ハ出生證書ヲ以テ之ヲ證ス但身分ノ占有ニ關スル規定ヲ適用ス

第九十八條 私生子ハ父之ヲ認知スルニ因リテ庶子ト爲ル

第九十九條 庶子ノ出生届及ヒ認知ハ父自ラ身分取扱更ニ之ヲ爲スコトヲ要ス未成年者ト雖モ自ラ之ヲ爲スコトヲ得

第二節 否認訴權

第一百條 否認訴權ハ夫ノミニ屬ス但子ノ出生後ニ非サレハ之ヲ行フコトヲ得ス

第一百一條 夫カ民事上ノ禁治産ヲ受ケタルトキハ後見人又ハ後見監督人

ハ親族會ノ許可ヲ得テ否認訴權ヲ行フコトヲ得

第二百二條 夫カ子ノ出生ノ場所ニ在ルトキハ出生ヨリ三個月ノ期間内ニ限リ否認訴權ヲ行フコトヲ得但夫カ婦ト住家ヲ異ニシ又ハ婦カ子ノ出生ヲ夫ニ隱祕シタルルハ此期間ハ子ノ出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス若シ夫カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ訴權ノ期間ヲ四個月トシ子ノ出生ヲ知リタル日ヨリ起算ス

第三節 庶子及ヒ私生子ノ嫡出子ト爲ル權

第二百三條 庶子ハ父母ノ婚姻ニ因リテ嫡出子ト爲ル

私生子ハ父母ノ婚姻ノ後父ノ認知シタルニ因リテ嫡出子ト爲ル

第二百四條 死亡シタル子ト雖モ前條ノ規定ニ依テ嫡出子ト爲ル此場合ニ於テハ其効力ハ子ノ生ミタル子ヲ利ス

第二百五條 父母ノ婚姻ノ時マテニ父子ノ分限確定シタル者ハ婚姻ノ日ヨリ又婚姻ノ後ニ確定シタル者ハ確定ノ日ヨリ嫡出子ノ權利ヲ有ス

第七章 養子縁組

第一節 養子縁組ニ必要ナル條件

第二百六條 何人ト雖モ養子ト爲ル可キ者ヨリ年長ニシテ成年ナルニ非サレハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

遺言ヲ爲ス能力アル者ハ遺言養子ヲ爲スコトヲ得

第二百七條 家督相續ヲ爲スコキ男子アル者ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス

第二百八條 後見人ハ管理ノ計算ヲ爲ササル前ニ被後見人ヲ養子ト爲スコトヲ得ス但遺言養子ト爲スハ此限ニ在ラス

第二百九條 戸主ニ非サル者ハ養子ヲ爲スコトヲ得ス但推定家督相續人ニシテ戸主ノ許諾ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第二百十條 配偶者アル者ハ其配偶者ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ養子ヲ爲スコトヲ得ス但配偶者カ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ此限ニ在ラス

配偶者アル者ハ其配偶者ト一致スルニ非サレハ養子ト爲ルコトヲ得ス

第二百十一條 家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

又推定家督相續人ハ他人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

然レトモ分家ヨリ本家ヲ承繼スル必要アルトキハ本條ノ規定ヲ適用セ

ス

第二百十二條 外國人ハ日本人ノ養子ト爲ルコトヲ得ス

第二百十三條 養子縁組ハ當事者ノ承諾ニ因リテ成ル

第二節 養子縁組ノ儀式

第二百十三條 養子縁組ハ當事者ノ承諾ニ因リテ成ル

○第二類○民法○人事編

六百七十五

此承諾ハ證人二人ノ立會ヲ得テ慣習ニ從ヒ縁組ノ儀式ヲ行フニ因リテ成立ス

縁組ノ儀式ヲ行フニ付テハ第四十三條、第四十六條及ヒ第四十八條ノ規定ヲ適用ス

第百十四條 當事者ハ身分取扱吏ニ縁組ノ申立ヲ爲ス時ニ於テ左ノ書類ヲ差出タス可シ

第一 養子ヲ爲ス者及ヒ養子ト爲ル者ノ出生證書又ハ之ニ代用スル保證書

第二 家督相續ヲ爲ス可キ男子ナルコトヲ證スル身分取扱吏ノ認定書又ハ推定家督相續人廢除ノ證書

第三 配偶者ノ承諾書又ハ承諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第四 後見管理ノ計算ヲ爲シタル證明書

第五 縁組ニ必要ナル許諾書又ハ許諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第百十五條 滿十五年ニ至ラサル子ノ縁組ハ父母之ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ於テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母若シ其一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ニ於テ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

第百十六條 滿十五年ニ至リタル者ハ父母ノ許諾ヲ受ケ縁組ヲ承諾スルコトヲ得

父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

父母共ニ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ其家ノ祖父母ノ許諾ヲ受ケ可シ若シ祖父母ノ一方カ死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ他ノ一方ノ許諾ヲ以テ足ル

第百十七條 父母、祖父母悉ク死亡シ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ二十年未滿ノ者ニ限リ前二條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ後見人之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ

第十八條 私生子ノ養子縁組ニ付テハ母之ヲ承諾シ又ハ其許諾ヲ與フ父母ノ知レサル子ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用ス

第百十九條 前數條ノ場合ニ於テ繼父又ハ繼母アルトキハ第三十八條第三項ノ規定ヲ適用ス

第二百十條 育兒院ニ在リテ父母ノ知レサル子ノ縁組ハ二十年未滿ニ限
リ第百十五條及ヒ第百六十條ニ定メタル年齢ノ區別ニ從ヒテ院長之ヲ
承諾シ又ハ其承諾ヲ與フルコトヲ得

第二百十一條 婿養子縁組ニ付テハ婚姻ノ申出ヲ爲ス時ニ於テ當事者ハ
婿養子縁組ヲ爲スノ意思ヲ身分取扱吏ニ申出ツ可シ
此縁組ニ必要ナル條件ノ欠缺スルトキハ身分取扱吏ハ婚姻ノ儀式ヲ差
止ムルコトヲ得

此縁組ハ婚姻ノ儀式ヲ行フニ因リテ成ル

第二百十二條 遺言養子縁組ハ遺言書ヲ以テ之ヲ爲ス

此遺言ハ養子ヲ爲ス者ノ死亡ノ日ニ家督相續ヲ爲ス可キ卑屬親アルト
キハ其効ヲ失フ

第二百十三條 遺言養子ヲ爲ス者ノ死亡シタルトキハ第百十五條以下ノ
規定ニ從ヒテ縁組ノ受諾ヲ爲ス可シ

第二百十四條 縁組ノ儀式ヲ行ヒ又ハ縁組ノ受諾ヲ爲シタルトキハ當事
者ヨリ十日内ニ身分取扱吏ニ届出ツ可シ但此届出ハ代理人ヲ以テ之ヲ
爲スコトヲ得

第二百十五條 第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ之ヲ縁組ニ適用ス但本

章第一節ニ定メタル條件ニ違背セサルコトヲ要ス

第三節 養子縁組ノ證據

第二百十六條 縁組ハ縁組證書ヲ以テ之ヲ證ス但第二百九十一條ノ規定
ノ適用ヲ妨ケス

第五十四條ノ規定ハ縁組ニ之ヲ適用ス

第四節 養子縁組ノ不成立及ヒ無効

第二百十七條 縁組ハ人違、喪心又ハ強暴ニ因リテ承諾ノ全ク欠缺シタ
ルトキハ不成立トス

第二百十八條 縁組ハ本章第一節ニ定メタル條件ノ一ニ違背シタルトキ
ハ無効トス

此無効ハ第三百十條ノ場合ヲ除ク外當事者其他現實ノ利益ヲ有スル者
及ヒ檢事ヨリ何時ニテモ之ヲ請求スルコトヲ得

第二百十九條 縁組ハ左ノ場合ニ於テ無効トス

第一 縁組ノ申出ヲ爲サス又ハ身分取扱吏ノ差止ヲ受ケタルニ拘ハ
ラス儀式ヲ行ヒタルトキ

第二 證人二人ノ立會ナクシテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第三 第四十八條ノ規定ニ違ヒテ儀式ヲ行ヒタルトキ

第四 縁組ノ申出ヲ受ケタル償分取扱吏ノ管轄違ナルトキ
此無効ハ儀式後一箇年内ニ限り前條ニ掲ケタル者ヨリ之ヲ請求スルコ
トヲ得

第三百三十條 第百八條又ハ第百九條但書ノ規定ニ違ヒタル縁組ノ無効ハ
被後見人又ハ養家ノ戸主ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

被後見人カ成年ニ至リ又ハ戸主カ縁組ヲ知リタル後縁組ヲ認諾シ又ハ
三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第三百十一條 強暴ノ爲メ承諾ニ瑕疵アル縁組ノ無効ハ強暴ヲ受ケタル
者ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得但強暴ヲ免カレタル後縁組ヲ認諾シ又
ハ三ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第三百十二條 第百十六條乃至第百二十條ニ定メタル許諾ナクシテ爲シ
タル縁組ノ無効ハ許諾ヲ與フ可キ者又ハ許諾ヲ受ク可キ者ニ非サレハ
之ヲ請求スルコトヲ得ス

第六十條第二項、第六十一條及ヒ第六十二條ノ規定ハ此無効訴權ニ之
ヲ適用ス

第三百十三條 婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ縁組又ハ婚姻ノ無効言渡ヲ
原因トシテ婚姻又ハ縁組ノ無効ヲ請求スルコトヲ得但無効言渡ノ後三

ヶ月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第五節 縁組ノ効力

第三百二十四條 養子ハ縁組ノ日ヨリ養家ニ於テ嫡出子ノ權利及ヒ義務ヲ
有ス

第三百二十五條 養子ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ其
齎帶シ又ハ相続、贈與若クハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ
有ス但未成年中ノ財産管理ハ第九章ノ規定ニ從ヒテ養父母ニ屬ス

第六節 罰則

第三百二十六條 縁組申出ノ時ニ必要ノ書類ヲ差出タサシメサル身分取扱
吏ハ二圓以上二十圓以下ノ過料ニ處ス

縁組ノ不成立又ハ無効タル可キ法律上ノ原因アルコトヲ知リテ其儀式
ヲ行フヲ差止メサル身分取扱吏ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第八章 養子ノ離縁

第一節 協議ノ離縁

第三百二十七條 養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲リタル者ハ協議ヲ以テ離
縁ヲ爲スコトヲ得
然レトモ十五年未滿ニテ養子ト爲リタル者ノ離縁ハ滿十五年ニ至ラサ

ル間ニ限り養子ヲ爲シタル者ト縁組承諾ノ權ヲ有スル者トノ協議ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百二十八條 離縁ヲ爲サントスル養子ハ縁組承諾ノ爲メ定メタル規則ニ從ヒ其父母、祖父母又ハ後見人ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

第三百二十九條 當事者ハ離縁協議書ニ左ノ書類ヲ添ヘテ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第一 縁組證書

第二 離縁ノ爲メニ必要ナル承諾書又ハ承諾ヲ得ル能ハサル事由ヲ證スル書類

第二節 特定原因ノ離縁

第四百十條 離縁ハ左ノ原因アルニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第一 養子ヨリ養家ノ尊屬親ニ對シ又ハ養家ノ尊屬親ヨリ養子ニ對スル暴虐、脅迫、遺棄又ハ重大ノ侮辱

第二 重罪ニ因レル處刑

第三 竊盜又ハ詐欺取財ノ罪ニ因レル重禁錮一年以上ノ處刑

第四 浪費

第八十二條及ヒ第八十八條ノ規定ハ離縁ニ之ヲ適用ス

第四百十一條 離縁ヲ請求スル訴權ハ養子ヲ爲シタル者及ヒ養子ト爲リタル者ノミニ屬ス

養子ヲ爲シタル者又ハ養子ト爲リタル者カ死亡シタルトキハ離縁ノ訴權ハ消滅ス但訴訟中ニ死亡シタル場合ニ於テハ現實ノ利益ヲ有スル者其訴訟ヲ續行スルコトヲ得

第四百十二條 養子ヲ爲シタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ後見人又ハ後見監督人ハ親屬會ノ許可ヲ得テ離縁ヲ請求スルコトヲ得

養子ト爲リタル者カ禁治産中ニ在ルトキハ實家ノ父母、祖父母又ハ戶主ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第四百十三條 養子ノ滿十五年ニ至ラサル間ハ縁組承諾ノ權ヲ有スル者ヨリ離縁ヲ請求スルコトヲ得

第四百十四條 養子カ養父母ト同居スルトキハ裁判所ハ離縁ノ訴訟中養子ヲシテ住家ヲ去ラシムルコトヲ得

此場合ニ於テハ養子ハ衣服其他ノ日用物品ヲ持去リ且必要アルトキハ養料ヲ請求スルコトヲ得

裁判所ハ養子ノ請求ニ因リテ其財産ヲ保存スル爲メニ必要ナル處分ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條 離縁ハ養子ノ家督相續後之ヲ爲スコトヲ得ス

第三節 離縁ノ効力

第四百十六條 離縁ハ其届出又ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ効力ヲ生セス
第四百十七條 離縁ト爲リタル養子ハ自己ノ過失ノ有無ニ拘ハラス其所
有財産ニ限り之ヲ請求スルコトヲ得但養家ノ爲メニ消費シタルモノハ
此限ニ在ラス

第四百十八條 婿養子縁組ニ付テハ當事者ハ離縁ヲ原因トシテ離婚ヲ請
求シ又離婚ヲ原因トシテ離縁ヲ請求スルコトヲ得但離婚又ハ離縁ヨリ
三個月ヲ過キタルトキハ其訴權ヲ失フ

第九章 親權

第一節 子ノ身上ニ對スル權

第四百十九條 親權ハ父之ヲ行フ
父死亡シ又ハ親權ヲ行フ能ハサルトキハ母之ヲ行フ
父又ハ母其家ヲ去リタルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ス
第四百五十條 未成年ノ子ハ親權ヲ行フ父又ハ母ノ許可ヲ受クルニ非サレ
ハ父母ノ住家又ハ其指定シタル住家ヲ去ルコトヲ得ス
子カ許可ヲ受ケスシテ其住家ヲ去リタルトキハ父又ハ母ハ區裁判所ニ

申請シテ歸家セシムルコトヲ得

第四百五十一條 父又ハ母ハ子ヲ懲戒スル權ヲ有ス但過度ノ懲戒ヲ加フル
コトヲ得ス

第四百五十二條 子ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ父又ハ
母ハ區裁判所ニ申請シテ其子ヲ感化場又ハ懲戒場ニ入ルルコトヲ得
入場ノ日數ハ六個月ヲ超過セサル期間内ニ於テ之ヲ定ム可シ但父又ハ
母ハ裁判所ニ申請シテ更ニ其日數ヲ増減スルコトヲ得
右申請ニ付テハ總テ裁判上ノ書面及ヒ手續ヲ用ユルコトヲ得ス
裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キテ決定ヲ爲スコシ父、母及ヒ子ハ其決定ニ
對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二節 子ノ財産ノ管理

第四百五十三條 父ハ未成年ナル子ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ自己ノ
財産ニ於ケル如ク其財産ヲ管理ス
第四百五十四條 父ノ管理ニ於テハ第九十四條ニ記載シタル行爲ハ尙ホ
之ヲ管理行爲ト看做ス
第四百五十五條 父ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ相續
贈與又ハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

第一百五十六條 父ハ管理ノ止ミタルトキハ子ニ其財産ヲ引渡ス可シ但收
益ハ子ノ養育教育ノ費用及ヒ管理ノ費用ニ供シタルモノト看做ス
第一百五十七條 本節ノ規定ハ母カ子ノ財産ヲ管理スル場合ニ之ヲ適用ス
然レトモ母ハ管理ヲ辭スルコトヲ得

第三節 嫡母、繼父及ヒ繼母ニ特別ナル規則

第一百五十八條 嫡母、繼父又ハ繼母ノ親權ヲ行フ場合ニ於テハ相談人ヲ
付スルコトヲ得

此相談人ハ配偶者證書若クハ遺言書ヲ以テ之ヲ定メ又ハ親族會其議決
ヲ以テ之ヲ定ム

第一百五十九條 相談人ハ後見監督人ト同一ノ權限及ヒ義務ヲ有ス

第一百六十條 配偶者カ相談人ヲ定メサル場合ニ於テ親族會ヲ招集セサル
トキ又ハ配偶者若クハ親族會ノ定メタル相談人ニ相談セサルトキハ區
裁判所ハ檢事ノ請求ニ因リ嫡母、繼父又ハ繼母ニ對シテ親權行使ノ禁
止ヲ宣告スルコトヲ得

第十章 後見

總則

第一百六十一條 後見ハ未成年者ノ父又ハ母ニシテ生存スル者ノ死亡ニ因

リテ開始ス

父母共ニ生存シ又ハ其一方ノ生存スルモ親權ヲ行フ能ハサルトキ又ハ
母カ子ノ財産ノ管理ヲ辭スルトキモ亦同シ

第一百六十二條 一家ニ未成年者數人アルモ後見人ハ一人タル可シ

第一百六十三條 後見人ハ親族會ノ免除ヲ得サル限リハ後見ヲ承諾ス可シ
若シ後見人之ヲ承諾セス又ハ其任務ヲ怠ルトキハ利害關係人又ハ檢事
ノ請求ニ因リテ區裁判所ハ代務者ヲ命スルコトヲ得
後見人ハ代務者ノ管理ノ費用ヲ負擔シ且其管理ニ付キ責ニ任ス

第一節 後見人

第一百六十四條 親族ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ於テ親族、姻族又ハ他人
ノ中ヨリ後見人タル可キ者ヲ指定スル權ヲ有ス

第一百六十五條 後見人ノ指定ハ遺言書若クハ證書ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ區
裁判所ニ口述シテ之ヲ爲ス可シ此口述ニ付テハ調書ヲ作ルコトヲ要ス

第一百六十六條 父又ハ母カ後見人ヲ指定セザリシトキハ其家ノ祖父後見
人ト爲ル但未成年ノ家族ニ付テハ成年ノ戶主後見人ト爲ル

第一百六十七條 遺言後見人モ祖父若クハ戶主タル後見人モ有ラサルトキ
又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ除斥セラレ罷黜セラレ若クハ死亡シタ

ルトキハ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第六十八條 未成年者ヲ有スル人ノ死亡シタルトキ又ハ未成年者ヲ有スル父若クハ母ノ婚姻其他ノ事故ニ因リテ他家ニ入リタルトキハ區裁判所ハ未成年者ノ親族若クハ利害關係人ノ請求ニ因リ後見人ヲ選定スル爲メ親族會ヲ招集ス可シ

第二節 後見監督人

第六十九條 後見ニハ一人ノ後見監督人ヲ付スルコトヲ得

後見監督人ハ後見人ヲ定ムルト同一ノ手續ニ從ヒテ之ヲ指定シ又ハ親族會ニ於テ之ヲ選定ス

本章第四節及ヒ第五節ノ規定ハ後見監督人ニ之ヲ適用ス

第七十條 後見監督人ヲ置カサル場合ニ於テ監督ヲ要スルコト有ルトキハ親族會ニ於テ會員一人ヲ選定シ臨時ニ後見監督人ノ任務ヲ行ハシム

第三節 親族會

第七十一條 親族會ハ未成年者ノ最近親族三人以上ヲ以テ之ヲ設ク但親族三人ニ滿タサルトキハ未成年者ニ緣故アル者ヲ以テ之ヲ補足ス本家及ヒ分家ノ戸主ハ親族會ニ列スルコトヲ得

七十二條 親族會ハ親族、後見人、後見監督人、保佐人又ハ利害關係人ノ求メニ因リテ集會ス

七十三條 戸主成年ナルトキハ家族ノ爲メ親族會ヲ設クルコトヲ要セス

七十四條 養子ノ親族會ニハ實家ノ親族モ其會員タルコトヲ得

七十五條 會員ハ自己ノ利害ニ關係アル會議ニ列スルコトヲ得ス

七十六條 親族會ヲ設クル能ハサルトキハ區裁判所其事ヲ行フ

七十七條 未成年者ノ親族會ノ外親族會ヲ組成スル必要アルトキモ亦本節ノ規定ヲ適用ス

第四節 後見ノ免除

七十八條 左ニ掲クル者ハ當然後見人タルコトヲ免除セラル

第一 現役ニ服スル軍人、軍屬

第二 被後見人住居ノ市又ハ郡ノ外ニ於テ公務ニ從事スル人

七十九條 後見免除ノ求メハ親族會之ヲ決ス後見人解任ヲ求メタルトキモ亦同シ

第五節 後見人及ヒ親族會員ノ缺格、除斥及ヒ罷黜

第八十條 左ニ掲クル者ハ後見人タルコトヲ得ス又親族會員タルコト

ヲ得ス

第一 未成年者

第二 民事上禁治産者及ヒ准禁治産者

第三 未成年者ノ身分又ハ財産ニ對シテ訴訟ヲ爲ス人及ヒ其人ノ尊

屬親、卑屬親、配偶者

第百八十一條 左ニ掲クル者ハ後見及ヒ親族會ヨリ除斥セラル可シ現ニ

任務ニ從事スル者ハ之ヲ罷黜ス

第一 甚シキ不行跡ナル人

第二 後見管理ニ不能又ハ不正實ヲ顯ハセル後見人

第三 任務ヲ免黜セラレタル裁判上ノ保佐人

第四 公權剝奪、公權停止及ヒ刑事上禁治産ヲ受ケタル人

第五 復權ヲ得サル破産者及ヒ家資分散者

第百八十二條 後見人及ヒ親族會員ノ除斥又ハ罷黜ハ親族會ニ於テ之ヲ爲ス

第六節 後見人ノ管理

第百八十三條 後見人後見ノ開始ヲ知ルトキハ直チニ任務ニ就クコトヲ要ス

親族會ニ於テ後見人ヲ選定シ其後見人在席スルトキハ直チニ任務ニ就キ若シ在席セサルトキハ通知ヲ得タル日ヨリ任務ニ就クコトヲ要ス

第百八十四條 後見人ハ未成年者ヲ監護シ其教育ヲ擔任ス

尊屬後見人及ヒ戶主後見人ヲ除ク外後見人若シ未成年者ノ在來ノ住居

又ハ教育方法ヲ變更セントスルトキハ親族會ニ協議ス可シ

第百八十五條 後見人ハ父母ノ如ク未成年者ヲ懲戒スルコトヲ得

未成年者ノ行狀ニ付キ重大ナル不滿意ノ事由アルトキハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得タル上第百五十二條ノ規定ニ從ヒテ未成年者ニ對スル處分ヲ爲スコトヲ得

後見人カ其權ヲ濫用シ又ハ其義務ヲ怠ルトキハ未成年者及ヒ其親族ハ

親族會ニ之ヲ申告スルコトヲ得

第百八十六條 後見人ハ未成年者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ善良ナル

管理者ノ如ク其財産ヲ管理シ管理ノ失當又ハ過失ヨリ生スル損害賠償

償ノ責ニ任ス

第百八十七條 後見人ハ當然其任務ニ就ク可キ日ヨリ十日内ニ後見監督

人ノ立會ヲ得テ未成年者ノ財産ヲ調査ス可シ

財産目錄ノ調製ハ二个月内ニ之ヲ終了スルヲ要ス但親族會ハ狀況ニ

從ヒテ延期ヲ許スヲ得

第百八十八條 後見人カ未成年者ノ債務者又ハ債權者ナルトキハ目錄ノ調製前其旨ヲ公證人又ハ親族會ニ明言スルコトヲ要ス

後見人カ債權ノ存立ヲ知リテ之ヲ明言セザリントキハ其債權ヲ喪失ス又債務ノ存立ヲ知リテ之ヲ明言セザリントキハ區裁判所ハ其後見人ヲ罷黜スルコトヲ得但罷黜ノ場合ニ於テハ三十圓以下ノ過料ニ處スルコトヲ得

第百八十九條 目錄調製ヲ終了セサル間ハ後見人ハ要急關ク可カラサル管理行為ノミヲ爲スコトヲ得

第百九十條 後見人ハ任務執行ノ初ニ於テ親族會ニ協議シ未成年者ノ養育ノ需用、教育ノ程度ト其資産トニ從ヒ毎年費ス可キ金額及ヒ財産管理ニ係ル費用ヲ定ム

親族會ハ相當ノ給料ヲ與フル一人又ハ數人ノ管理者ヲ後見人ノ自己ノ責任ヲ以テ使用スルヲ許スコトヲ得

第百九十一條 後見人ハ未成年者ノ元本及ヒ收益ノ剩額ヲ每次ニ官ノ貯金預所又ハ確實ナル銀行ニ預ク可シ其預ケザリシ金額ニ付テハ法律上ノ利息ヲ辨濟ス可シ

後見人カ未成年者ノ財産ノ利用方法ヲ變更セントスルトキハ親族會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第百九十二條 尊屬後見人及ヒ戶主後見人ヲ除ク外後見人ハ一年内ノ管理ノ狀況ヲ親族會ニ報告ス可シ

第百九十三條 後見人ハ未成年者ノ財産ニ付テハ管理ノ權ヲ有スルニ止マリ此權外ノ行為ハ法律ニ定メタル條件ニ依ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第百九十四條 左ニ掲クル行為ニ關シテハ後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第一 元本ヲ利用シ又ハ借財ヲ爲スコト

第二 不動産及ヒ重要ナル動産ヲ讓渡シ之ニ物權ヲ設定シ又ハ之ヲ

取得スルコト

第三 動産、不動産ニ係ル訴訟又ハ和解、仲裁ニ關スルコト

第四 相續、遺贈若クハ贈與ヲ受諾シ又ハ拋棄スルコト

第五 新築、改築、増築又ハ大修繕ヲ爲スコト

第六 財産編第百十九條ニ定メタル期間ヲ超ユル貸貸ヲ爲スコト

第百九十五條 後見人ハ未成年者ノ財産ヲ讓受クルコトヲ得ス又未成年

者ニ對スル權利ヲ讓受クルコトヲ得ス

第百九十六條 後見人ハ親族會ノ許可ヲ得ルニ非サレハ未成年者ノ不動產ヲ賃借スルコトヲ得ス

第百九十七條 後見人ノ其權内ニ於テ爲シタル行爲ハ未成年者ヲ羈束ス

第七節 後見監督人ノ任務

第百九十八條 後見監督人ハ後見人ノ管理ヲ監視スルコトニ任ス

後見監督人ハ後見人ヲ缺クトキト雖モ後見ノ任務ヲ行フコトヲ得ス此場合ニ於テハ直チニ後任ノ後見人ヲ定ムル手續ヲ爲スコトヲ要ス

第百九十九條 未成年者ト後見人トノ間ニ利益相反スルトキハ後見監督人ハ未成年者ヲ代表ス

第二百條 必要ナル場合ニ於テハ後見監督人ハ保存行爲ヲ爲スコトヲ得
第二百一條 法律上後見監督人ノ立會フ可キ行爲ニシテ其立會ナクシテ爲シタルモノハ無効トス

第八節 後見ノ終了

第二百二條 後見ノ任務ハ後見人ノ一身ニ止マリ其相續人ニ移轉セス然レトモ相續人カ成年者ナルトキハ後任ノ後見人ノ任務ニ就クマテ管理ヲ繼續ス可シ

第二百三條 未成年者カ成年ニ達シ又ハ自治産ニ至ルニ因リテ後見ノ止

ムトキハ後見人ハ其計算ヲ終了スルマテ管理ヲ繼續ス

第二百四條 假ニ管理ヲ爲ス者ハ必要ナル行爲ノミヲ爲スコトヲ得

第九節 後見ノ計算

第二百五條 後見人ハ管理ノ終了スルトキハ其計算ヲ爲スコトヲ得

第二百六條 後見ノ決算ハ後見監督人ノ立會ニテ未成年者ノ成年ニ達シタル者又ハ其自治産ニ至リタル者ニ對シテ之ヲ爲ス

後見カ後見人ノ身上ニ係リテ終了スルトキハ決算ハ後任ノ後見人ニ對シテ之ヲ爲シ親族會ノ許可ニ付ス但第百八條ノ場合ニ於テハ決算ハ後見監督人ニ對シテ之ヲ爲ス

後見カ未成年者ノ死亡ニ因リ終了スルトキハ決算ハ其相續人ニ對シテ之ヲ爲ス

後見ノ決算ニ係ル費用ハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百七條 後見ノ決算ハ管理終了ノ日ヨリ三個月内ニ之ヲ爲スコトヲ得
親族會ハ當事者ノ求メニ因リテ延期ヲ許スコトヲ得

第二百八條 後見人ト未成年者ト成年ニ達シタル者トノ合意ニシテ後見ノ決算前ニ爲シタルモノハ總テ無効トス

第二百九條 後見ノ費用ハ豫算ノ定額ヲ超ユルト雖モ後見人其有益タルコトヲ證スルトキハ未成年者ノ負擔ニ屬ス

第二百十條 後見人ヨリ未成年者ニ返濟ス可キ金額ハ決算完結ノ日ヨリ當然利息ヲ生ス

未成年者ヨリ後見人ニ返濟ス可キ金額ハ決算完結ノ後後見人ノ催告ニ因リテ利息ヲ生ス

第二百十一條 後見ノ計算ニ係ル未成年者ノ訴權ハ五今年ノ時効ニ因リテ消滅ス後見人其他假ニ後見管理ヲ爲シタル人ノ未成年者ニ對スル訴權モ亦同シ

未成年者ト後見監督人又ハ親族會員トノ間ノ後見ニ係ル訴權ニ付テモ亦前項ノ規定ヲ適用ス

此期間ハ未成年者ノ成年ニ達シ又ハ死亡シタル日ヨリ起算シ第二百八條ノ場合ニ於テ後見ノ計算ニ係ル訴權ニ付テハ合意無効ノ裁判言渡ノ日ヨリ起算ス

第二百十二條 後見監督人及ヒ假ニ後見管理ヲ爲シタル人ハ代理契約ノ原則ニ從ヒテ過失ノ責ニ任ス

第十一章 自治産

第二百十三條 未成年者ハ婚姻ヲ爲スニ因リ當然自治産ノ權ヲ得

第二百十四條 親權ヲ行フ父又ハ母ハ滿十五年ニ達シタル未成年ノ子ニ自治産ヲ許スコトヲ得

此自治産ハ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第二百十五條 後見ニ服スル未成年者ノ滿十七年ニ達シタルトキハ親族會ハ其未成年者ニ自治産ヲ許スコトヲ得

此自治産ハ後見人ヨリ身分取扱吏ニ届出ツ可シ

第二百十六條 自治産ノ未成年者ハ之ヲ保佐ニ付ス

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ當然保佐人ト爲ル

親權ヲ行フ父又ハ母ハ其生前ニ第六十五條ノ規定ニ從ヒ保佐人ヲ指定スルコトヲ得若シ之ヲ指定セザリシトキハ其家ノ祖父保佐人ト爲リ家族ニ付テハ成年ノ戶主保佐人ト爲ル

夫ハ當然未成年ノ婦ノ保佐人ト爲ル

此他ノ場合ニ於テハ親族會ニ於テ保佐人ヲ選定ス

第二百十七條 後見人ニ關シテ定メタル免除、缺格、除斥及ヒ罷黜ノ規則ハ之ヲ保佐人ニ適用ス

第二百十八條 自治産ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ元本ヲ

○第二類○民法○人事編

領收スルコトヲ得ス

第二百十九條 第九十四條ニ掲ケタル行爲ニ付テハ自治産ノ未成年者ハ保佐人ノ立會アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百二十條 父母ヲ除ク外保佐人ハ後見人ト同シク過失ノ責ニ任ス

第二百二十一條 自治産ヲ許サレタル未成年者カ不行跡又ハ財産管理ノ失當ニ因リテ自治産者タルニ適セサルトキハ親族者ハ其自治産ヲ廢止スルコトヲ得

親權ヲ行ヒタル父又ハ母ハ自治産ヲ廢止スルコトヲ得若シ此等ノ者アラサルトキハ親族會員又ハ保佐人ハ此廢止ヲ親族會ニ求ムルヲ得
未成年者ハ自治産廢止ノ日ヨリ親權又ハ後見ニ服シ成年ニ達スルマテ復々自治産者ト爲ルコトヲ得ス

第十二章 禁治産

第一節 民事上禁治産

第二百二十二條 心神喪失ノ常況ニ在ル者ハ時時本心ニ復スルコト有ルモ其治産ヲ禁スルコトヲ得

第二百二十三條 禁治産ハ配偶者、四親等内ノ親族、戸主及ヒ檢事ヨリ之ヲ區裁判所ニ請求スルコトヲ得

禁治産ヲ請求スル權利ヲ有スル一人ノ申立ニ因リテ言渡シタル裁判ハ

總テノ人ニ對シテ既判力ヲ有ス

第二百二十四條 禁治産者ハ之ヲ後見ニ付ス

配偶者ハ當然相互ニ後見人ト爲ル若シ配偶者アラサルトキハ其家ノ父後見人ト爲リ父アラサルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ヘキ母後見人ト爲ル

父又ハ母ハ第六十五條ニ定メタル方式ニ從ヒテ後見人ヲ指定スルコトヲ得若シ指定セザリシトキハ第六十六條ノ規定ヲ適用ス

法律上ノ後見人モ遺言後見人モ有ラス又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ除斥セラレ若クハ罷黜セラレタルトキハ第十章ニ定メタル方式ニ從ヒ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第二百二十五條 配偶者、尊屬親、卑屬親及ヒ戸主ヲ除ク外何人タリトモ十ヶ年以上禁治産者ノ後見ヲ擔任スルコトヲ要セス

第二百二十六條 未成年者ノ後見ニ係ル規定ハ禁治産者ノ後見ニ之ヲ適用ス

第二百二十七條 疾病ノ性質ト資産ノ狀況トニ從ヒテ禁治産者ヲ自宅ニ療養セシメ又ハ之ヲ病院ニ入ラシムルハ親族會ノ決議ニ依ル但瘋癲病

院ニ入ラシメ又ハ自宅ニ監置スル手續ハ特別法ヲ以テ之ヲ定ム
第二百二十八條 法律上ノ後見人ハ第九十二條ニ定メタル管理狀況ノ
報告ヲ爲スコトヲ要セス

第二百二十九條 禁治産者ノ財産ヲ以テ其子孫ノ教育、婚姻又ハ營業ノ
資ニ供セントスルトキハ親族會ノ許可ヲ得ルコトヲ要ス

第二百三十條 禁治産者ハ禁治産ノ裁判言渡ノ日ヨリ無能力者トス
裁判言渡後ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

禁治産ノ裁判言渡前ニ爲シタル禁治産者ノ行爲ニ對シテモ其行爲ノ當
時ニ於テ喪心ノ明確ナルトキハ銷除訴權ヲ行フコトヲ得

第二百三十一條 禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人、配偶者、親族、姻族、
戸主、後見人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

禁治産者ハ解禁ノ裁判言渡後ニ非サレハ其權利ヲ回復スルコトヲ得ス
第二節 准禁治産

第二百三十二條 心神耗弱者、聾啞者、盲者及ヒ淚費者ハ准禁治産者ト爲
シテ之ヲ保佐ニ付スルコトヲ得

准禁治産ノ言渡ハ配偶者、三親等内ノ親族及ヒ戸主ノ請求ニ因リ區裁
判所之ヲ爲ス

保佐人ニ付テハ第二百二十四條及ヒ第二百五條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十三條 第二百二十七條乃至第二百二十條ノ規定ハ之ヲ准禁治産
ニ適用ス

裁判所ハ狀況ニ從ヒテ保佐人ノ立會アルニ非サレハ管理行爲ヲモ爲ス
コトヲ得サル旨ヲ言渡スコトヲ得

第二百三十四條 准禁治産者カ保佐人ノ立會ナクシテ爲シタル行爲ニ付
テハ第二百三十條ノ規定ヲ適用ス

第二百三十五條 准禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人、配偶者、親族、姻
族、戸主、保佐人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

第三節 刑事上禁治産

第二百三十六條 刑事上禁治産ヲ受ケタル者ハ其財産ヲ管理スルコトヲ
得ス又遺言ヲ以テスル外ハ其財産ヲ處分スルコトヲ得ス

第二百三十七條 刑事上禁治産者ニハ後見人ヲ付シテ其財産ヲ管理セシ
ム此後見人ノ指定及ヒ管理ノ方法ニ付テハ民事上禁治産者ノ後見ニ係
ル規定ヲ適用ス

第二百二十九條ノ場合ニ於テハ禁治産者ノ同意ヲ得ルヲ以テ足ル

第四節 瘋癲者ノ財産ノ假管理

第二百二十八條 禁治產ヲ受ケサル瘋癲者アルトキハ配偶者、親族、戸主及ヒ檢事ハ區裁判所ノ許可ヲ得テ特別法ニ定ムル手續ニ從ヒ之ヲ瘋癲病院ニ入レ又ハ自宅ニ監置スルコトヲ得

此場合ニ於テハ裁判所ハ直チニ假管理人ヲ指定ス

第二百二十九條 瘋癲病院ニ入り又ハ自宅ニ監置セラレタル者ハ入院中又ハ監置中其財産ヲ管理シ及ヒ處分スルコトヲ得ス

第二百四十條 假管理人ハ瘋癲者ノ總テノ行爲ニ付テ之ヲ代表シ禁治產者ノ後見人ト同視セラル但必要ナル行爲ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百四十一條 瘋癲者ノ入院中又ハ監置中ニ行爲ヲ爲シタル證據アルトキハ其行爲ヲ銷除スルコトヲ得但相手方カ瘋癲者ノ本心ニテ行爲ヲ爲シタルコトヲ證スルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十二條 瘋癲者ノ無能力ハ區裁判所カ假管理ヲ解クニ因リテ止ム

第十三章 戸主及ヒ家族

第二百四十三條 戸主トハ一家ノ長ヲ謂ヒ家族トハ戸主ノ配偶者及ヒ其家ニ在ル親族、姻族ヲ謂フ

戸主及ヒ家族ハ其家ノ氏ヲ稱ス

第二百四十四條 戸主ハ家族ニ對シテ養育及ヒ普通教育ノ費用ヲ負擔ス但家族カ自ラ其費用ヲ辨スルコトヲ得ルトキ又ハ戸主ノ許諾ヲ受ケスシテ他所ニ在ルトキハ此限ニ在ラス

第二百四十五條 家族ハ特別ニ職業ヲ營ムニ因リテ取得シタル利益及ヒ其齋帶シ又ハ遺産相續、贈與若クハ遺贈ニ因リテ取得シタル財産ノ所有權ヲ有ス

然レトモ家族カ其家ノ爲メ消費シタル財産ニ付テハ戸主ニ對シテ償還ヲ求ムルコトヲ得ス

第二百四十六條 家族ハ婚姻又ハ養子縁組ヲ爲サントスルトキハ年齢ニ拘ハラス戸主ノ許諾ヲ受ク可シ

第二百四十七條 他家ニ入りテ夫、婦又ハ養子ト爲リタル者ハ婚姻ノ無効、養子縁組ノ無効、離婚又ハ離縁ノ場合ニ於テハ實家ニ復歸ス

然レトモ此者カ婚姻又ハ養子縁組ニ付キ實家戸主ノ許諾ヲ受ケサリシトキハ戸主ハ復歸ノ事由ヲ知リタル日ヨリ一个月内ニ身分取扱更ニ申立テ復歸ヲ拒ムコトヲ得

第二百四十八條 他家ニ入りテ夫又ハ婦ト爲リタル者ハ其配偶者ノ死亡

シタルトキト雖モ婚家ヨリ更ニ他ノ家ニ入ルコトヲ得ス
然レトモ婚家及ヒ實家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ復歸スルコトヲ得
第二百四十九條 實家ニ復歸ス可キ者又ハ復歸セントスル者カ復歸スル
能ハサルトキハ一家ヲ新立ス

第二百五十條 推定家督相續人ニ非サル家族タル男子カ戸主ノ許諾ヲ受
ケスシテ婚姻ヲ爲シタルトキハ一家ヲ新立ス

第二百五十一條 家督相續ニ因リテ戸主ト爲リタル者ハ其家ヲ廢スルコ
トヲ得ス但分家ヨリ本家ヲ承繼シ其他正當ノ事由アルトキハ區裁判所
ノ許可ヲ得テ廢家スルコトヲ得

第二百五十二條 戸主カ國民分限ヲ喪失シタルトキハ廢家シタルモノト
シ推定家督相續人ハ一家ヲ新立シ前戸主ノ家族ハ新戸主ノ家ニ入ル
第二百五十三條 戸主カ婚姻其他ノ原因ニ由リテ適法ニ廢家シ他家ニ入
リタルトキハ其家族モ亦從テ其家ニ入ル

第二百五十四條 身屬親ヲ有スル者カ婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離
婚若クハ離縁ニ因リテ婚家又ハ縁家ヲ去ルトキハ身屬親ハ仍ホ其家ニ
屬ス

第二百五十五條 父母ノ知レサル子ハ一家ヲ新立ス

第二百五十六條 他家ニ入リテ夫、婦又ハ養子ト爲リタル者ハ配偶者又

ハ養子ヲ爲シタル者ト協議ノ上両家ノ戸主ノ許諾ヲ受ケテ實家ニ在ル
身屬親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

婚姻若クハ養子縁組ノ無効又ハ離婚若クハ離縁ニ因リテ婚家又ハ縁家
ヲ去リタル者ハ配偶者又ハ養子ヲ爲セシ者ト協議ノ上両家ノ戸主ノ許
諾ヲ受ケテ其家ニ在ル身屬親ヲ自家ニ引取ルコトヲ得

第二百五十七條 戸主カ家族ニ對シテ婚姻其他ノ事件ニ付キ許諾ヲ與フ
可キ場合ニ於テ未成年ナルトキ又ハ其意思ヲ表スル能ハサルトキハ戸
主ニ對シテ親權ヲ行フ者又ハ後見人之ヲ代表ス

第二百五十八條 入夫婚姻ノ場合ニ於テハ婚姻中入夫ハ戸主ヲ代表シテ
其權ヲ行フ

第二百五十九條 戸主失踪ノ宣言アリタル後其家督相續ノ占有ヲ得タル
者ハ其占有中戸主ノ權ヲ行フ

第二百六十條 單身戸主失踪ノ宣言アリテ其亡失若クハ最後音信ノ日ヨ
リ三十年ニ至ルモ家督相續ノ占有者ナキトキハ絶家ス

第二百六十一條 戸主死亡シテ家督相續人ナキトキハ絶家シ其家族ハ一
家ヲ新立ス

第十四章 住所

第二百六十二條 民法上ノ住所ハ本籍地ニ在ルモノトス

第二百六十三條 戶主ハ本籍ヲ移ス地ノ身分取扱吏ニ申述シテ住所ヲ變更スルコトヲ得

未成年者又ハ民事上禁治産者タル戶主ノ住所ハ親族會ノ許可ヲ得テ後見人之ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十四條 家族カ獨立シテ一家ヲ成ストキノ本籍ヲ定ムル地ノ身分取扱吏ニ其意思ヲ申述シテ住所ヲ設定スルコトヲ得

一家新立ノ未成年者ニ付テハ後見人住所ヲ設定ス可シ

第二百六十五條 外國人始メテ日本ニ住所ヲ定ムルトキハ其意思並ニ本國、氏名及ヒ出生年月日ヲモ申述ス可シ

第二百六十六條 本籍地カ生計ノ主要タル地ト異ナルトキハ主要地ヲ以テ住所ト爲ス

第二百六十七條 左ノ場合ニ於テハ居所ヲ以テ住所ニ代用ス

第一 住所ノ知レサルトキ
第二 日本ニ住所ヲ定メサル外國人ニ關スルトキ
第二百六十八條 何人ト雖モ或ル行爲又ハ事務ノ爲メニ假住所ヲ選定ス

ルコトヲ得但此選定ハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

第十五章 失踪

第一節 失踪ノ推定

第二百六十九條 住所及ヒ居所ヨリ亡失シ又ハ音信絶エテ生死分明ナラサル人ハ之ヲ失踪者ト推定ス

此推定ノ裁判ハ本人ノ住所ノ區裁判所之ヲ爲ス

第二百七十條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理代理人ヲ定置キタルトキハ其代理人ハ失踪ノ推定中本人ノ財産ヲ管理ス但必要アルトキハ裁判所ハ現實ノ利益ヲ有スル關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ

代理ノ解任ヲ言渡シ又ハ其後任ヲ指定スルコトヲ得

第二百七十一條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ總理代理人ヲ定置カサリシトキハ裁判所ハ前條ニ掲ケタル者ノ請求ニ因リテ代理人ヲ指定ス

此代理人ニハ成ル可シ推定相續人ヲ指定スルコトヲ要ス

第二百七十二條 代理人又ハ管理人ハ管理行爲ヲ爲ス權限ノミヲ有ス他ノ行爲ニ付テハ必要ノ場合ニ限り裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スコトヲ得

付テ本人ヲ代表ス

第二百七十三條 管理人ハ失踪者ノ動産及ヒ證書ノ目錄ヲ調製ス可シ又
不動産ノ形狀ヲ確定セシムル爲メ鑑定人ノ選定ヲ裁判所ニ請求スルコ
トヲ得鑑定人ノ報告書ハ裁判所ノ認可ニ付スルコトヲ要ス此等ノ手續
ノ費用ハ本人ノ財産ヲ以テ之ヲ支辨ス
關係人、推定相續人又ハ檢事ノ請求アルトキハ本條ノ規定ヲ代理人ニ
適用スルコトヲ得

第二百七十四條 代理人又ハ管理人ハ推定相續人ヲ除ク外其請求ニ因リ
テ裁判所ノ定メタル給テ受ク裁判所ハ管理及ヒ財産返還ノ擔保トシテ
保證人其他相當ノ擔保ヲ立テシムルコトヲ得

第二百七十五條 代理人又ハ管理人ハ失踪者ノ子孫ノ教育、婚姻又ハ營
業ノ爲メ資財ヲ與フルニ付テハ區裁判所ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第二節 失踪ノ宣言

第二百七十六條 失踪者カ代理人ヲ定置カサリシトキハ五個年又代理人
ヲ定置キタルトキハ任期ノ長短ヲ問ハス七個年ニ至ルモ其生死ノ音信
ヲ得サルニ於テハ失踪者ノ死亡ニ因リテ發生スル權利ヲ其財産上ニ有
スル者ハ失踪者ノ住所ノ區裁判所ニ失踪ノ宣言ヲ請求スルコトヲ得

第二百七十七條 右請求ノ許ス可キモノナルトキハ裁判所ハ失踪者ノ住
所及ヒ其最後ノ居所ノ地ニ於テ證人訊問ヲ爲ス可キコトヲ命ス可シ此
證人訊問ニ付テハ民事訴訟法ニ定メタル忌避ノ規則ヲ適用セス

第二百七十八條 證人訊問ヲ命スル決定ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官
報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

第二百七十九條 失踪宣言ノ裁判ハ證人訊問ヲ命シタル決定ヨリ一個年
ノ後ニ非サレハ之ヲ宣告スルコトヲ得ス

此裁判ハ前條ノ手續ニ從ヒテ之ヲ公示ス可シ

第三節 失踪宣言ノ効力

第二百八十條 失踪宣言ノ裁判アリタルキハ失踪者ノ遺言書ハ關係人、
推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ之ヲ開封ス可シ

失踪者ノ亡失又ハ最後音信ノ日ニ於ケル推定相續人其他失踪者ノ死亡
ニ因リテ發生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ直チニ其財産ヲ占有ス
ルコトヲ得

第二百八十一條 失踪者ニ屬スル財産ノ占有ニ付テハ總テ相續ニ關スル
規定ヲ適用ス
此占有ヲ得タル者ハ第三者ニ對シテハ財産ノ所有者トス

然レトモ占有者ハ推定相續人ヲ除ク外財産返還ノ擔保トシテ裁判所カ相當ト認ムル保證人其他ノ擔保ヲ立ツ可シ其保證人ノ義務又ハ擔保ハ十五年ノ後止ム

第二百八十二條 失踪者ノ現出シ又ハ音信アリタルトキハ失踪宣言ノ効力ハ即時ニ止ム

失踪者ハ其財産ヲ現狀ノ儘ニテ取回シ又占有者ノ處分ニ因リテ不當ニ利得シタルモノヲ取戻スコトヲ得

第二百八十三條 果實ニ付テハ失踪者カ其亡失又ハ最後音信ノ日ヨリ十今年内ニ現出スルトキハ其五分ノ一ヲ取戻スコトヲ得十年後ハ其全部ヲ失フ

第二百八十四條 失踪者ノ相續順位ニ在ル者ハ他ノ者カ財産占有ヲ得タル日ヨリ三十年間其財産ノ返還ヲ要求スルコトヲ得

此場合ニ於テモ果實ハ前條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ取戻スコトヲ得

第四節 失踪ノ推定及ヒ宣言ニ關スル通則

第二百八十五條 失踪シテ生存ノ確實ナラサル人ニ歸ス可キ權利ヲ請求スル者ハ其人カ權利ノ發生セシ日ニ生存シタルヲ證スルコトヲ要ス此舉證ヲ爲ササル間ハ其請求ヲ受理セス

第二百八十六條 失踪シテ生存ノ確實ナラサル人ニ歸ス可キ相續ハ次順位ノ者ニ屬ス

失踪者ニ歸ス可キ財産ヲ相續スル者ハ財産目錄ヲ調製ス可シ

第二百八十七條 前二條ノ規定ハ失踪者又ハ其相續人及ヒ承繼人ニ關スル相續ノ請求其他ノ權利ヲ行フヲ妨クルコト無シ此等ノ權利ハ普通ノ時効ニ因ルニ非サレハ消滅セス

第五節 不在者ニ關スル規則

第二百八十八條 生存ノ確實ナル人カ住所若クハ居所ヲ去リテ其財産ヲ管理スル者アラサルトキ又ハ裁判所カ未タ失踪ヲ推定セサルモ本人ノ不在ノ爲メ其財産ノ放置セララルトキ又ハ失踪ノ推定中若クハ宣言後ニ失踪者ノ生存ノ確實ト爲リタルトキハ區裁判所ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リテ必要ノ保存處分ヲ命スルコトヲ得

第十六章 身分ニ關スル證書

第二百八十九條 出生婚姻、養子縁組、死亡其他各人ノ身分ニ關スル事件ハ身分取扱吏ノ主管スル帳簿ニ之ヲ記載ス可シ

第二百九十條 帳簿ニ記載シタル證書ハ公正證書ノ證據力ヲ有ス但違法ノ記載ハ効力ナシ

合式ノ謄本ハ證書ト同一ノ効力ヲ有ス

第二百九十一條 帳簿ノ設備ナク若クハ中絶シタルトキ又ハ其全部若クハ一分ノ毀損シ亡滅シタルトキ又ハ其記載上甚シキ違式、錯誤若クハ脱漏アリテ信用ヲ置ク可カラサルトキ又ハ身分取扱吏ノ詐欺若クハ過失ニ因リテ證書ヲ作ラサリシトキハ證人又ハ私ノ書類ヲ以テ先ツ其事實ヲ證シ且身分上ノ事件ヲ證スルコトヲ得

第二百九十二條 證書ヲ訂正ハ裁判ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第二百九十三條 帳簿ノ調製、證書ノ記載、届出ノ手續其他ノ事項ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

○第三款 非訟事件手續法

▲明治廿三年十月法律第九十五號

朕非訟事件手續法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第九十五號

非訟事件手續法

第一章 認可及ヒ許可ノ申請手續

第一條 民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認可又ハ許可ヲ求ムル申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申請ニ付テハ裁判所ハ事情ニ從ヒ利害關係人ノ出頭又ハ當事者ノ自身出頭ヲ命シ公開セサル法廷ニ於テ審訊スルコトヲ得

第三條 申請ニ付テノ決定ニ對シテハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二章 失踪事件ニ關スル請求手續

第四條 失踪ノ推定、宣言又ハ財産占有其他ノ請求ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

請求ニハ其理由トスル事實ヲ表示シ且證據書類アルトキハ之ヲ添付ス可シ

第五條 前條各種ノ請求ハ之ヲ併合スルコトヲ得

第六條 失踪ノ推定又ハ宣言ノ請求ニ付テハ前二條ノ外尙ホ左ノ手續ニ從フ

裁判所ハ請求ニ表示シタル事實ヲ調査シ職權ヲ以テ失踪ノ推定又ハ宣

○第二類○民法○非訟事件手續法

言ヲ爲スヘキヤ否ヤヲ定ムル爲メ證人訊問ヲ命ス可シ
證人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ忌避ノ規則ヲ除ク外民事訴訟法第二編第一章第六節ノ規定ヲ適用ス

第七條 檢事ハ證人訊問ニ立會ヒ決定前ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第八條 失踪ノ推定又ハ宣言ヲ言渡ス決定ハ裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

此決定ニ對シテハ請求者又ハ檢事ヨリ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得失踪者ノ定置キタル總理代理人モ亦同シ

第九條 失踪事件ノ請求ニ關スル費用ハ其推定又ハ宣言ヲ言渡シタルトキハ本人ノ財産ヲ以テ之ヲ支辨シ若シ之ヲ言渡ササルトキハ請求者之ヲ負擔ス但檢事請求ヲ爲シタルトキハ本人ノ負擔トス

第三章 相続ノ限定受諾ニ關スル手續

第十條 限定受諾者ハ適法ノ期間内ニ相続財産拂盡ノ計算ヲ完了シ其計算書ヲ相續地ノ區裁判所ニ差出ス可シ

第十一條 利害關係人ハ自己ノ費用ヲ以テ區裁判所ニ計算書ノ閱覽及ヒ其謄本ノ下付ヲ求ムルコトヲ得

第十二條 法律上又ハ裁判上相続財産ヲ管理スル者ハ限定受諾者ト同シ

ク計算完了ノ責ニ任ス

第四章 國ニ屬スル相続財産領收ノ手續

第十三條 相續人アラサル財産アルトキハ相續地ノ地方行政官廳ハ財産所在地ノ區裁判所ニ其引渡ヲ請求ス可シ

第十四條 財産引渡ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ事實ヲ調査シ其請求ヲ公示ス可シ

第十五條 公示ハ左ノ諸件ヲ具備シ請求ヲ受ケタル區裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲ス可シ

第一 被相續人ノ氏名、職業、住所、居所及ヒ死亡ノ年月日

第二 財産引渡ノ請求ノ要領

第十六條 民法ノ規定ニ從ヒ相續權ヲ有スル者ハ公示ノ日ヨリ六個月内ニ行政官廳ノ請求ニ對シ其請求ヲ受ケタル裁判所ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十七條 前條ノ期間内ニ異議ノ申立アラス又ハ其申立ヲ不當ト爲ス裁判確定シタルトキハ裁判所ハ民法財産取得編第三百四十六條ノ規定ニ從ヒテ保存スル供託所ノ金額領收證ヲ請求者タル行政官廳ニ交付ス可シ

○第二類○民法○非訟事件手續法

第五章 財産ノ封印及ヒ目錄調製ノ手續

第十八條 財産ノ封印ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ其財産所在地ノ區裁判所判事之ヲ爲ス
封印ニハ官印ヲ用ユ可シ

第十九條 封印ヲ爲ス可キ財産カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ區裁判所判事ハ市町村長ニ囑託シテ封印ヲ爲サシムルコトヲ得封印ノ除去及ヒ財産目錄ノ調製ニ付テモ亦同シ

囑託ヲ受ケタル市町村長ニ付テモ下數條ノ規定ヲ準用ス

第二十條 封印ハ證人二人立會ノ上之ヲ爲ス可シ

封印ヲ請求シタル者ハ其封印ニ立會フコトヲ得

第二十一條 封印ヲ爲シタルトキハ直チニ調書ヲ作り立會人之ニ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ區裁判所判事其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

- 第一 封印ヲ請求シタル者ノ氏名、職業及ヒ住所
- 第二 封印ノ理由
- 第三 封印ヲ爲シタル場所及ヒ物

第二十三條 日用品其他封印ヲ附セサル物アルトキハ之ヲ調書ニ略記ス可シ

第二十四條 封印ヲ附シタル物ニ鎖鑰アルトキハ之ヲ閉鎖シテ封印除去ニ至ルマテ區裁判所書記課其鑰ヲ預ル可シ

第二十五條 封印ヲ終リタルトキハ其財産ノ保管人ヲ命ス可シ但保管人ハ成年者タルコトヲ要ス

第二十六條 區裁判所判事封印ノ請求ヲ受ケタルトキハ速ニ之ヲ爲ス可シ若シ後レタルトキハ其理由ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス

第二十七條 封印ノ調書ハ判事ト同伴シタル書記之ヲ二通ニ作り其一通ハ區裁判所ノ書記課ニ保存シ他ノ一通ハ封印請求者又ハ保管人ニ交付シ受領證ヲ取置ク可シ

第二十八條 何人ニ限ラス區裁判所判事ヨリ封印ノ立會ヲ求メラレタル者正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムトキハ刑法第百七十九條ニ掲ケタル刑ニ處ス

第二十九條 封印ノ除去ヲ請求スル權利ヲ有スル者左ノ如シ

- 第一 封印ヲ請求スル權利ヲ有スル者
- 第二 財産ノ管理人

○第二類○民法○非訟事件手續法

第三十條 封印ノ除去ハ豫メ其日時ヲ定メ既ニ知レタル利害關係人及ヒ
財産ノ管理人ニ之ヲ通知スヘシ

通知ヲ受ケテ封印除去ノ異議ヲ申立テス且除去ニ立會ハサル者ハ其除
去ヲ承諾シタルモノト看做ス

第三十一條 封印ハ一箇ノ物ニ付キ之ヲ除去シ其目錄ヲ作り了リタル後
ニ非サレハ次ノ物ニ付キ之ヲ除去スルコトヲ得ス

第三十二條 封印ノ除去ハ封印ヲ爲ス時ト同シシ證人立會ノ上之ヲ爲ス
可シ

第三十三條 左ニ記載シタル者ハ封印ノ除去ニ付キ異議ヲ申立ルコトヲ
得

第一 利害關係人

第二 財産ノ管理人

第三 檢事

第三十四條 封印ヲ除去シタルトキハ第二十一條ノ規定ニ從ヒ直チニ其
調書ヲ作ルヘシ

第三十五條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印除去ノ異議アリテサリシコト又異議アリタルトキハ其異議申

立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタルコト

第二 封印ヲ爲シタルヨリ之ヲ除去スルニ至ルマテ其封印ニ何等ノ變
更ヲ來ササリシコト若シ變更ヲ來セシトキハ其事情

第三十六條 封印ヲ爲シ及ヒ之ヲ除去スル費用ハ其財産ノ負擔トス

第三十七條 封印除去ノ異議ハ其封印ヲ爲シタル區裁判所ニ之ヲ申立ツ
可シ

異議申立ニハ申立人ノ關係及ヒ申立ノ理由ヲ包含ス可シ

第二十八條 異議ヲ申立テタルトキハ其申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下
ケタル後ニ非サレハ封印ノ除去ヲ爲スコトヲ得ス

第二十九條 封印除去ノ異議ハ其除去ヲ著手シタル後ハ之ヲ爲スコトヲ
得ス

第四十條 異議申立ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第四十一條 財産目錄ハ財産ニ封印アルトキハ其除去ノ際公證人ヲシテ
之ヲ作ラシム可シ

第四十二條 財産目錄ハ左ノ各人ヲ適法ニ呼出シ區裁判所判事ノ面前ニ
於テ之ヲ作ル可シ

第一 知レタル利害關係人

○第二類○民法○非訟事件手續法

第二 財産ノ管理人

第三 検事

第四十三條 目錄ニハ左ノ諸件ヲ具備スヘシ

第一 適法ニ呼出サレタル人

第二 出席シタル者及闕席シタル者

第三 各不動産ノ形狀

第四 動産ノ種類及ヒ數量

第五 證書類

第四十四條 財産目錄ニハ立會ヒタル各人署名捺印ス可シ

第四十五條 目錄ノ調製ニ關スル費用ハ其財産ノ負擔トス

○第二章 戸籍

○第一款 戸籍登記書式

▲明治廿四年六月内務省訓令第十一號 北海道廳 府縣

明治十九年(十月)内務省訓令第二十號戸籍登記書式中登記目錄書式第十四管內送入籍ノ部第五項名ノ上「婦」ヲ「養女」ト改メ事項中廢家ノ上ノ下ニ「夫妻共」ノ三字ヲ挿入ス又同第七項中平民氏名ノ下「養孫」ヲ「養子携帶」ト改ム

ト改ム

○第二款 婚姻其他ニ關スル訴訟規則

▲明治廿三年十月法律第四百四號

朕民事訴訟法ノ補則トシテ婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第四百四號

婚姻事件養子縁組事件及ヒ禁治産事件ニ關スル訴訟規則(全文ハ民事訴訟法ニ掲出ス)

○第三章 財産

○第一款 財産委棄法

▲明治廿三年十月法律第九十四號

朕財産委棄法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

○第二類 ○民法

○戸籍登記書式○婚姻其他ニ關スル訴訟規則○財産委棄法

御名 御璽

法律第九十四號

財產委乘法

第一條 無資力ナル債務者ニシテ惡意ノ證ナキ者ハ動産又ハ不動産ノ差押ヲ受ケタルモ競賣ニ至ルマテハ無資力ノ原因タル不幸ノ事情又ハ管理ノ過失ヲ陳述シテ債權者ニ對シ自己ノ財産ノ委乘ヲ其住所地ノ裁判所ニ請求スルコトヲ得

債務者ハ總債權者ノ氏名及ヒ分限ト各債權者ノ債權ノ元本及ヒ利息トヲ右請求ニ附記スルコトヲ要ス

第二條 財産ノ委乘ハ協諧契約ニ關シ商法ニ規定シタル方式及ヒ條件ニ從ヒテ債權者ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

第三條 債權者ノ承諾シタル財産ノ委乘ハ裁判所ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

此他財産ノ委乘ニ付テハ家資分散ニ關スル法律ノ適用ヲ妨ケス

第二款 辨濟提供規則

▲明治廿三年十月勅令第二百十七號

朕辨濟提供規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本規則ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

勅令第二百十七號

辨濟提供規則

第一條 民法財産編第四百七十四條ニ依レル辨濟ノ提供ハ執達吏ヲシテ之ヲ爲サシム可シ

第二條 提供ヲ爲スノ委任ヲ受ケタル執達吏ハ調書ヲ作り其調書ニハ提供物金錢ナルトキハ其種類員數ヲ記シ特定物ナルトキハ他物ニ換ユルコト能ハサラシムル爲メ其詳細ヲ記シ定量物ナルトキハ其種類品質數量ヲ記ス可シ

第三條 右ノ調書ニ付テハ民事訴訟法第五百四十條ノ規定ヲ準用ス

第四條 執達吏提供ノ委任ヲ受ケテ之ヲ爲シタルトキハ手数料金二十錢其他執達吏手数料規則ニ從ヒ立替金ヲ受クルモノトス

第三款 增價競賣法

▲明治廿三年十月法律第九十二號

○第一類○民法○辨濟提供規則○增價競賣法

朕增價競賣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキニト命ス

御名 御璽

法律第九十二號

增價競賣法

第一條 民法債權擔保編第二百六十五條ニ從ヒテ抵當財産ノ增價競賣ヲ要求スル債權者ハ第三所持者及ヒ前所有者ニ競賣ノ要求書ヲ送達シタルヨリ三日内ニ抵當財産所在地ノ區裁判所ニ競賣ノ申立ヲ爲シ且保證人又ハ擔保ノ認許ヲ求ム可シ

前項ノ手續ヲ爲ササルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス

第二條 競賣ノ申立ニハ民事訴訟法第六百四十二條第一號及ヒ第二號ニ掲ケル諸件ノ外第三所持者及ヒ前所有者ノ表示、擔保ノ表示、第三所有者ノ提供シタル金額及ヒ要求者ノ定メタル増額ヲ具備シ且民事訴訟法第六百四十三條第三號乃至第五號ノ證書ヲ添附スルコトヲ要ス

第三條 裁判所ハ期日ヲ定メテ要求者、第三所持者及ヒ前所有者ヲ呼出シ擔保ノ許否ニ付テノ決定ヲ爲ス可シ
否認ノ決定アリタルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス但競賣ノ要

求ヲ爲ス權利アル他ノ債權者カ要求ニ參加スルノ申立ヲ爲シ又ハ期間ニ自ラ要求ヲ爲シタルトキハ右決定ヲ知リタルヨリ三日内ニ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スコトヲ妨ケス

第四條 左ニ掲ケル者ヲ增價競賣手續ニ於テノ利害關係人トス

第一 競賣要求者

第二 債務者

第三 第三所持者

第四 抵當債權者

第五 抵當財産ノ前所有者カ債務者ニ非サルトキハ其前所有者

第五條 裁判所ハ要求者ノ供シタル擔保十分ナリトスルトキハ競賣手續ノ開始決定ヲ爲シ同時ニ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ公告ス可シ

第六條 競賣期日ノ公告ニハ民事訴訟法第六百五十八條第一號乃至第三號、第五號、第七號乃至第十號ニ掲ケル諸件ノ外增價競賣ノ要求ニ因リ競賣ヲ爲ス旨及ヒ最低競賣價額トシテ提供價額ニ附シタル増額ヲ具備スルコトヲ要ス

此他競賣及ヒ競落ノ手續ニ付テハ民事訴訟法第六百五十九條乃至第六百六十一條、第六百六十三條乃至第六百六十九條、第六百七十一條、第

○第二類○民法○增價競賣法

六百七十二條第二號及ヒ第四號乃至第八號、第六百七十三條、第六百七十四條、第六百七十六條乃至第六百八十七條ノ規定ヲ準用ス

第七條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキハ裁判所ハ要求者ヲ競落人ナリト言渡ス可シ

第八條 競落人ナリト言渡サレタル者カ要求者ナルト否トヲ問ハス競落代價ノ全額支拂ニ至ルマテハ要求者ノ供シタル擔保ハ負擔ヲ免カルルコト無シ

第九條 裁判所ハ要求者ノ申立アルトキハ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ民事訴訟法第七百二條但書及ヒ第七百三條乃至第七百五條ノ規定ヲ適用ス

第十條 增價競賣ニ依ル競落ニ對シテハ更ニ增價競賣ノ要求ヲ爲スコトヲ許サス

現行 日本法律規則大全第八編 上卷 畢

現行 日本法律規則大全第八編 下卷

高木周次編纂

○第三類 商法

○第一章 商法

○第一款 商法施行延期

▲明治廿三年十二月法律第百八號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法及商法施行條例施行期限法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第百八號

明治二十三年四月法律第三十二號商法及同年八月法律第五十九號商法施行條例ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

▲明治廿三年十月法律第百三號

朕沖繩縣ニ商法施行延期ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第百三號

○第三類 ○商法 ○商法施行延期

明治二十三年法律第三十二號商法ハ沖繩縣ニ於テハ當分ノ内之ヲ施行セ
ス

▲明治廿三年十二月法律第百九號
朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル商法ニ關スル法律施行期限法律ヲ裁可シ茲ニ
之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第百九號

左ニ掲クル法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行ス

- 一 明治二十三年八月法律第六十六號商事非訟事件印紙法
- 一 同年八月法律第七十二號銀行條例
- 一 同年八月法律第七十三號貯蓄銀行條例
- 一 同年十月法律第百一號

○第二款 商法施行條例

▲明治廿三年八月法律第五十九號

朕商法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月
一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第五十九號

商法施行條例

第一條 商法第二十六條、第二十九條及ヒ第二百十條ニ定メタル一地域
トハ各市町村ノ一區域ヲ謂ヒ市町村制ヲ行ハサル地方ニ在テハ從來ノ
宿驛町村等ノ一區域ヲ謂フ

一 地域内ニ二箇以上ノ區裁判所アルトキハ其内一箇所ヲ以テ登記簿ヲ
取扱フ所トス其裁判所ハ司法大臣之ヲ指定ス

第二條 會社ニ非スシテ商業ヲ營ム者ハ其商號ニ會社ノ文字ヲ用ユルコ
トヲ得ス又從來之ヲ用ユル者ハ商法實施ノ日ヨリ三个月内ニ之ヲ改ム
可シ

前項ノ規定ニ違フ者ハ地方裁判所ノ命令ヲ以テ二十圓以下ノ過料ニ處
ス

第三條 商法第百五十九條、第百六十六條、第百六十八條、第二百二十二
條ノ規定ニ依リテ官廳ニ差出ス書類及ヒ展閱ニ供スル書類ハ公證人ノ
認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テスルコトヲ得

公證人謄本認證ノ依頼ヲ受ケタルトキハ一件ニ付キ金十錢ノ手数料若

○第三編 商法 商法施行條例

シ認證ト共ニ謄寫ノ依頼ヲ受ケタルトキハ公證人規則第六十五條ノ謄
本手數料ヲ受クルコトヲ得

第四條 商法第二百二十二條ニ依リ諸書類ノ展閱ヲ求ムル者アルトキハ
其請求者ヨリ一人ニ付一日五十錢以下ノ手數料ヲ受クルコトヲ得

第五條 本條例發布前ヨリ既ニ設立シタル各會社ハ商法實施ノ日ヨリ六
个月内ニ商法第七十八條、第三百二十八條、第六十八條ニ準シテ登記ヲ
受ク可シ之ヲ怠リタルトキハ商法第二百五十六條ノ過料ニ處シ且地方
裁判所ノ命令ヲ以テ其營業ヲ差止ム但其命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲
スコトヲ得

第六條 前條ノ期限内ニ登記ヲ受ケサル既設會社ハ其期限經過ノ時ヨリ
第三者ニ對シテ會社タル効ヲ失フ

第七條 商法第八十一條及ヒ第八十二條ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セ
ス

第八條 既設會社ハ從來ノ商號ヲ續用スルコトヲ得但商法第百十三條及
ヒ第百二十九條第二項ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ三個月ノ後既設會社
ノ商號ニモ之ヲ適用ス

既設會社ノ商號ニハ其會社ノ種類ニ從ヒ合名會社合資會社又ハ株式會

社ノ文字ヲ附ス可シ

第九條 既設合名會社ハ其社員ノ數商法第七十四條ノ定員ニ超ユルモ其
現社員ノ數ニ依ルコトヲ得但定員以下ニ減シタル場合ニ於テハ更ニ増
員シテ其定員ニ超ユルコトヲ得ス

第十條 既設株式會社ハ商法第百五十六條ノ免許ヲ受クルヲ要セス

既設株式會社ハ商法實施ノ日ヨリ六個月内ニ地方長官ヲ經由シテ定款
ヲ主務省ニ差出シ其定款ノ認可ヲ受ク可シ但其定款ニ法律命令ニ反ス
ル事ヲ掲ケタルモノハ之ヲ改正スルニ非サレハ認可スルノ限ニ在ラス
從來官許ヲ得テ設立シタル株式會社ニハ前項ノ規定ヲ適用セス但聞置
又ハ人民ノ相對ニ任ス等ノ指令ヲ得テ設立シタルモノハ此限ニ在ラス
本條第二項ニ依リ認可ヲ受ク可キ株式會社ニ在テハ第五條ノ登記期限
ハ其認可ヲ得タル日ヨリ起算ス

右ノ認可ヲ得タル日ヨリ六個月内ニ登記ヲ受ケサルトキハ其認可ハ効
力ヲ失フ

第十一條 既設株式會社ハ其株券ノ金額商法第百七十五條ノ規定ニ反ス
ルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

第十二條 既設株式會社ハ其定款ニ於テ第一回ノ株金拂込ヲ四分一以下

ニ定メタルトキハ商法第六十七條第二項ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

第十三條 既設株式會社ノ創業ニ付テノ義務及ヒ出費ニシテ會社ノ承認ヲ經タルモノハ第五條ノ登記ヲ受ケサル前ニ於テモ商法第七十一條ノ規定ニ拘ハラス會社ニ於テ之ヲ負擔ス

第十四條 既設株式會社ノ既ニ發行シタル株券ハ商法第七十六條ニ反スルモノ有ルモ之ヲ改ムルコトヲ要セス

第十五條 既設株式會社ニ於テ株金全額ノ拂込前ニ發行シタル株式ハ其全額拂込ニ至ルマテハ之ヲ假株券ト看做ス

第十六條 既設株式會社ノ株券ニシテ商法實施前ヨリ株式取引所又ハ取引所ニ於テ既ニ賣買シ來リタルモノ及ヒ既ニ債權ノ擔保ニ供シタルモノニ付テハ商法第八十條ノ規定ヲ適用セス

第十七條 既設株式會社ノ株式ノ讓渡人ニ付テハ商法第八十二條ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ二個年間之ヲ適用セス

第十八條 既設株式會社ニ於テ既ニ其定款ヲ以テ株主ノ議決權ニ制限ヲ立テタルモノハ商法第二百四條ノ規定ニ反スルモ其定款ニ從フコトヲ得

第十九條 商法第七十七條第一項ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セス

第二十條 商法及ヒ本條例ニ依リ發スル命令書ヲ送達スル場合ニ於テハ其手續ハ民事訴訟法ノ手續ニ從フ

第二十一條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第二百二十七條、第三百十一條、第二百二十二條、第二百五十條及ヒ第二百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ裁判所ニ於テ命令ヲ發スルトキハ當事者ヲシテ説明ヲ爲サシムル爲メ之ヲ裁判所ニ呼出スヲ通例トス但當事者缺席スルモ命令書ハ之ヲ發スルコトヲ得

第二十二條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第二百二十七條及ヒ第二百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ命令ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所ハ豫メ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ

檢事ハ口頭又ハ書面ヲ以テ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第二十三條 檢事ハ前條第一項ノ場合ニ於ケル命令ニ付キ其執行ノ責任ス

第二十四條 商法及ヒ本條例ニ依リ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ其期間ハ裁判書ノ送達ヲ受ケタル日ノ翌日又ハ裁判ノ言渡ヲ受ケタル日ノ翌日ヨリ起算シテ七日トス

第二十五條 前條ニ掲ケタルモノノ外抗告ニ關スル手續ニ付テハ民事訴訟法第四百五十五條、第四百六十條第一項第二項、第四百六十五條及ヒ第四百六十六條第一項第二項第四項ヲ除ク外總テ同法第三編第三章ノ規定ヲ準用ス

第二十六條 外國ニ於テ支拂ヲ爲ス可キ手形ニハ捺印スルコトヲ要セス

第二十七條 商法第七百九十條ニ掲ケタル裁判所役員ハ執達更トス

第二十八條 商法第八百二十五條ニ掲ケタル十五噸以上ノ船舶中ニハ日本形船舶百五十石以上ノモノヲ包含ス

第二十九條 商法實施前ヨリ既ニ航海ノ用ニ供スル船舶ハ商法實施ノ日ヨリ一箇年内ニ商法第八百二十五條ノ手續ヲ爲ス可シ

第三十條 商法第四百九十三條及ヒ第五百十七條ニ國內水上ト稱スルハ川湖港灣ヲ謂フ

第三十一條 遞信大臣ハ其地ノ形狀ト危險ノ程度トニ應シテ適宜ニ港灣ノ區域ヲ定ムルコトヲ得

第三十二條 商法第八百六十七條及ヒ第九百六十六條ニ沿岸航海ト稱スルハ專ラ本邦海岸ニ沿フテ航行シ外國ニ至ラサルモノヲ謂フ但本邦ノ版圖ニ屬スル諸島地トノ航行ハ亦沿岸航海ニ屬ス

第三十三條 商法第九百三十六條ニ掲ケタル沿岸小航海ノ區域ハ從來ノ慣習ト海上危險ノ程度トヲ酌量シテ遞信大臣之ヲ定ムルコトヲ得

第三十四條 商法第八百三十六條及ヒ第九百三十四條ニ官ト稱スルハ内國ニ於テハ區裁判所外國ニ於テハ日本領事若シ領事ナキトキハ其地ノ官廳トス

第三十五條 司法大臣ハ各地方裁判所ノ意見ヲ聽キ其所轄地方ノ需用ニ應シテ破産管財人ヲ命シ地方裁判所ハ之ニ依リ破産管財人名簿ヲ作ル可シ

第三十六條 破産管財人タルノ命ヲ受ケタル者ハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十七條 破産管財人ノ任期ハ三箇年トス但再任セラルルコトヲ得

第三十八條 名簿中ノ破産管財人破産裁判所ヨリ選定セラレタルトキハ正當ノ理由アルニ非サレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十九條 破産管財人ハ其職務ニ著手スル前公平誠實ニ其職務ヲ執ルコトヲ誓フ可シ

第四十條 破産管財人ハ其擔任スル破産手續中任期滿ツルモ之ヲ終結スルマテ解任スルコトヲ得ス

○第三編○商法○商法施行條例

第四十一條 破産裁判所ハ忌避其他該事件ニ不適當ナルノ理由アリテ名簿中ノ破産管財人ヲ選定ス可カラスト認ムルトキハ他ニ破産管財人ヲ選定スルコト得此場合ニ於テハ直チニ其旨ヲ司法大臣ニ上申ス可シ

前項ノ破産管財人モ名簿中ノ破産管財人ト同一ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十二條 職務執行ノ不當又ハ不正ノ爲メ管財人ノ職ヲ解クトキハ破産裁判所ノ公廷ニ於テ其理由ヲ付シテ之ヲ言渡ス可シ

第四十三條 管財人ノ報酬ハ一破産手續ノ全體ニ付キ又ハ收入シタル價額ノ割合ニ應シテ之ヲ定メ財團ノ配當アル毎ニ其分割ヲ以テ之ヲ支拂フ可シ

第四十四條 第三十六條及ヒ第三十八條ノ規定ニ違フ者ハ刑法第七十九條ノ罰金ニ處ス

第四十五條 商法第十二條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ勾留若クハ監守セントスルトキハ其命令書ヲ檢事ニ送致シ檢事ハ其勾留ニ係ル者ハ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ監守ニ係ル者ハ債務者ノ住所ヲ管轄スル警察官署ニ命シ其處分ヲ爲サシム

第四十六條 警察官廳ニ於テ債權者ノ申立ニ因リ債務者ヲ勾留若クハ監守セントスルトキハ命令書ヲ發シテ之ヲ所屬留置場ニ送致セシメ又ハ

監守ノ處分ヲ爲サシム此場合ニ於テハ警察官廳ハ同時ニ事由ヲ具シテ其旨ヲ管轄地方裁判所ニ通知ス可シ

第四十七條 司獄官更債務者ヲ受取リタルトキハ刑事被告人ヲ受取リタル手續ニ準シ之ヲ留置場ニ入ル可シ其他債務者ノ取扱ハ總テ刑事被告人ニ異ナルコト無シ

勾留中債務者ノ食料其他ノ費用ハ商法第三十二條ニ從ヒ破産財團ノ現額ヨリ之ヲ支拂ヒ不足アルトキハ留置場之ヲ負擔ス前條ノ場合ニ於テ債務者破産ニ至ラサルトキハ其申立人之ヲ支辨ス但申立人ハ申立ノ際右ノ費用ニ當ル金額ヲ豫納ス可シ

第四十八條 監守ヲ爲ストキハ警察官吏ヲシテ債務者ノ住所ニ就キ其逃走若クハ財産ノ隠匿ヲ豫防シ且其債務者ノ外人ト面接若クハ通信スルヲ禁セシム

第四十九條 商法第十二條第二項ニ依リ債務者ヲ引致スルトキハ特ニ作リタル引致狀ヲ以テ之ヲ執行ス但其執行ハ刑事訴訟法ニ定メタル勾引狀執行ノ手續ニ準ス

第五十條 商法第十四條ニ依リ裁判所ニ於テ債務者ヲ釋放スルトキハ決定書ヲ檢事ニ送致シ其執行ヲ爲サシム

○第二編○商法○商法施行條例

第五十一條 商法中非訟事件ニ關スル裁判所管轄ハ裁判所構成法ニ定ムルモノノ外第二百五十四條、第三百七十一條、第四百四十一條、第四百九十九條、第五百十四條、第八百五十六條、第九百二條ノ事件ニ付テハ區裁判所トシ其他ノ事件ニ付テハ地方裁判所トス

第五十二條 明治十七年第九號布告質屋取締條例ニ依リ管轄廳ノ免許ヲ得タル質屋營業人ニハ商法第一編第七章第九節ノ規定ヲ適用セズ

第五十三條 明治六年第二百十五條布告代人規則ハ商事ニ付テハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セズ

明治十年第六十六號布告利息制限法第三條及ヒ第五條ハ商事ニ付テハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ適用セズ

明治十五年第五十七號布告爲替手形約束手形條例ハ商法實施ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

○第三款 債券發行ノ件

▲明治廿三年八月法律第六十號
 朕商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第六十號

第一條 商法第二百六條ニ依リ株式會社債券ヲ發行スルハ總株金半額以上ノ拂込アリタル後ニ於テスヘシ

第二條 債券ノ發行額ハ株金ノ拂込金額ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條 債券ヲ發行セントスルトキハ地方長官ヲ經由シテ主務省ノ認許ヲ受クヘシ

第四條 債券ハ一通毎ニ其債務金額、利子ノ歩合及仕拂時期、發行ノ年月日、番號、商號、社印、取締役ノ氏名、印、債權者ノ氏名ノ外左ノ事項ヲ記載スルコトヲ要ス

- 一 會社ノ營業所
- 二 株金總額及株金拂込額
- 三 債券償還ノ初期及最終期
- 四 會社開業ノ年月日
- 五 存立時期ヲ定メタル會社ハ其時期
- 六 認許ヲ受ケタル事

第五條 株式會社ハ債券ヲ發行スルトキハ債券原簿ヲ備ヘ債券一通毎ニ

○第二編○商法○債券發行ノ件

區分シテ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 債權者ノ氏名住所
- 二 債券ノ金額番號
- 三 利子ノ歩合
- 四 債券發行ノ年月日及讓渡ノ年月日
- 五 債券償還ノ初期及最終期
- 第六條 債券ノ讓渡ハ取得者ノ氏名ヲ債券及債券原簿ニ記載スルニアラサレハ會社ニ對シテ其効ナシ
- 第七條 株式會社ハ營業時間中債券原簿ノ展閱ヲ請求スル者アルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス此場合ニ於テハ請求人ニ對シテ二十錢以内ノ手数料ヲ求ムルコトヲ得
- 第八條 取締役ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラレ
- 一 債券ニ記載スヘキ事項ヲ記載セス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ
- 二 債券原簿ヲ備ヘス又ハ之ニ不正ノ記載ヲ爲シタルトキ

○第四款 商事非訟事件印紙法

▲明治廿三年八月法律第六十六號

朕商事非訟事件印紙法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第六十六號

商事非訟事件印紙法

- 第一條 商法中登記ニ關ル場合ヲ除ク外非訟事件ニ付裁判所ノ命令其他ノ處分ヲ求ムル者ハ以下數條ノ手續ニ從ヒ其差出ス書類ニ民事訴訟用印紙ヲ貼用ス可シ但口述ヲ以テスル場合ニ於テハ其調書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
- 第五條第六條第七條ノ場合ニ於テハ管財人ヨリ差出ス計算書ニ印紙ヲ貼用ス可シ
- 第二條 左ニ掲クルモノニ付テハ五十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ
 - 一 抗告又ハ假差押ノ申立
 - 二 債權者ヨリ爲ス破産宣告ノ申立
 - 三 支拂猶豫ノ申立

○第三編○商法○商事非訟事件印紙法

第三條 左ニ掲クルモノニ付テハ二十錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

- 一 抗告ニ對スル答辯
- 二 裁判所ノ命令其他ノ處分ノ申立ニシテ本法ニ於テ特ニ規定セサル非訟事件ニ係ルモノ

第四條 破産手續ニ付テハ破産財團中ノ貸方金額ニ應シ左ノ區別ニ從ヒ印紙ヲ貼用ス可シ但財團管理費用其他破産手續上ノ費用及ヒ財團ノ爲メニ負擔シタル債務並ニ別除ノ辨濟ニ供スル金額ハ貸方金額ヨリ之ヲ扣除ス可キモノトス

財團ノ價額五圓マテ	四十錢
同 十圓マテ	六十錢
同 二十圓マテ	一圓二十錢
同 五十圓マテ	三圓
同 七十五圓マテ	四圓四十錢
同 百圓マテ	六圓
同 二百五十圓マテ	十三圓
同 五百圓マテ	二十圓
同 七百五十圓マテ	二十六圓

同 千圓マテ 三十圓

同 二千五百圓マテ 四十圓

同 五千圓マテ 五十圓

同 五千圓以上ハ千圓ニ達スル毎ニ四圓ヲ加フ

第五條 破産手續ニ付テハ財團ノ配當アル毎ニ其配當金額ノ割合ヲ以テ印紙價額ニ相當スル金額ヲ引去リ置キ終局計算ニ至リ配當金總高ノ割合ニ從ヒ相當印紙ヲ貼用ス可シ

第六條 協諧契約ニ依リ手續ヲ止メタルトキハ第四條ニ掲ケタル印紙ノ半額ヲ貼用ス可シ

第七條 破産手續再施ノ場合ニ於テハ破産手續開始ニ於ケル場合ト同一ノ印紙ヲ貼用ス可シ

第八條 本法ニ定ムル印紙代價ノ負擔ニ付テハ民事訴訟法第一編第二章第五節ノ規定ヲ準用ス

民事訴訟用印紙法ハ本法ノ規定ニ牴觸セサルモノニ限り之ヲ準用ス

○第五款 商業及船舶登記

▲明治廿三年九月勅令第二百七號

○第三編○商法○商業及船舶登記

朕商業及船舶ノ登記ニ關スル追加ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第二百七號

本年七月勅令第三百三十三號ニ左ノ一條ヲ追加ス

第三條 手数料ハ登記印紙ヲ以テ納ムヘシ

○第六款 商業及船舶登記公告取扱規則

▲明治廿三年十月司法省令第八號

商法ノ規定ニ依リ商業及船舶ノ登記公告ニ關スル取扱規則左ノ通之ヲ定ム

(書式雛形ハ別ニ頒ツ) (雛形略ス)

第一條 商法第十八條ノ商業登記ニ付テハ各登記所ニ左ノ簿冊ヲ備フ可シ

第一 商號登記簿

第二 後見人登記簿

第三 未成年者登記簿

第四 婚姻契約登記簿

第五 代務登記簿

第六 合名會社登記簿

第七 合資會社登記簿

第八 株式會社登記簿

第二條 商法第八百二十五第八百五十二條及ヒ第八百五十七條第二項ノ登記ハ商法及ヒ登記法ノ規定ニ依リ船舶登記簿ニ之ヲ爲ス船舶登記簿ノ雛形ハ登記法ニ關スル省令ニ於テ之ヲ定ム

第三條 商業登記簿ハ附錄第二號乃至第九號ノ雛形ニ依リ地方裁判所ニ於テ之ヲ調製スヘシ

明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則第三條第四條ハ本令ニ之ヲ適用ス

第四條 登記所ニ於テハ會社印鑑帳及ヒ登記見出帳ヲ調製シ印鑑帳ニハ商法第七十一條ニ依リ差出シタル印鑑ヲ貼付シ登記官吏之ニ契印シ見出帳ニハ商號ニ依リ登記ヲ區別シ以テ索引ノ便ニ供ス可シ

第五條 登記ノ届出ハ陳述書ヲ以テ之ヲ爲シ其陳述書ニハ登記ノ事項ヲ證スル爲メ必要ナル書類ヲ添ヘ左ノ諸件ヲ記載シ當事者之ニ署名捺印ス可シ

○第三類○商法○商業及船舶登記公告取扱規則

第一 登記ヲ受ク可キ事項
 第二 當事者ノ住所職業氏名
 第三 年月日
 第四 登記所ノ名
 登記法第八條第二項及ヒ明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則
 第七條第二項ハ本令ニモ之ヲ準用ス
 第六條 登記ノ届出ハ登記官吏ニ於テ陳述書ヲ受理シタル時ヲ以テ之ヲ
 終リタルモノトス
 登記法第八條第一項ノ受取證ヲ下付シタルトキハ陳述書ヲ受理シタル
 モノトス
 第七條 登記官吏ニ於テ登記ノ届出ヲ不適當ト認ムルトキハ當事者ヲシ
 テ改正セシム可シ之ヲ改正シ得ヘカラサル場合又ハ改正セサル場合ニ
 於テ登記ヲ拒ムトキハ理由ヲ付シタル命令書ヲ發ス可シ
 第八條 登記ヲ受クル爲メ差出シタル書類ニシテ登記所ニ留置ク可キモ
 ノ殊ニ登記陳述書及ヒ商法第六十八條ニ掲ケタルモノハ之ニ登記簿
 ノ冊號及ヒ其丁數ヲ記シ登記簿ノ區別ニ從ヒ各箇ニ綴込ミ之ヲ保存ス
 可シ

第九條 登記ハ雛形ニ示ス所ノ例ニ依リ相當欄内ニ之ヲ爲シ年月日ヲ記
 シ登記官吏之ニ署名捺印ス可シ
 凡テ豫備欄内ニハ商法第七十九條第百二十八條及ヒ第百六十九條ニ列
 舉シタル以外ノ事項ヲ登記スルモノトス
 會社ノ支店登記ノ豫備欄内ニハ合名會社ニ在テハ本店ノ業體、商號、營
 業所ヲ登記シ合資會社及ヒ株式會社ニ在テハ右ノ外會社資本ノ總額ヲ
 登記ス可シ
 第十條 公告ハ登記ヲ爲シタル登記所ノ名ヲ以テ之ヲ爲ス可シ
 公告ヲ爲ス可キ新聞紙ハ登記所所在地ニ於テ發行スルモノ若シ其地ニ
 於テ發行スルモノナキトキハ登記所ヲ管轄スル區裁判所所在地ニ於テ
 發行スルモノタル可シ
 若シ其地ニ於テ發行スル新聞紙ナキトキハ左ノ場所ニ揭示シテ公告ニ
 代ユ可シ
 第一 區裁判所ノ揭示場
 第二 其地ニ於ケル人民群集ノ場所
 登記所ハ新聞紙發行人ト一曆年ノ間商業登記ノ公告ヲ委託スル約定ヲ
 爲シ豫メ其旨ヲ公告シ置ク可シ

○第三類○商法○商業及船舶登記公告取扱規則

第十一條 明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則第三十一條第三十二條ハ本令ニ之ヲ適用ス

登記ノ變更ニ依リ削除ス可キ原登記ハ其側ニ朱線ヲ畫ス可シ
第十二條 商法第八百二十七條ノ船舶登記證書及ヒ同第八百五十四條ノ登記證書ハ附錄第十號及ヒ第十一號ノ雛形ニ依リ之ヲ調製ス可シ

第十三條 登記簿ハ何人ト雖モ之ヲ閱覽スルコトヲ得ルモノトス其閱覽ハ吏員ノ面前ニ於テ之ヲ爲サシム可シ
登記簿ノ謄本ヲ請フ者アルトキハ謄本ノ末尾ニ原登記ト相違スルコトナキ旨ヲ認證シ年月日ヲ記シ登記官吏之ニ署名捺印シテ交付ス可シ

遠隔ノ地ヨリ謄本ヲ請フ者アルトキハ謄本手数料ノ外郵送料ヲ前納スルニ於テハ亦之ヲ送付ス可シ
第十四條 商業登記ニ關スル登記所ハ東京市ニ在テハ京橋區區裁判所トス

第十五條 明治二十三年勅令第三百三十三號ニ定メタル商業及船舶ノ登記公告手数料ハ登記印紙ヲ陳述書若シ陳述書アラサルトキハ明治二十三年司法省令第七號登記法取扱規則第六條ニ依リ名刺ニ貼付スヘシ

○第二章 特許

○第一款 特許條例施行細則

▲明治廿三年八月農商務省令第十號

明治二十二年(一月)農商務省令第一號特許條例施行細則中左ノ通り加除改正ス

第十條第一項中「審査部」ヲ「審査官」ト改メ第二項中「部」ニ於テ「ノ」四字ヲ削除シ「其審査」ヲ「之」ニ改ム

第十二條ヲ「審査官ニ於テ明細書圖面等ニ關シ訂正又ハ照會ヲ要スルトキハ特許局長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ訂正書訂正圖面又ハ回答書ヲ差出サシムヘシ此期限内ニ差出ササルトキハ出願ヲ無効トス」ト改ム

第二十五條第二項中「ノ」一方又ハ「ノ」五字ヲ削除ス

第二十七條第一項中「特許局長ハ之ヲ審判部ニ配付シ」ノ十四字ヲ削除ス

第四十一條第一項中「爲ス」ヲ「爲シ」ト改メ其下ニ「改訂特許證ハ第十號書式ニ依リ調製シ許可ノ日ヲ以テ其日附ト爲ス」ノ三十字ヲ加ヘ第二項中「又ハ第二十六條」ノ七字ヲ削除ス

○第三類 ○商法 ○特許條例施行細則

第四十三條第一項中「第十號及第十一號ヲ第十一號及第十二號」ト改ム
書式第九號中「改訂特許證」ノ五字ヲ削除シ同書式ノ次ニ左ノ書式ヲ加
ヘテ第十號トナス

第十號 改訂特許
證書式

第何號

改訂特許證

本籍(及現住所)

氏 名

何々(發明ノ名稱)

特許條例ニ據リ前記發明ノ請求區域ニ對シ(何某ニ)明治何
年何月何日何年間特許ヲ與ヘタル明細書(圖面)ノ改訂ヲ許
可スルヲ以テ本證ヲ下付スルモノ也

年 月 日

農商務大臣 氏

名印

特許局長 氏

名印

書式第十號「ヲ」第十一號「ト」ナシ「第十一號」ヲ「第十二號」トナス

○第三章 意匠

○第一款 意匠條例施行細則

▲明治廿三年八月農商務省令第八號

明治二十二年(一月)農商務省令第二號意匠條例施行細則中左ノ通加除改
正ス

第七條ヲ「審査官ニ於テ願書明細書圖面等ニ關シ訂正又ハ照會ヲ要ス
ルトキハ特許局長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ六十日以
内ニ訂正書訂正圖面又ハ回答書ヲ差出サシムヘシ此期限内ニ差出サ、
ルトキハ出願ヲ無効トス」ト改ム

第十二條第一項中「爲スニテ」爲シ」ト改メ其下ニ「改訂意匠登錄證ハ第九
號書式ニ依リ調製シ許可ノ日ヲ以テ其日附ト爲ス」ノ三十二字ヲ加ヘ
第二項中「又ハ第十六條」ノ六字ヲ削除ス

第十四條中「第九號及第十號」ヲ「第十號及第十一號」ト改ム

第十九條中特許條例施行細則ノ下「第十三條」ノ四字ヲ加ヘ第四十九條
ノ下「及」ノ字ヲ削除シ第五十條ノ下「及第五十一條」ノ六字ヲ加フ

書式第八號中「改訂意匠登錄證」ノ七字ヲ削除シ同書式ノ次ニ左ノ書式
ヲ加ヘテ第九號トス

第九號 改訂意匠登
錄證書式

○第三類 ○商法 ○意匠條例施行細則

第何號

改訂意匠登錄證

本籍(及現住所)

何々(意匠ノ名稱)

氏 名

意匠條例ニ據リ(何某ニ)明治何年何月何日何年間ノ專用權ヲ與ヘタル登錄意匠ニ對シ本證附屬明細書圖面ノ通改訂ヲ許可スルモノ也

年 月 日

農商務大臣 氏 名印
特許局長 氏 名印

書式第九號「第十號」トシ第十號「第十一號」トス

○第四章 商標

○第一款 商標條例施行細則

▲明治廿三年八月農商務省令第九號

明治二十二年(一月)農商務省令第三號商標條例施行細則中左ノ通り加除改正ス
第六條ヲ「審査官ニ於テ願書明細書見本等ニ關シ訂正又ハ照會ヲ要ス

ルトキハ特許局長ハ其旨ヲ出願人ニ通知シ通知書ノ日附ヨリ六十日以内ニ訂正書訂正見本又ハ回答書ヲ差出サシムヘシ此期限内ニ差出サ、ルトキハ出願ヲ無効トス」ト改ム

第十一條第一項中「爲ス」ヲ「爲シ」ト改メ其下ニ「改訂商標登錄證ハ第七號書式ニ依リ調製シ許可ノ日ヲ以テ其日附ト爲ス」ノ三十二字ヲ加ヘ

第二項中「又ハ第十六條」ノ六字ヲ削除ス

第十二條中「第七號」ヲ「第八號」ト改ム

書式第六號中「改訂商標登錄證」ノ七字ヲ削除シ同書式ノ次ニ左ノ書式ヲ加ヘテ第七號トス

第七號 改訂商標登錄證書式

第何號

改訂商標登錄證

本籍(及現住所)

營業名

氏 名

商標條例ニ據リ明治何年何月何日(何某ニ)登錄ヲ許可シタル商標ニ對シ本證附屬明細書見本ノ通改訂ヲ許可スルモノ

○第三類 ○商法 ○商標條例施行細則

也

年月日

農商務大臣 氏 名印
特許局長 氏 名印

書式第七號「第八號」トス

○第五章 商業會議

○第一款 商業會議所條例

▲明治廿三年九月法律第八十一號

朕商業會議所條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

法律第八十一號

商業會議所條例

第一條 此條例ニ商業者ト稱スルハ商法第四條ニ掲ケタル商取引ノ各部類ニ屬スル商人及作業人ヲ謂フ

第二條 商業會議所ヲ設立セントスルトキハ其地ノ商業者中此條例ニ依リ會員タルヲ得ヘキ者發起人ト爲リ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ請フヘシ但發起人ノ數ハ定款ヲ以テ定ムヘキ會員ノ半數以上ナル

コトヲ要ス

地方長官ハ前項ノ申請ヲ受ケタルトキハ郡若クハ市參事會ニ諮問シ其意見ヲ徵シ尙ホ自己ノ意見ヲ添ヘ農商務大臣ニ進達スヘシ

第三條 會議所設立地ノ境界ハ市町村ノ區域ニ係ルヘシ但土地商業ノ情況ニ由リ數市町村ノ區域ヲ互ニ聯合シテ其地ニ一會議所ヲ設立スルコトヲ得

第四條 會議所ノ事務權限左ノ如シ

- 一 商業ノ發達ヲ圖リ若クハ其衰退ヲ防クニ必要ノ方案ヲ議定スルコト
- 二 商業ニ關スル法律規則ノ制定改正廢止及施行方法其他商業上ノ利害ニ關スル意見ヲ官廳ニ開申スルコト
- 三 商業ノ實況及其統計ヲ官廳ニ報告スルコト
- 四 商業ニ關スル事項ニ付官廳ノ諮問ニ應答スルコト
- 五 法律命令若クハ官ノ委任ニ依リ其地ノ公設營業所仲立人組合及商業ニ關スル諸營造物ヲ管理スルコト
- 六 仲立人ノ資格員數及手数料ヲ審査スルコト
- 七 關係人ノ請求ニ依リ其地ノ商業ニ關スル紛議ヲ仲裁スルコト

○第三類 ○商法 ○商業會議所條例

第五條 會議所設立地ノ商業者ニシテ所得稅ヲ納ムル者ハ會員ノ選舉權ヲ有ス

第六條 會議所設立地ニ於テ所得稅ヲ納ムル商業者ニシテ年齡三十歲以上ノ男子及商事會社ハ會員ノ被選舉權ヲ有ス
商事會社ヲ代表スヘキ者ハ法律上其會社ノ代理權ヲ有スル者一員ニ限ル

第七條 第五條及第六條ノ規定中會員ノ選舉權及被選舉權ニ關スル財産上ノ資格ニ付テハ農商務大臣ハ地方ノ情況ニ依リ省令ヲ以テ特ニ其所得稅ノ等級ヲ定メ又ハ他ノ國稅ヲ加フルコトヲ得

第八條 左ニ掲クル者ハ會員ノ選舉權及被選舉權ヲ有セス

- 一 瘋癲白癡ノ者
- 二 重禁錮一年以上ノ刑ニ處セラレ又ハ商業及農工ノ業ヲ妨害スル罪、財産ニ對スル罪、風俗ヲ害スル罪及信用ヲ害スル罪ヲ犯シ刑ニ處セラレ滿期後又ハ赦免後三箇年ヲ經サル者
- 三 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第九條 會員ノ數ハ十五名以上五十名以下各會議所ノ定款ヲ以テ定ムヘシ

第十條 會員ハ無給トス其任期ハ四箇年トシ毎二年其半數ヲ改選ス初回ノ解任者ハ抽籤ヲ以テ定ムヘシ

第十一條 會員當選者ハ左ニ掲クル者ヲ除ク外會議所ノ議決ヲ經スシテ其就職ヲ辭シ又ハ任期中辭職スルコトヲ得ス

- 一 疾病若クハ老衰ニ依リ職務ニ堪ヘサルコトヲ證明スル者
 - 二 營業ノ爲メ常ニ會議所設立地ニ住居スル能ハサルコトヲ證明スル者
- 第十二條 前條ノ規定ニ依ルニ非スシテ會員ノ職ヲ辭スル者ハ會議所ノ議決ヲ以テ二百圓以下ノ過怠金ヲ課スルコトヲ得

第十三條 會員ノ選舉ハ郡長若クハ市長委員ヲ命シ日時及場所ヲ定メテ施行セシム其費用ハ會議所ノ負擔トス

第十四條 會議所ノ會議ハ第四條第二項第四項及第七項ノ事件ニ係ル會議ハ公開スルコトヲ得ス

前項ノ外農商務大臣ノ命令又ハ會議所ノ議決ヲ以テ公開ヲ禁スルコトヲ得

第十五條 會議所ハ第四條第七項ノ場合ニ於テ其關係人ヨリ相當ノ手續料ヲ徵收スルコトヲ得

第十六條 會議所ハ法人トシテ財産ヲ所有スルモノトス

第十七條 會議所ハ其議決ニ依リ會員定數ノ五分一ヨリ多カテサル特別會員ヲ置キ會議ニ參列セシムルコトヲ得但特別會員ハ其議決ニ加フルコトヲ得ス

特別會員ノ資格ハ學術技藝若クハ商業上ノ經驗アル者タルヘシ

第十八條 會議所經費ノ豫算ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

豫算ノ決算ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ報告スヘシ

第十九條 會議所ノ經費ハ會員ノ選舉權ヲ有スル者ヨリ徴收ス其徴收方法ハ會議所ノ議決ヲ以テ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

經費ヲ納期ニ納メサル者アルトキハ其地ノ地方稅收入役ニ囑託シテ之ヲ徴收スルコトヲ得

收入役ノ督促ヲ受クルモ經費ヲ納メサル者ハ會員ノ選舉權及被選舉權ヲ四箇年以上八箇年以下停止シ尙ホ二百圓以下ノ過料ニ處ス

第二十條 會議所ノ定款ハ會議所ノ議決ヲ以テ左ノ事項ヲ規定シ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

一 會員選舉規則

二 議事規則

三 庶務規程

四 役員職務權限

五 仲裁規則

六 會計規則

七 公設ノ營造物若クハ其營業所ノ管理規則

第二十一條 農商務大臣ハ會議所其權限ヲ犯シ又ハ商業上有害ノ行爲アリト認メタルトキハ會議ヲ停止シ尙ホ其情況ニ依リ役員若クハ會員ノ幾部又ハ全部ノ改選ヲ命スルコトアルヘシ

第二十二條 農商務大臣ハ此條例施行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令ヲ發スヘシ

▲明治廿三年十月農商務省令第十七號

東京市ニ於テハ商業會議所條例第五條及第六條中所得稅ノ等級ヲ明治二十年(二月)勅令第五號所得稅法第四條ノ第四等以上トス

○第二款 商業會議所條例施行規則

▲明治廿三年九月農商務省令第十二號

○第三類 ○商法 ○商業會議所條例施行規則

○農商務省令第十二號

商業會議所條例施行規則左ノ通相定ム

商業會議所條例施行規則

第一條 商業會議所設立ノ申請書ニハ左ノ事項ヲ記載シ會員選舉規則及ヒ設立費用ノ豫算ヲ添ヘ認可ヲ請クヘシ

一 會議所ノ名稱

二 設立地ノ區域

三 設立地ノ商業者中會員ノ選舉權ヲ有スル者及被選舉權ヲ有スル者ノ概數

四 會員ノ定數

第二條 設立認可ヲ得タルトキハ發起人ニ於テ其旨公告シ商業會議所條例第五條及ヒ第六條ニ依リ會員選舉人及被選舉人ノ名簿ヲ六十日以内ニ調製シ認可ニ係ル書類ヲ添ヘ其地ノ郡長若クハ市長ニ會員選舉ノ施行ヲ求ムヘシ

但設立地ノ區域數市町村ニ亘ルトキハ會議所ヲ建設スヘキ地ノ郡長若クハ市長ニ請求スヘシ

第三條 會議所設立發起人又ハ會議所ヨリ會員選舉施行ノ請求ヲナシタ

ルトキハ郡長若クハ市長ハ十五日以内ニ選舉委員五名ヲ命シ少クトモ十五日以上ノ豫告ヲナシ其選舉ヲ施行セシムヘシ

第四條 第一條ノ申請書ニ依リ認可ヲ得タル會員ノ定數會員選舉規則及第二條ニ依リ調製シタル會員選舉人及被選舉人名簿ハ會議所定款認可ノ日マテ効力ヲ有スルモノトス

第五條 會議所又ハ其ノ設立發起人ニ於テ會員選舉人及被選舉人名簿ヲ調製スルトキ其ノ納稅額並年齡ノ調査ニ付テハ地方長官ノ證明ヲ受クヘシ

第六條 會議所ノ定款ハ會員選舉ノ後六十日以内ニ議定シテ認可ヲ請クヘシ

第七條 (明治廿四年三月農商務省令第三號ヲ以テ追加) 第二條及第六條規定ノ期限内ニ其手續ヲ爲シ能ハサルトキハ事由ヲ詳記シ其期限内ニ延期ヲ請フコトヲ得

▲明治廿三年十二月農商務省訓令第六十八號 府縣 (沖繩縣ヲ除ク) 明治二十三年(九月)農商務省令第十二號商業會議所條例施行規則第三條ニ依リ會員ノ選舉ヲ終リタルトキハ選舉ヲ施行シタル郡長若クハ市長ヲシテ左ノ手續ヲ執行セシムヘシ

○第三類○商法○商業會議所條例施行規則

一 會員當選者ニ當選ノ通知書ヲ交付スヘシ但商事會社ニハ通知書ヲ交
付スルト同時ニ其代表人ノ氏名ノ届出ヲ命スヘシ
二 選舉ニ關スル書類物件ハ會議所ニ引繼クヘシ
三 最初ノ選舉ヲ施行シタルトキハ其選舉ヲ終リタル日ヨリ十五日以内
ニ時日場所ヲ指定シ會員當選者ヲ召集シ初回ノ會議ヲ開カシムヘシ

○第六章 銀行

○第一款 日本銀行條例

▲明治廿三年八月法律第六十一號

朕日本銀行條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ商法實
施ノ日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

御名 御璽

法律第六十一號

日本銀行條例中左ノ通改正ス

第十九條 理事ハ株主總會ニ於テ選舉シ大藏大臣之ヲ命シ監事ハ株主
總會ニ於テ之ヲ選舉ス

理事ノ任期ハ四年トシ監事ノ任期ハ二年トス

理事監事ハ任期中他ノ銀行又ハ會社等ノ役員タルヲ許サス

第二十條 總裁ハ每半期ニ通常株主總會ヲ召集ス

總裁ハ臨時ノ事項ヲ議スル爲メ必要ト認ムルトキハ臨時株主總會ヲ
召集ス

總裁ハ監事ノ全員又ハ株主總會ノ會員タル者五十名以上ヨリ會議ノ
目的ヲ示シテ請求スルトキハ臨時株主總會ヲ召集セサルヲ得ス
株主總會ノ會員ハ開會ノ六十日前ヨリ引續キ十株以上ヲ所有スル者
ニ限ル

株主總會ニ於テハ會員ニ代理ヲ委託スルノ外他人ヲ以テ代理人トナ
スコトヲ得ス

株主總會ノ會員ハ株數十個ニ付投票一箇ノ權利ヲ有ス十一株以上ハ
五十株毎ニ一箇ノ投票權ヲ增加ス但他人ノ代理委託ヲ受クル者ハ其
代理ニ屬スル權利ハ十箇以上ヲ超ユルコトヲ得ス

○第二款 銀行條例

▲明治廿三年八月法律第七十二號

朕銀行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日
ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

○第三類○商法○日本銀行條例○銀行條例